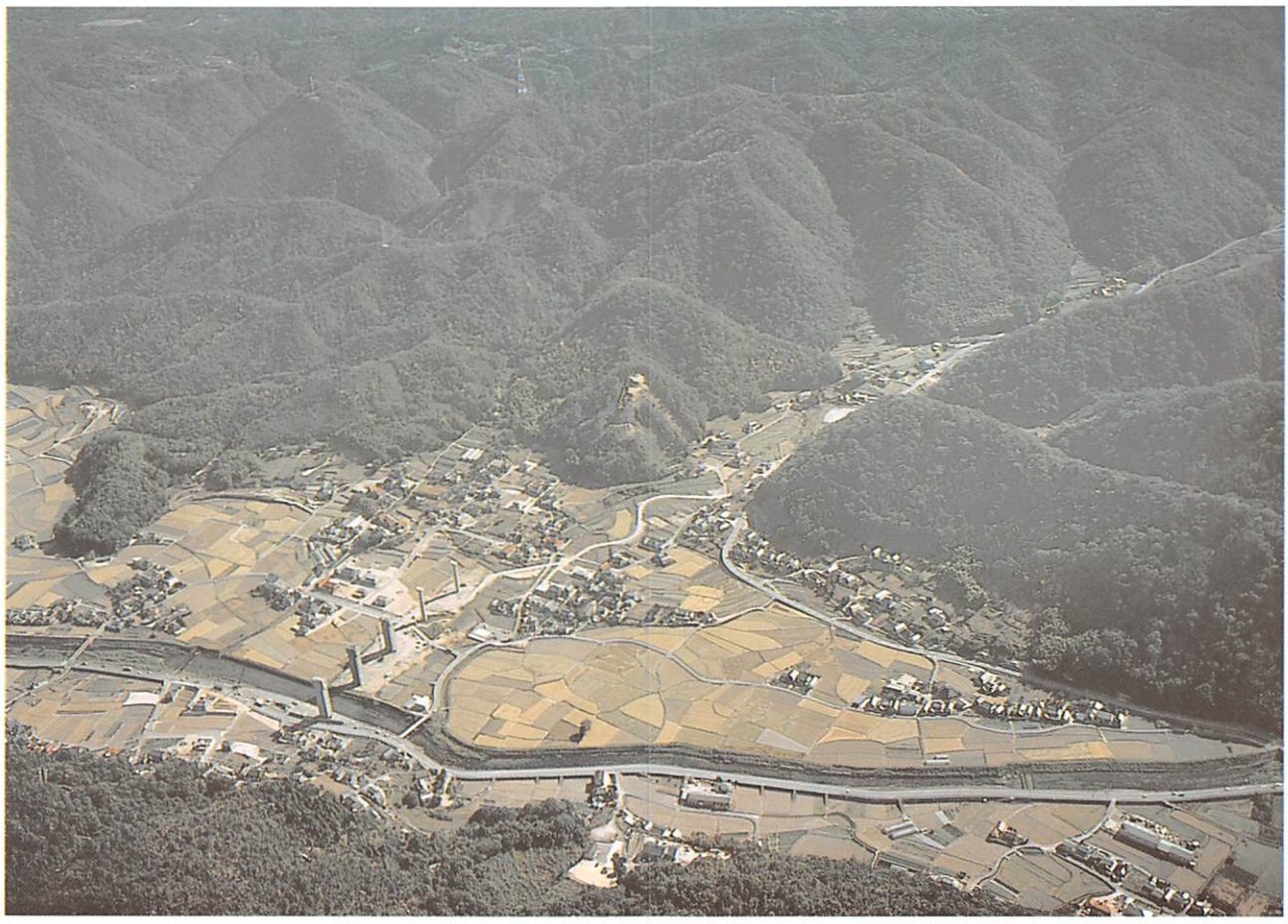
財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第18集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）

曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）

２００６

財団法人　広島県教育事業団



a　遺跡周辺空中写真（北西上空から）

b　ＳＢ２完掘（北東から）

a　ＳＫ１遺物出土状況（北から）

b　ＳＢ３完掘（南から）

例　　言

1　本報告書は平成14(2002)，15(2003)年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る曽川１号遺跡（尾道市御調町大町字曽川所在）の発掘調査報告である。

2　発掘調査は日本道路公団中国支社との委託契約により平成14年度は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施し，平成15年度は平成15年４月１日に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は次のものが担当した。

平成14年度　Ａ地区

下津間康夫（現・府中市教育委員会）

鈴木　康之（現・広島県立歴史博物館）

鍜治　益生

唐口　勉三

葉杖　哲也（現・広島県教育委員会文化課）

平成15年度　Ｂ～Ｄ地区

青山　　透（現・広島県立歴史民俗資料館）

山田　繁樹

沢元　保夫（現・財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）

4　出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は，青山・伊藤実・沢元・古瀬裕子（現・広島県立歴史博物館）・山田が中心となって行った。

5　本書はⅣ-５，Ⅴ-４を伊藤，その他を古瀬が執筆し，編集は青山・古瀬が行った。

6　本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。

ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡，ＳＫ：土坑，ＳＤ：溝，ＳＸ：性格不明の遺構，

Ｐ：柱穴

7　本遺跡の石器石材の鑑定は，考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼観察による。

8　図版と挿図の遺物番号は同じである。

9　第１図は国土地理院発行の1:25,000の地形図（府中・垣内・甲山・三成）を縮小して使用した。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 3

Ⅲ　調査の概要 …… 6

Ⅳ　遺構と遺物 …… 9
　1　弥生時代の遺構 …… 9
　2　古墳時代～古代の遺構 …… 18
　3　中世以降の遺構 …… 26
　4　その他時期不明の遺構 …… 31
　5　遺　　物 …… 34

Ⅴ　まとめ …… 59
　1　遺構の時期 …… 59
　2　集落の変遷 …… 60
　3　曽川１号遺跡の住居形態 …… 61
　4　備後南部の弥生後期土器における曽川１号遺跡ＳＫ１出土土器の位置　62

巻　頭　図　版

巻頭図版１　a　遺跡周辺空中写真（北西上空から）
　　b　ＳＢ２完掘（北東から）
巻頭図版２　a　ＳＫ１遺物出土状況（北から）
　　b　ＳＢ３完掘（南から）

挿　図　目　次

第１図　曽川１号遺跡周辺遺跡分布図(1:50,000) …… 4
第２図　曽川１号遺跡位置図及び周辺地形図(1:2,000) …… 7
第３図　曽川１号遺跡地区及び遺構配置図(1:300) …… 8
第４図　曽川１号遺跡ＳＢ１実測図(1:60) …… 10
第５図　曽川１号遺跡ＳＫ１実測図(1:30) …… 11
第６図　曽川１号遺跡ＳＫ２実測図(1:30) …… 12
第７図　曽川１号遺跡ＳＢ２実測図(1:60) …… 14
第８図　曽川１号遺跡ＳＢ３実測図(1:60) …… 15
第９図　曽川１号遺跡ＳＫ３実測図(1:40) …… 16
第10図　曽川１号遺跡ＳＫ４実測図(1:40) …… 17
第11図　曽川１号遺跡ＳＫ５実測図(1:20) …… 18
第12図　曽川１号遺跡ＳＢ４実測図(1:60) …… 19
第13図　曽川１号遺跡ＳＢ５実測図(1:60) …… 21
第14図　曽川１号遺跡ＳＢ６実測図(1:60) …… 22
第15図　曽川１号遺跡ＳＢ７実測図(1:60) …… 22
第16図　曽川１号遺跡ＳＫ６実測図(1:30) …… 23
第17図　曽川１号遺跡ＳＤ１実測図(1:40) …… 24
第18図　曽川１号遺跡ＳＸ１実測図(1:60) …… 25
第19図　曽川１号遺跡ＳＢ８実測図(1:80) …… 27
第20図　曽川１号遺跡ＳＢ９・１０，ＳＤ４実測図(1:80) …… 29
第21図　曽川１号遺跡ＳＫ７実測図(1:30) …… 30
第22図　曽川１号遺跡ＳＫ８実測図(1:30) …… 31
第23図　曽川１号遺跡ＳＫ９実測図(1:30) …… 32

第24図　曽川１号遺跡ＳＫ１０実測図(1:30) …… 32
第25図　曽川１号遺跡ＳＫ１１実測図(1:30) …… 33
第26図　曽川１号遺跡Ａ地区Ｔ５-Ｐ１１実測図(1:30)…… 33
第27図　曽川１号遺跡ＳＢ１出土遺物実測図１(1:3)…… 35
第28図　曽川１号遺跡ＳＢ１出土遺物実測図２(1:3)…… 36
第29図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図１(1:3, 1:4)…… 37
第30図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図２(1:3, 1:4)…… 38
第31図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図３(1:3, 1:4)…… 39
第32図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図４(1:3)…… 40
第33図　曽川１号遺跡ＳＫ２出土遺物実測図(1:3)…… 41
第34図　曽川１号遺跡ＳＢ２出土遺物実測図(1:2, 1:3)…… 42
第35図　曽川１号遺跡ＳＢ３出土遺物実測図１(1:3, 1:4)…… 44
第36図　曽川１号遺跡ＳＢ３出土遺物実測図２(1:2)…… 45
第37図　曽川１号遺跡ＳＢ３出土遺物実測図３(1:3)…… 46
第38図　曽川１号遺跡ＳＫ３出土遺物実測図(1:3)…… 47
第39図　曽川１号遺跡ＳＫ４出土遺物実測図(1:3)…… 47
第40図　曽川１号遺跡ＳＫ５出土遺物実測図(1:4)…… 48
第41図　曽川１号遺跡ＳＢ５出土遺物実測図(1:3)…… 49
第42図　曽川１号遺跡ＳＫ６出土遺物実測図(1:3)…… 50
第43図　曽川１号遺跡ＳＤ１出土遺物実測図(1:1, 1:2, 1:3)…… 50
第44図　曽川１号遺跡ＳＸ１出土遺物実測図(1:6)…… 51
第45図　曽川１号遺跡ＳＢ８・９，ＳＤ４出土遺物実測図(1:3)…… 52
第46図　曽川１号遺跡ＳＫ７出土遺物実測図(1:3)…… 53
第47図　曽川１号遺跡地区内柱穴出土遺物実測図(1:3)…… 53
第48図　曽川１号遺跡地区内出土遺物実測図(1:3)…… 55
第49図　曽川１号遺跡出土土器編年図(1:9, 1:12) …… 64・65

図　版　目　次

図版　1　a　調査前遠景（東から）
　　b　Ａ～Ｄ地区調査前近景（西から）
　　c　Ａ地区東西畦南壁断面，調査風景
図版　2　a　Ａ地区北側調査後近景（北西から）
　　b　Ａ地区東側調査後近景（北から）
　　c　Ａ地区南側調査後近景（北東から）
図版　3　a　Ｂ地区調査後全景（南東から）
　　b　Ｃ地区調査後全景（北から）
　　c　Ｄ地区調査後全景（北から）
図版　4　a　ＳＢ１完掘（東から）
　　b　ＳＢ１中央ピット完掘（南から）
　　c　ＳＢ１石製品出土状況（東から）
図版　5　a　ＳＫ１遺物出土状況（西から）
　　b　ＳＫ１完掘（西から）
　　c　ＳＫ２完掘（北西から）
図版　6　a　ＳＢ２土層断面（南から）
　　b　ＳＢ２完掘（西から）
　　c　ＳＢ３土層断面（西から）
図版　7　a　ＳＢ３北西部土器出土状況（西から）
　　b　ＳＢ３南東部土器出土状況（西から）
　　c　ＳＢ３南西部土器出土状況（西から）
図版　8　a　ＳＢ３完掘（南から）
　　b　ＳＫ３土層断面（西から）
　　c　ＳＫ３完掘（北西から）
図版　9　a　ＳＫ４土層断面（北東から）
　　b　ＳＫ５遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＫ５完掘（南から）
図版１０　a　ＳＢ４土層断面（南西から）
　　b　ＳＢ４中央ピット（南から）
　　c　ＳＢ４住居内石（西から）
図版１１　a　ＳＢ４完掘（南から）
　　b　ＳＢ５土層断面（南西から）
　　c　ＳＢ５完掘（南東から）

図版１２　a　ＳＢ６土層断面（北から）
b　ＳＢ６完掘（東から）
c　ＳＢ７完掘（南西から）
図版１３　a　ＳＤ１完掘（西から）
b　ＳＸ１須恵器出土状況（東から）
c　ＳＸ１礫群検出状況（東から）
図版１４　a　ＳＸ１完掘（北東から）
b　ＳＢ８Ｐ３検出状況（北西から）
c　ＳＢ８Ｐ４検出状況（西から）
図版１５　a　ＳＫ７遺構検出状況（北から）
b　ＳＢ９・１０遺構検出状況（南西から）
c　ＳＫ１０遺構検出状況（東から）
図版１６　a　ＳＫ８土層断面（南東から）
b　ＳＫ８遺構検出状況（北西から）
c　ＳＫ８完掘（北西から）
図版１７　a　ＳＫ９土層断面（南から）
b　ＳＫ９遺構検出状況（西から）
c　Ａ地区Ｔ５-Ｐ１１土層断面（南西から）
図版１８　ＳＢ１出土遺物
図版１９　ＳＫ１出土遺物１
図版２０　ＳＫ１出土遺物２
図版２１　ＳＫ１出土遺物３
図版２２　ＳＢ２出土遺物
図版２３　ＳＢ３出土遺物１
図版２４　ＳＢ３出土遺物２
図版２５　ＳＫ１・３・５出土遺物
図版２６　ＳＫ４・６，ＳＢ５，ＳＤ１，地区出土遺物
図版２７　ＳＢ８・９，ＳＤ４，ＳＫ７出土遺物
図版２８　柱穴・地区出土遺物

表　目　次

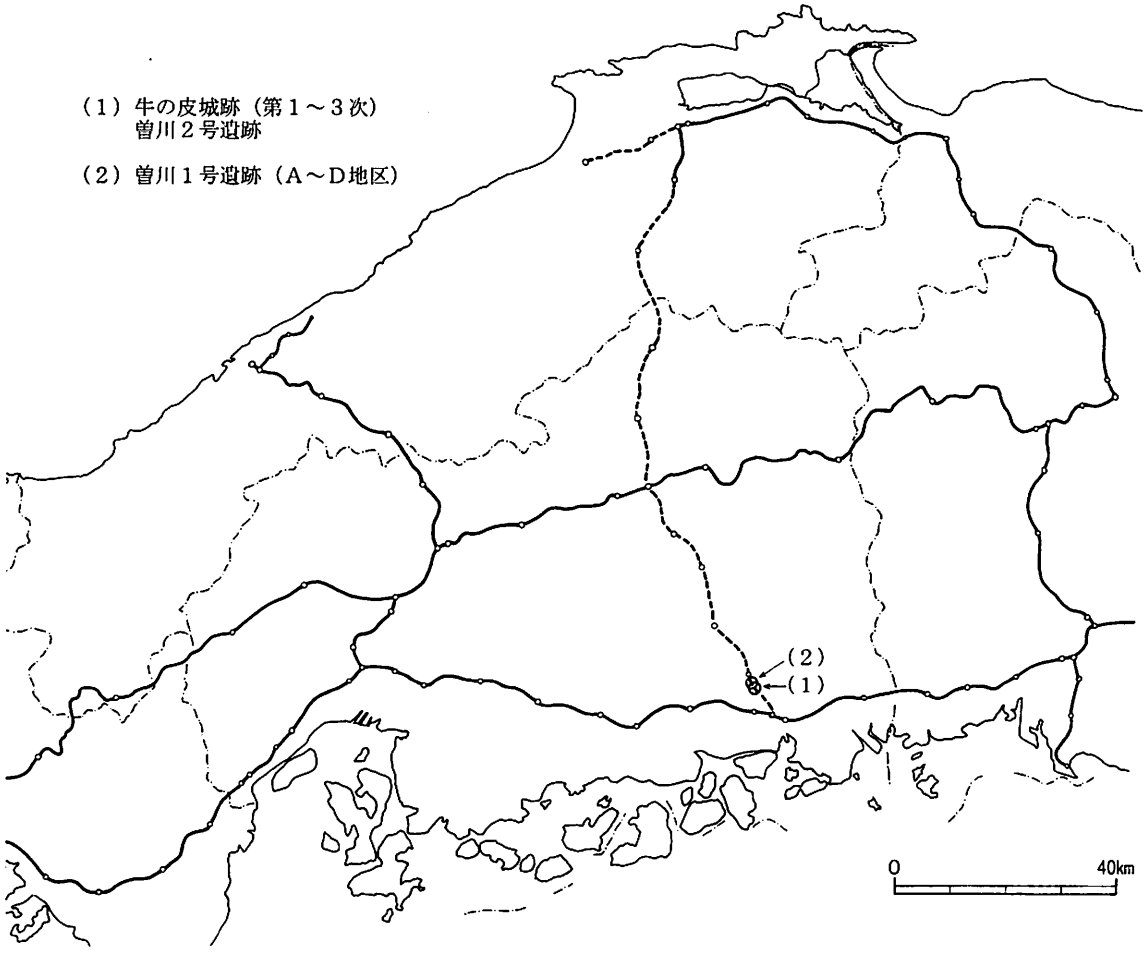
第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一覧 …… 2
第２表　曽川１号遺跡調査地区名称一覧 …… 5
第３表　遺構一覧表 …… 57
第４表　掲載遺物一覧表 …… 58

Ⅰ はじめに

中国横断自動車道尾道松江線は瀬戸内海沿岸の尾道市から三次市を経て日本海側の松江市に至る延長約137kmの高速自動車道である。山陽自動車道・中国縦貫自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道と接続して中国・四国地方の広域的な交通ネットワークを形成し，沿線地域の産業・経済・文化の発展に重要な役割を果たすことを目的として計画された。

事業者である日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」）と広島県教育委員会（以下「県教委」）は，平成11(1999)年７月から予定路線内の文化財等の有無及び取り扱いについて協議を始めたが，予定路線内には多くの埋蔵文化財の存在が予想された。

県教委の踏査及び試掘調査の結果，尾道市御調町（旧御調郡御調町）内の予定路線範囲については曽川１号遺跡，曽川２号遺跡，城根遺跡，牛の皮城跡の存在が明らかとなった。県教委はこれらの遺跡等について現状保存できない遺跡等については発掘調査が必要の旨道路公団に対し回答した。



中国横断自動車道尾道松江線路線図〈（１），（２）は報告書番号を示す〉

これを受けて道路公団は，平成14年７月から工事の優先する個所ごとに文化財保護法第57条の３に基づく埋蔵文化財発掘通知を県教委に順次提出するとともに，発掘調査の実施を平成14年９月以降，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター及び平成15年４月よりその業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下「事業団」）に，順次依頼した。センター及び事業団では依頼を受けて発掘調査を実施してきている。牛の皮城跡・曽川２号遺跡については平成17年３月に尾道松江線に伴う発掘調査報告の第１冊目として報告した。

本書は平成14・15年度にセンター及び事業団が道路公団と委託契約し，発掘調査を実施した曽川１号遺跡のうち南端部のＡ～Ｄ地区の調査成果をまとめたものである。Ａ～Ｄ地区の調査は，Ａ地区を平成14年10月21日～平成15年１月17日，Ｂ・Ｃ地区を平成15年４月７日～５月23日，Ｄ地区を平成16年１月６日～２月５日にそれぞれ実施した。曽川１号遺跡は今後も発掘調査が進行している状況であり，弥生時代後期を中心としたこの地域の全体像が次第に明らかになってきている。今後の埋蔵文化財の資料として，また，当該地域の歴史の一端を知る助けとなれば幸いである。

なお，平成17年10月１日に日本道路公団は解散され，中国横断自動車道尾道松江線建設事業は西日本高速道路株式会社に受けつがれている。発掘調査にあたっては，西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所，尾道市教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

報告書	遺跡名（第　次）		地区名等	調査期間	所在地	時　期	内容
（１）第12集	牛の皮城跡（北郭群）	（第１次）	畝状竪堀群	平成15年１月20日～３月14日	尾道市御調町大町字二ノ丸	中世	山城跡
		（第２次）	郭群	平成15年７月７日～10月31日			
		（第３次）	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曽川２号遺跡			平成15年１月20日～３月７日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
（２）第18集（本書）	曽川１号遺跡	（Ａ地区）	（旧・平成14年度調査区）	平成14年10月21日～平成15年１月17日	尾道市御調町大町字曽川	弥生・古墳時代～中世	集落跡
		（Ｂ地区）	（旧・Ｐ２第一）	平成15年４月７日～５月23日			
		（Ｃ地区）	（旧・Ｐ２第二）				
		（Ｄ地区）	（旧・Ｐ１）	平成16年１月６日～２月５日			

（報告書）

（１）財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『牛の皮城跡・曽川２号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第12集　2005年

（２）財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）　曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第18集　2006年

Ⅱ　位置と環境

曽川１号遺跡は，尾道市御調町大町に所在する。

尾道市は県東南部に位置し，平成17(2005)年３月に旧御調郡の二町（御調町・向島町）を編入合併して面積200平方キロメートル，人口10万人を超える市となった。御調町は尾道市の北部にあたり，東は府中市，西は三原市，北は世羅郡世羅町と接している。町の北西側及び南東側は標高300～600m前後の山々が連なり，町域の南西から北東に流れる芦田川の支流御調川とその支流の小河川が形成した平坦地・谷部に集落が形成されている。

旧石器時代～縄文時代　町内では旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代では，曽川１号遺跡Ｅ地区[1]の平成15(2003)年度の調査で後期前半から中頃の土器がまとまって出土し，今回報告の曽川１号遺跡Ａ地区では晩期の土器片が出土しているが，今のところ遺構は確認されていない。

弥生時代　弥生時代になると，御調川北岸を中心に，弥生土器や磨製石斧が採集された遺跡が数多く存在する。しかし調査例は少なく，丸門田の本郷平廃寺の調査によって中期の土器が出土している[2]ほかは各所で採集された土器は後期のものがほとんどである。曽川１号遺跡では，弥生時代後期～終末期の円形や隅丸方形の竪穴住居跡や土坑を検出し，この時期には集落が形成されていたことをうかがわせ，備後固有の土器のほかに吉備や山陰からの搬入品とみられる土器が出土していることから，他地域との交流も行われていたと考えられる。曽川１号遺跡と御調川を挟んだ北側の貝ヶ原遺跡[3]では古式の特殊器台が出土しており，御調川流域でも墳丘墓に葬られる有力な首長が現れたことを示している。

古墳時代　古墳時代になると，数多くの古墳が確認されているが調査例は少ない。古墳は，御調川の北側で多く確認されている。交通の要衝である市周辺では埋葬主体が箱形石棺をもつ古墳と横穴式石室をもつ古墳が混在しているが，その他の地域では横穴式石室をもつ古墳がほとんどである。これらの古墳を生み出した集落については調査例が少なく明らかにしがたいが，曽川１号遺跡では６世紀の方形の竪穴式住居跡を検出している。

古代　古代の遺跡としては，昭和60～63年度に本郷平廃寺[4]が調査されている。調査の結果，７世紀末に創建された備後南部地域で最も古い寺院のひとつであることが確認された。

集落跡では平成14年に調査した曽川２号遺跡[5]がある。曽川２号遺跡では，掘立柱建物跡１棟，土坑１基，多数の柱穴を検出し，土坑から柱状高台付皿が備後地域では初めて出土した。12世紀前後の遺跡と考えられる。曽川１号遺跡では８～９世紀頃の製塩土器の破片が出土している。

中世以降　中世になると，この地域は現在の世羅郡世羅町を中心とした地域に所在した高野山領大田庄とその倉敷地である尾道とを結ぶ南北の交通路となり，近世の石州街道へと発展していく。また山陽道も御調川沿いを東西にとおっているため，交通の要衝として栄えた。

中世の遺跡としては，山城跡が多く存在する。末近城跡[6]と牛の皮城跡[7]で発掘調査が行なわれて

1　**曽川１号遺跡**
2　牛の皮城跡
3　曽川２号遺跡
4　本郷平廃寺跡
5　高尾１号遺跡
6　高尾２号遺跡
7　高尾西遺跡
8　土木屋遺跡
9　後口山遺跡
10　神西遺跡
11　大慶寺遺跡
12　後呂谷遺跡
13　貝ヶ原遺跡
14　天神山古墳群
15　高尾古墳群
16　後口山古墳
17　高神古墳群
18　正尺山古墳群
19　高尾西古墳群
20　明神山古墳群
21　梅ノ木古墳群
22　小猿古墳
23　中倉谷古墳
24　七ツ塚古墳群
25　神古墳群
26　神西古墳群
27　貝ヶ原古墳群
28　ムカデ岩山口古墳群
29　河崎古墳
30　要谷山古墳
31　城の東古墳
32　市山古墳群
33　東中倉古墳群
34　大羽谷古墳群
35　隠れ迫窯跡
36　城根遺跡
37　合山火葬墓
38　未近城跡
39　上田城跡
40　福元山城跡
41　正尺山城跡
42　福丸城跡
43　丸山城跡（津蟹城跡）
44　峠山城跡
45　丸山城跡（勝場山城跡）
46　雲雀城跡
47　古城跡
48　古城跡
49　天神遺跡
50　明神沖遺跡
51　上千堂遺跡

第１図　曽川１号遺跡周辺遺跡分布図（1:50,000）

いる。また，上田城跡及び福丸城跡で牛の皮城跡と同様の畝状竪堀がみられる。

末近城跡は，平成13(2001)年に調査された御調川の支流野間川を臨む丘陵上に位置する小規模な城跡である。調査の結果，領主の支配拠点というより「村の城」として築かれた可能性が高いとされた。牛の皮城跡は南北の郭群からなり，北郭群を平成14・15(2002・2003)年度に調査した。北西側に14本の畝状竪堀，東側に９本の畝状竪堀，南東側に堀切２本，西側に竪堀１本を配置している。

註

（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（当調査室の前身）が平成14年度に，当調査室が平成15・16年度に調査している。
（2）川越哲志「本郷平廃寺跡出土の弥生土器」広島県御調町教育委員会『本郷平廃寺』 1989年
（3）潮見　浩「貝ケ原遺跡出土の特殊器台形土器」広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』第17集　1991年
（4）広島県御調町教育委員会『本郷平廃寺』 1989年
（5）財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第12集　2005年
（6）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第201集　2002年
（7）註（5）に同じ。

第２表　曽川１号遺跡調査地区名称一覧

調査期間		調査時名称	報告名称	事業名	報告書
年度	月日				
平成１４年度	10月21日～１月17日	平成14年度調査区	A地区	**中国横断自動車道尾道松江線建設事業**	（2）第18集
平成１５年度	４月７日～５月23日	Ｐ２第一	B地区		
		Ｐ２第二	C地区		
	12月1日～12月19日	Ｐ４	E地区		
	１月６日～２月５日	Ｐ１	D地区		（2）第18集
平成１６年度	４月14日～４月28日	防火水槽	F地区	大町地区防火水槽設置事業	第13集＊
	６月７日～８月６日	Ｐ３	G地区	**中国横断自動車道尾道松江線建設事業**	
		Ｐ３側道	H地区		
		Ｐ４側道	I地区		
	１月11日～３月４日	Ｐ２	J地区		
平成１７年度	４月11日～８月12日		K地区		
	７月11日～10月７日		L地区	一般国道486号道路改良工事	

＊　財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『曽川１号遺跡　大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化発掘調査報告書』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第13集　2005年

Ⅲ　調査の概要

曽川１号遺跡は尾道市御調町大町字曽川に所在する。遺跡は御調川の南側，牛の皮城が築かれた丘陵の裾部に立地し，調査前は竹藪・果樹園・畑地として利用されていた。西側には御調川に注ぐ江国川が北流し，標高は75～85mで，御調川との比高は15～25mである。

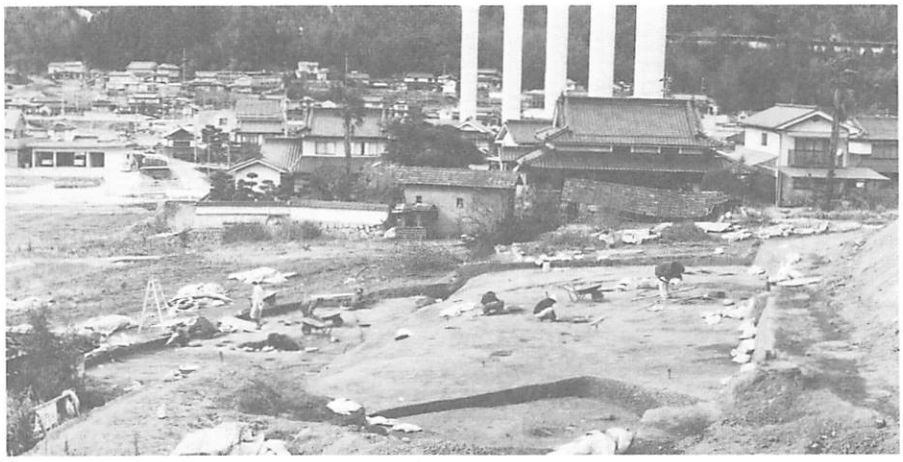
曽川１号遺跡は工事の優先順に調査を行ってきたため，調査個所が散在し，調査個所名も統一されていなかった。このため，本報告書作成にあたって調査時期の順に地区名を付した（第１表及び第２・３図参照）。今後はこの地区名を使用する。

調査は平成14年度にＡ地区から開始し，国土座標に沿って10m×10mのグリッドを設定し，各グリッドは北から南にアルファベット，西から東に数字で表し，北西隅の杭名称を各グリッドの名称とした。地区中央に設定した東西方向のトレンチで，旧地形が東から西へ傾斜しており，西側を盛土によって整地していることが確認できた。平成15年度にはＢ～Ｄ地区の調査を行った。

調査の結果，竪穴住居跡７棟，掘立柱建物跡３棟，土坑11基，溝４条のほか多数の柱穴などを確認した。検出した柱穴の数からすると，復元できなかった建物跡も多かったと思われる。竪穴住居跡の時期は弥生時代後期から古墳時代後期，掘立柱建物跡の時期は中世と思われる。土坑の時期は弥生時代後期，古墳時代後期及び中世で，溝の時期は古代，中世と思われる。縄文時代晩期の土器片が出土した柱穴もあり，遺跡一帯は，縄文時代から長期間にわたり集落が営まれたと考えられる。

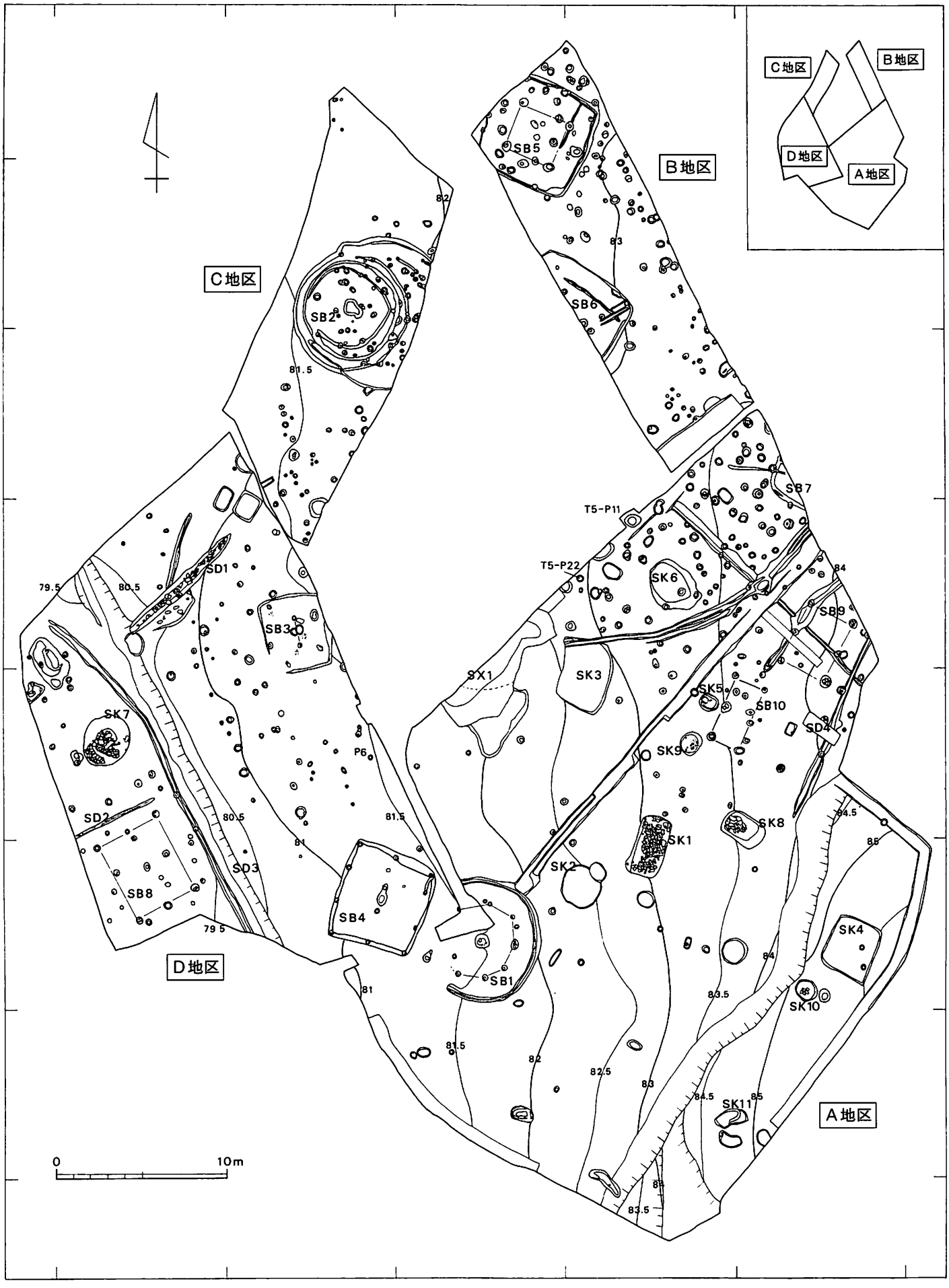
出土遺物は，土器類（縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，製塩土器，土師質土器，瓦器，瓦質土器），陶磁器，土製品（土玉，紡錘車，土錘），石製品（砥石），ガラス製品（小玉），古銭，鉄滓などが出土している。

なお，報告にあたっては，遺構はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区を一体としてまとめ，年代順に報告する。１弥生時代の遺構，２古墳時代～古代の遺構，３中世以降の遺構，４その他時期不明の遺構に大別し，遺物は主な遺構別に報告する。



Ｄ地区調査風景
後方の白い柱は自動車道の橋脚

第2図　曽川1号遺跡位置図及び周辺地形図（1:2,000）



第3図　曽川1号遺跡地区及び遺構配置図（1:300）

Ⅳ　遺構と遺物

1　弥生時代の遺構

（1）ＳＢ１（第４図，図版４）

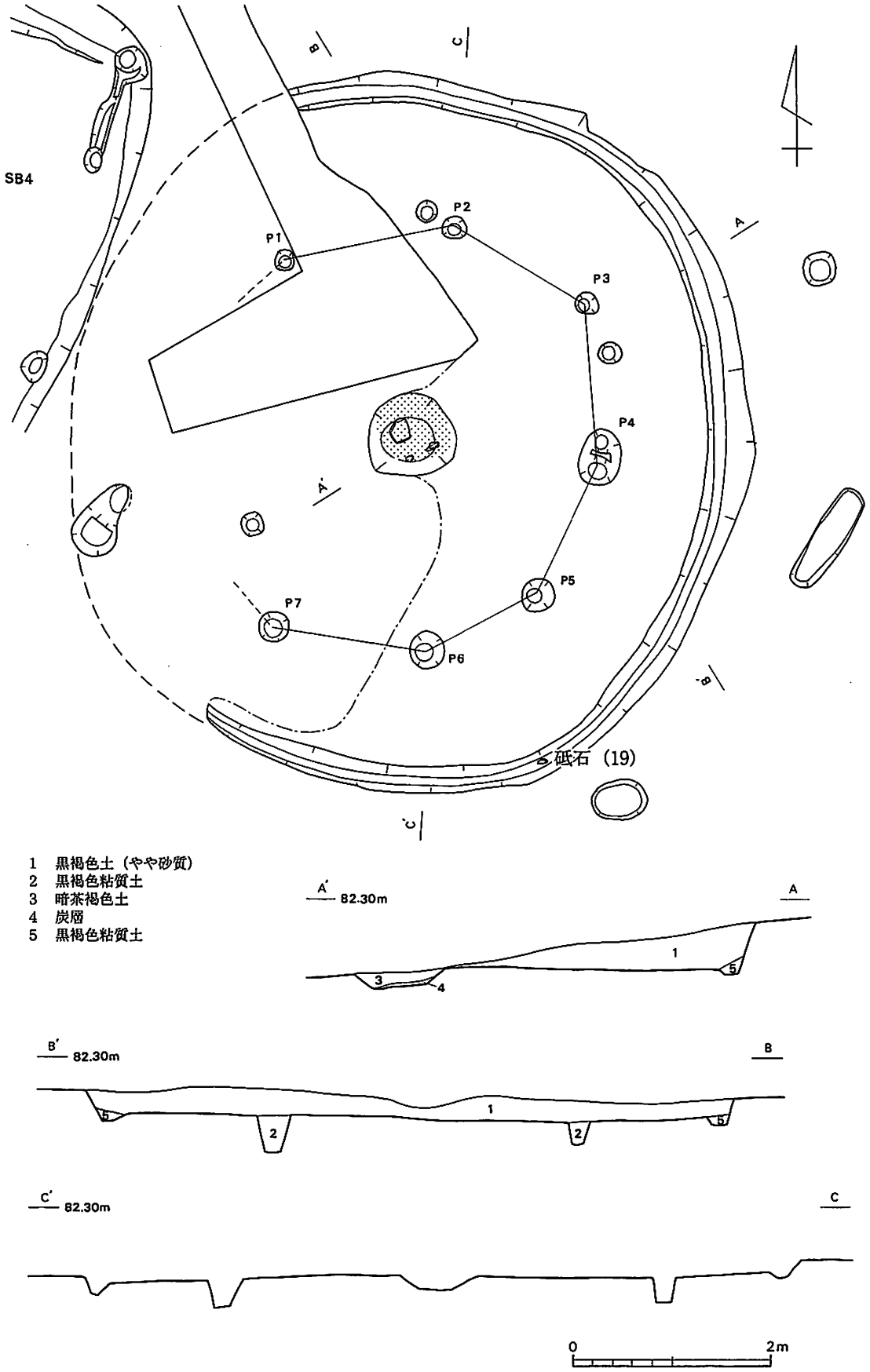
Ａ地区とＤ地区の境に位置し，ＳＢ４に隣接する竪穴住居跡である。当初Ａ地区の調査では西側約１/４は調査範囲外であったが，Ｄ地区の調査で柱穴１個（Ｐ１）を検出するとともに，断面で住居跡の床面を確認した。平面形態は直径約７ｍの円形で，西側１/３を除いて壁溝が巡る。壁高は20～50cmで，壁溝は上端幅25～35cm，深さ４～７cmである。

主柱穴は現状で７個，西側にさらに２個程度あったと考えられる。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２が1.8m，Ｐ２－Ｐ３が1.5m，Ｐ３－Ｐ４が1.6m，Ｐ４－Ｐ５が1.4m，Ｐ５－Ｐ６が1.35m，Ｐ６－Ｐ７が1.55mである。柱穴の規模はＰ１が径20cm，深さは30cm，Ｐ２が径20cm，深さは43cm，Ｐ３が径25cm，深さは40cm，Ｐ４が長径58cm，短径40cm，深さは40cm，Ｐ５が径35cm，深さは38cm，Ｐ６が径35cm，深さは33cm，Ｐ７が径30cm，深さは30cmである。

住居跡中央に90×85cmの土坑があり，坑底は焼けていないが，約５cmの厚さの炭層があり，炉跡と考えられる。炭層の上に20×20×10cmの石が置かれていた。

出土遺物としては，弥生土器の壺（１・２）・甕（３～10，14・15）・鉢（11～13）・器台（16～18）などがあり，東南の壁溝内から有孔砥石（19）が出土した。この住居跡の時期は，出土土器の特徴から弥生時代後期中葉頃と考えられる。

ＳＢ１調査風景



第４図　曽川１号遺跡ＳＢ１実測図（1:60）
（アミ目は炭化物の範囲）

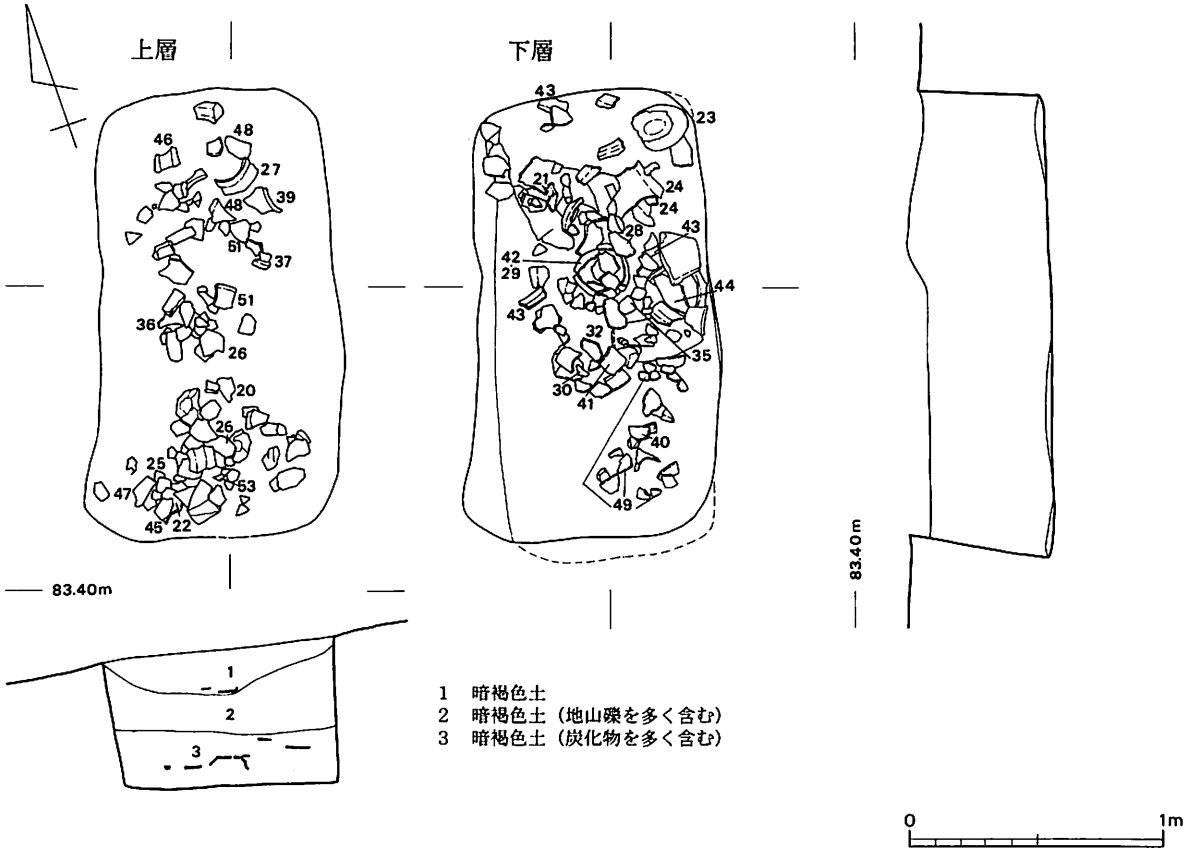
（2）ＳＫ１（第５図，巻頭図版２，図版５）

Ａ地区の中央，ＳＫ２とＳＫ８の間に位置する土坑である。平面形態は隅丸の長方形で，上面で長軸1.54～1.64m，短軸0.78～0.87m。底面では長軸1.84m，短軸0.85m。南辺はオーバーハングしている。深さは40～60cmであるが，坑底面は平坦である。長軸の主軸方向はN17°Ｅである。

ＳＫ１の内部からは多量の土器片とともに，小児頭大から拳大の礫が一括して投棄されたと思われる状況で出土した。土層は大きく３層に分かれ，遺物は上層と下層で出土した。下層は炭化物や灰を多く含んでいる。

出土遺物としては，弥生土器の壺(20～32，53)，甕(33～41)，鉢(42～48)，高杯(49)，器台(50・51)，手づくね土器(52)などがある。土器は二つの層から出土したが，いずれも時期的には弥生時代後期後葉のなかに納まると思われる。

東広島市豊栄町の中屋遺跡Ｂ地点[1]のＳＫ１・２や庄原市の妙見山遺跡[2]のＳＫ１・３から出土したものに同様の例がある。高杯や器台・手づくね土器などが出土していることから，何らかの祭祀に用いた土器類を廃棄した遺構と考えられる。

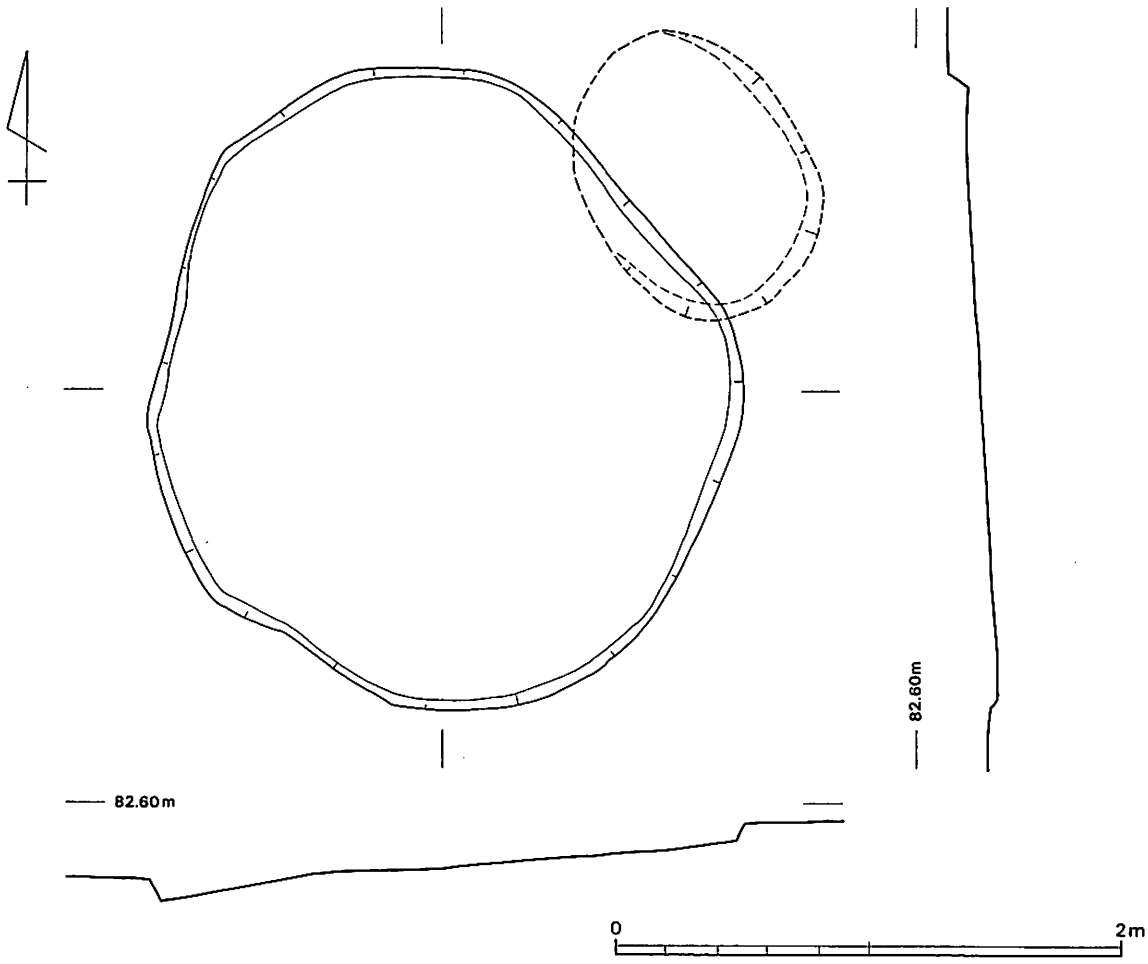


第５図　曽川１号遺跡ＳＫ１実測図（1:30）

（3）ＳＫ２（第６図，図版５）

Ａ地区の中央西側，ＳＢ１とＳＫ１の間に位置する。平面形態は直径2.3mの不整な円形で，深さは10cmの土坑である。坑底は東北から南西に向かってゆるやかに傾斜している。ＳＫ２の東北部に1.1×0.9mの楕円形の土坑が存在するが，ＳＫ２の方が古い。遺構の性格は不明である。

出土遺物としては，弥生時代後期後葉の壺(54)などがある。



第６図　曽川１号遺跡ＳＫ２実測図（1:30）

（4）ＳＢ２（第７図，巻頭図版１，図版６）

Ｃ地区中央に位置する，建替や拡張が行われた竪穴住居跡で，東側は地区外となっている。土層観察から住居跡の先後関係は＜ＳＢ２-ｄ＞→＜ＳＢ２-ｃ＞→＜ＳＢ２-ａ→ｂ＞と考えられる。建替えはＳＢ２-ｄからＳＢ２-ｃに，さらにＳＢ２-ａと行われている。またＳＢ２-ａはＳＢ２-ｂに拡張している。

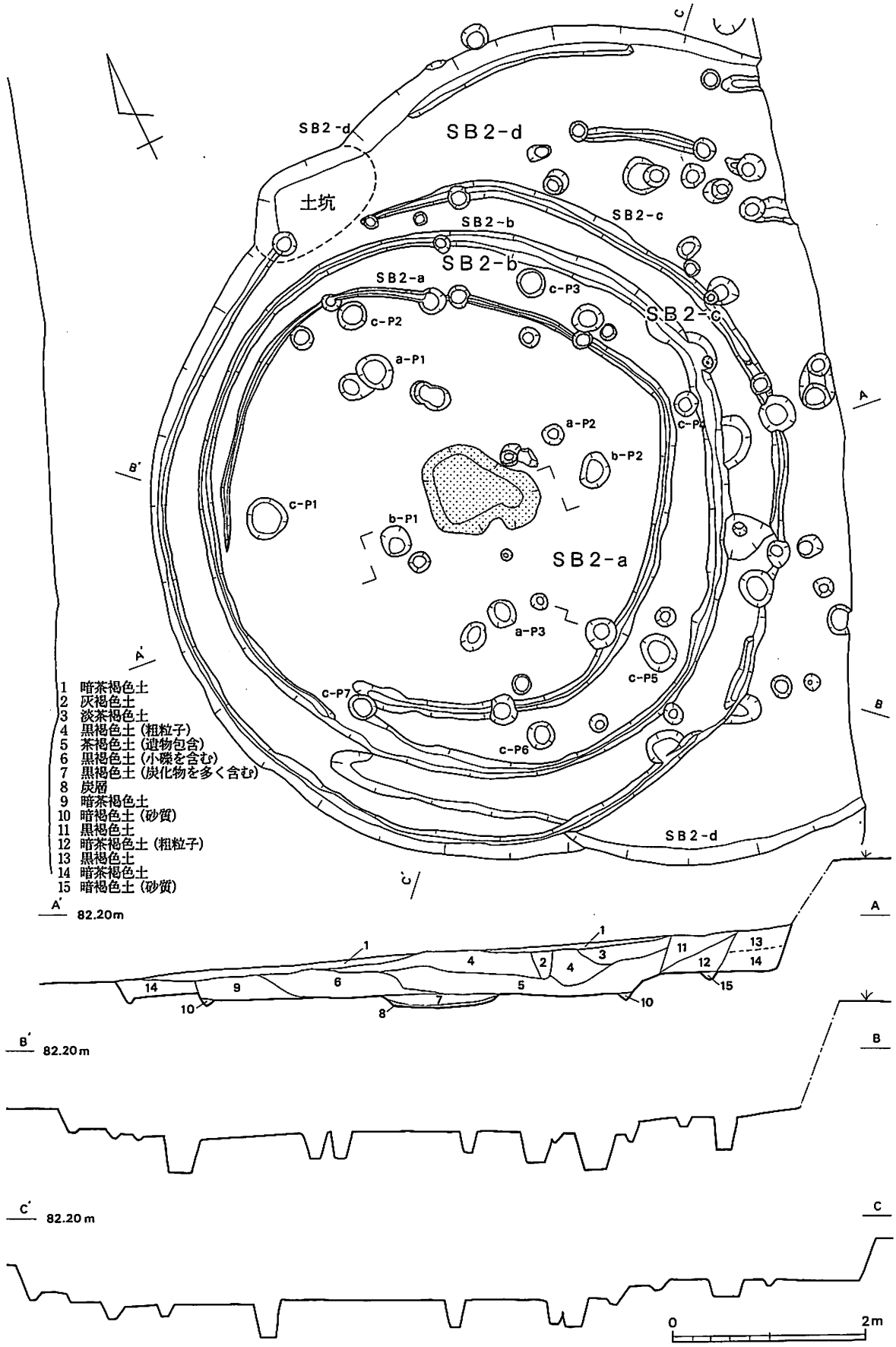
最も古い時期のＳＢ２-ｄは東側が地区外となっているが，平面形は径8.7ｍ程度の円形（床面積56.7㎡）と考えられる。次に古い時期のＳＢ２-ｃの平面形は径6.7ｍ程度の円形（床面積32.2㎡）である。次に新しい時期のＳＢ２-ａの平面形は径4.3ｍ程度の円形（床面積13.2㎡）で，一番新しいＳＢ２-ｂの平面形は径5.6ｍ程度の円形（床面積21.2㎡）である。ＳＢ２-ａの壁溝は南西部を欠くが，上端幅10～15cm，深さ７～10cmである。ＳＢ２-ｂの壁溝は上端幅10～20cm，深さ12cmである。ＳＢ２-ｃの壁高は20～30cm，壁溝は上端幅13～20cm，深さ６cmである。ＳＢ２-ｄは東側が地区外で，北端及び南端部分しか残存していないが，壁高は40cm，壁溝は北端部分でしか確認できなかった。上端幅15cm，深さ４cmである。

ＳＢ２-ａの主柱穴は３個確認できた。Ｐ１は径35cm，深さ38cm，Ｐ２は径22cm，深さ31cm，Ｐ３は径30cm，深さ34cmである。ＳＢ２-ｂの主柱穴は２個で，Ｐ１は径35cm，深さ25cm，Ｐ２は径40cm，深さ30cmである。ＳＢ２-ｃの主柱穴は７個確認した。Ｐ１は径45cm，深さ39cm，Ｐ２は径30cm，深さ43cm，Ｐ３は径38cm，深さ30cm，Ｐ４は径35cm，深さ35cm，Ｐ５は径40cm，深さ39cm，Ｐ６は径30cm，深さ41cm，Ｐ７は径30cm，深さ40cmである。ＳＢ２-ｄの主柱穴は確認できなかった。

住居跡中央で炉跡と考えられる土坑を検出した。土層観察からＳＢ２-ｂに伴うものと思われる。平面形は不整形で，規模は130×90cm，深さは６cmである。

炉跡の東側で，25×15×10cmの大きさの台石が据え置かれた状態で出土した。作業台にしたと思われる。

出土遺物としては，弥生土器の壺(65・67)・甕(55・56・68・69)・鉢(57～64・66)，土玉(70)などがある。この住居跡の時期は，出土土器の特徴から弥生時代後期後葉～末葉頃と考えられる。



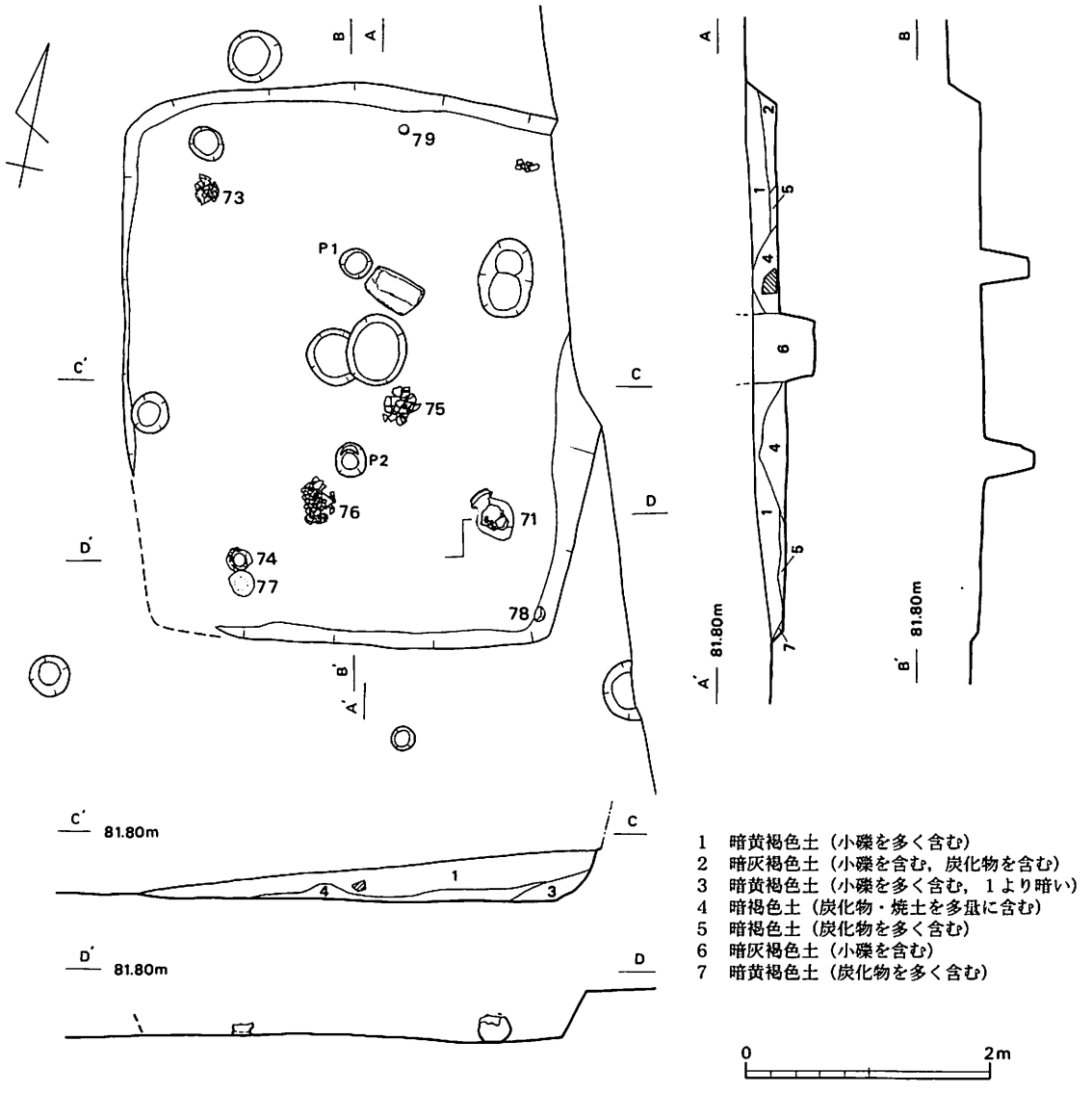
第７図　曽川１号遺跡ＳＢ２実測図（1:60）
（アミ目は焼土）

（5）ＳＢ３（第８図，図版６～８）

Ｄ地区の北東部に位置する竪穴住居跡である。北東隅は地区外である。平面形態は，西南隅が流失しているが，南北4.5m，東西3.9mの隅丸方形（床面積15m²）である。壁高は最大44cm，壁溝は検出されなかった。

主柱穴は２個で，柱間距離は1.65m。柱穴の規模はＰ１が径25cm，深さ30cm，Ｐ２は二段掘りとなっており，上端で25×30cm，深さ40cmである。

住居跡中央で炉跡と思われる土坑を検出した。住居跡より新しい土坑によって一部壊されているが，平面形は円形で規模は径50cm，深さ15cmである。土坑内からは炭化物や焼土を検出した。炉跡の東南に隣接して径50cmの範囲で炭化物が認められた。Ｐ１と炉跡に挟まれた位置の床面で45×40×15cmの石が出土し，石の東側の床面が東西60cm×南北30cmの範囲で赤変していた。ＳＢ３は何らかの作業が行われた工房の可能性がある。住居跡の四隅付近の床面で弥生土器が出土した。



第８図　曽川１号遺跡ＳＢ３実測図（1:60）
（数字は遺物番号）

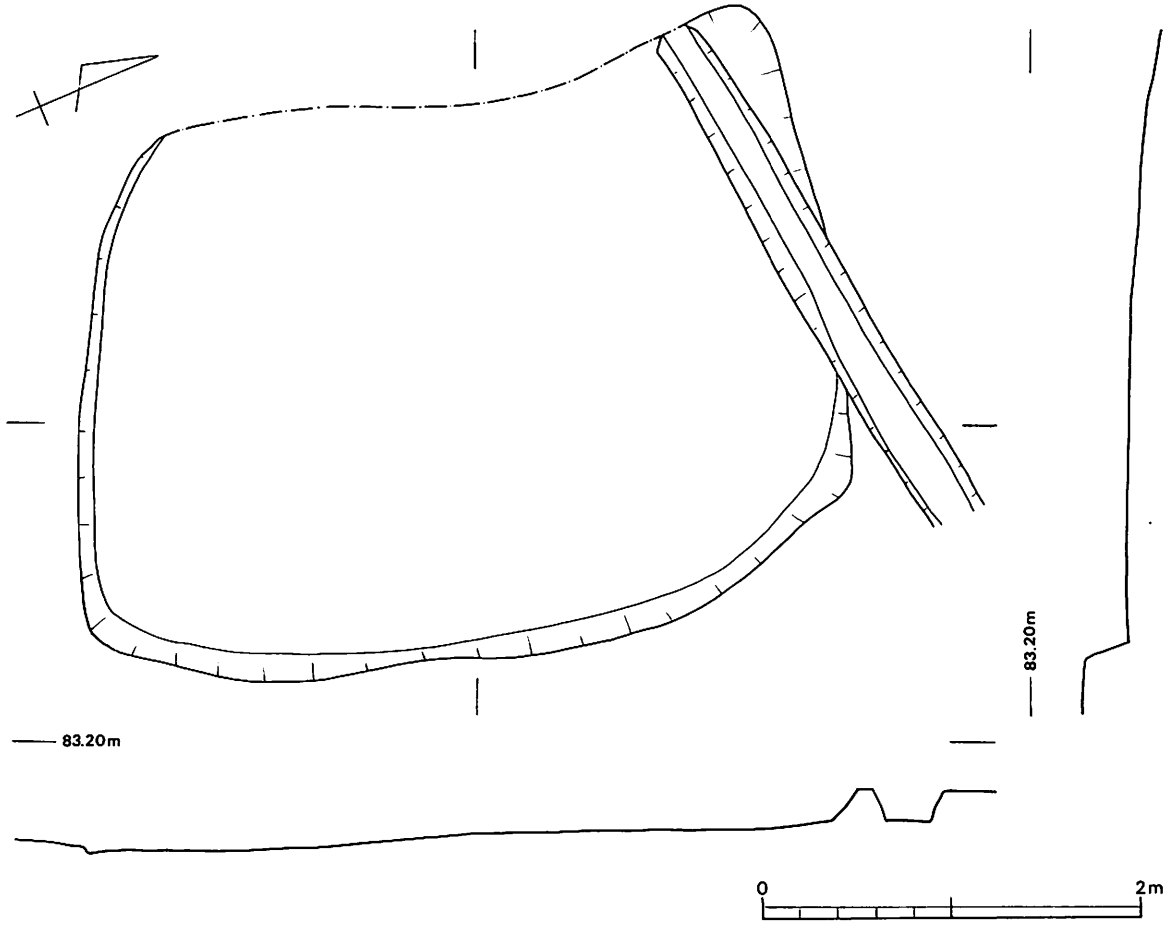
出土遺物としては，弥生土器の壺(71・72)・甕(73～76)・鉢(77～79)，土製紡錘車(80)，砥石(81)，覆土上層から土師質土器の皿(82)，擂鉢(83)，鍋(84)などがある。この住居跡の時期は，出土土器の特徴から弥生時代後期末葉頃と考えられる。

（6）ＳＫ３（第９図，図版８）

Ａ地区の北西部，ＳＸ１の東側に位置する。北側を近年の暗渠で壊され，西側は流失しているが，平面形態は4.0×2.7mの長方形で，深さ20cm，坑底は平坦である。

遺構の性格は不明である。

出土遺物としては，弥生土器の壺(85)・甕(86)・鉢(87)・高杯(88)・鼓形器台(89)などがあり，いずれも弥生時代後期後葉の土器と考えられる。



第９図　曽川１号遺跡ＳＫ３実測図（1:40）

（7）ＳＫ４（第10図，図版９）

Ａ地区の南東部，ＳＫ10の北東に位置する。平面形態は3.3×2.8mの長方形で，深さは10cm。底面は平坦で，坑内東側に径30cm，深さ４～12cmの穴が２個ある。

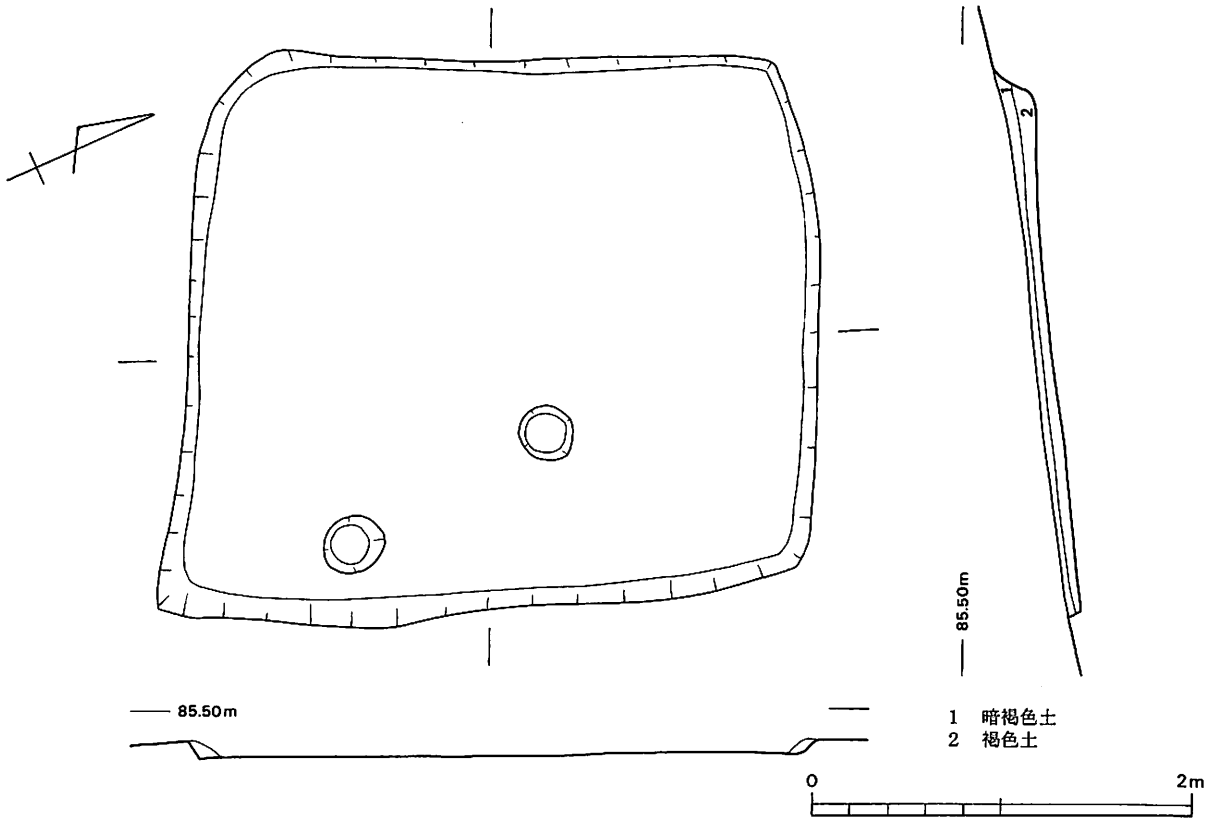
出土遺物としては，弥生時代後期後葉の甕(90)，底部(91)などがある。

（8）ＳＫ５（第11図，図版９）

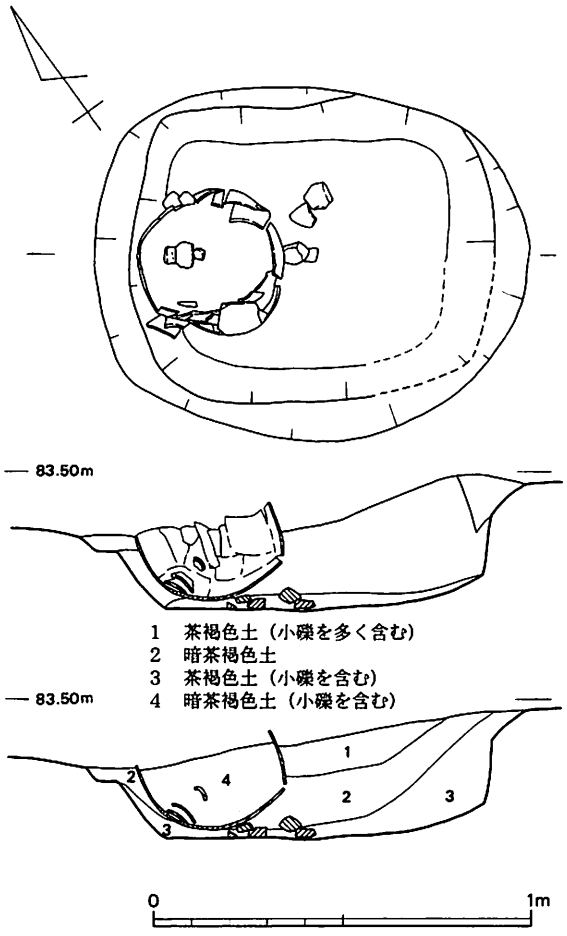
Ａ地区の中央北寄り，ＳＢ10の西側に位置する。上面の平面形態は2.3×1.85mの隅丸方形，中段（1.9×1.55m）及び底面（1.4×1.2m）は長方形の二段掘りの土坑で，深さは11～30cm。底面は平坦で，西側に弥生土器壺を据え，土器を固定するためか，底に礫が詰められている。主軸方向はN60°Ｗである。

土器の出土状況から土器棺墓かと思われるが，土坑が土器よりはるかに大きいこと，一般的な土器棺の場合と異なり土器が立てて置かれていること，土器と坑底との間に土層が一層入っていることなどから土器棺墓とするにはやや疑問が残る。

出土遺物としては，弥生時代後期末葉頃の壺(92)，壺底部(93)などがある。



第10図　曽川１号遺跡ＳＫ４実測図（1:40）



第11図 曽川１号遺跡ＳＫ５実測図（1:20）

２　古墳時代～古代の遺構

（１）ＳＢ４（第12図，図版10，11）

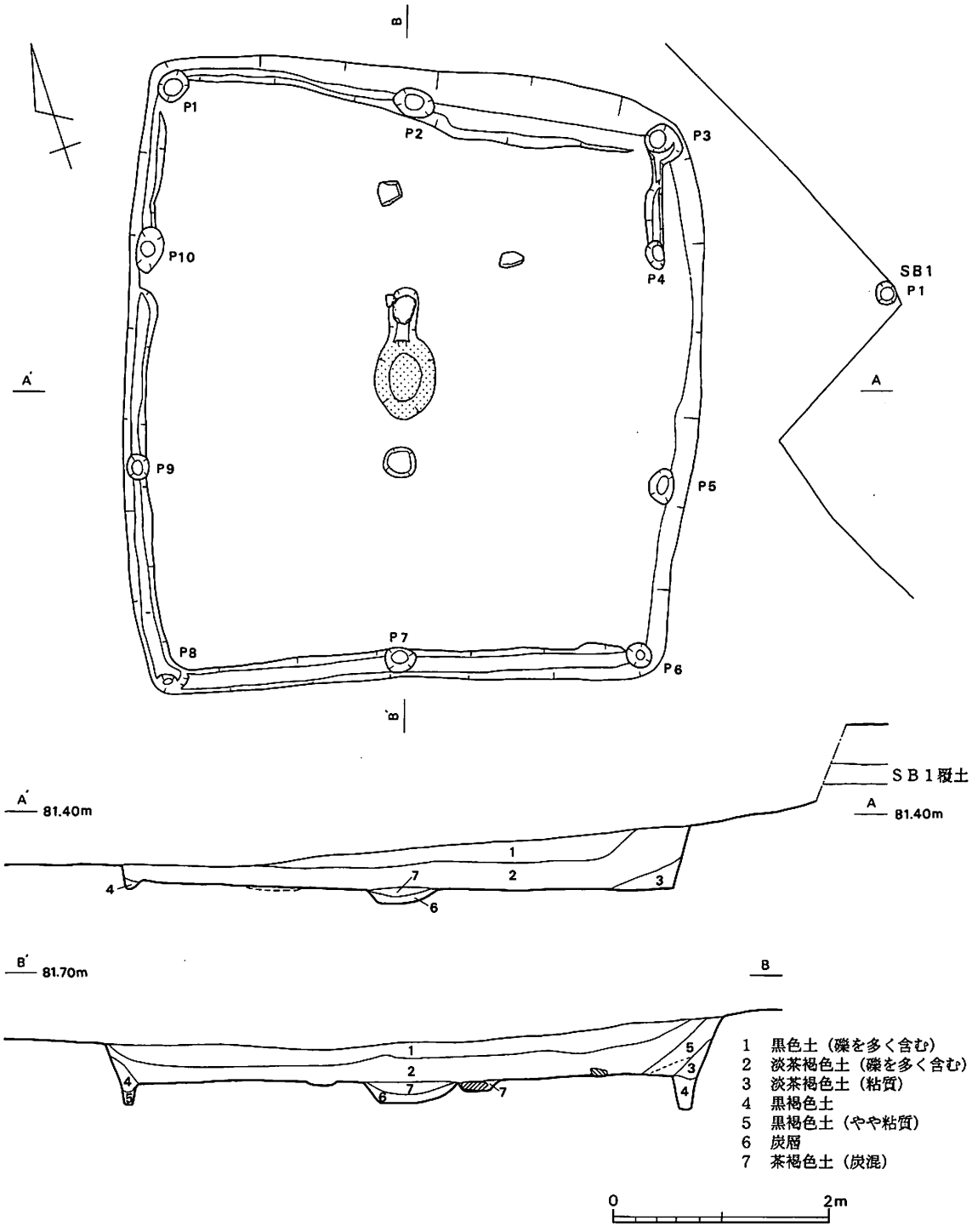
Ｄ地区の南東隅，ＳＢ１の西側に位置する竪穴住居跡である。平面形態は，南北5.7m，東西5.4mの方形（床面積25m²）である。壁高は20～60cm，壁溝は東側を除いて三方で検出した。上端幅20～25cm，深さ５～10cmである。

主柱穴は，壁際の四隅，短辺に一対及び長辺に二対の計10個と思われる。柱間の距離は，Ｐ１－Ｐ２が2.2m，Ｐ２－Ｐ３が2.3m，Ｐ３－Ｐ４が1.1m，Ｐ４－Ｐ５が2.15m，Ｐ５－Ｐ６が1.6m，Ｐ６－Ｐ７が2.25m，Ｐ７－Ｐ８が2.2m，Ｐ８－Ｐ９が2.0m，Ｐ９－Ｐ10が2.0m，Ｐ10－Ｐ１が1.55mである。柱穴の規模はＰ１が径30cm，深さは15cm，Ｐ２が長径35cm，短径25cm，深さは30cm，Ｐ３が径25cm，深さは15cm，Ｐ４が長径28cm，短径15cm，深さは25cm，Ｐ５が長径35cm，短径25cm，深さは15cm，Ｐ６が径20cm，深さは14cm，Ｐ７が径30cm，深さは20cmで，Ｐ８が径20cm，深さは10cm，Ｐ９が径25cm，深さは10cm，Ｐ10が長径40cm，短径25cm，深さは20cmである。

なお，住居跡中央で炉跡と考えられる土坑を検出した。平面形は楕円形で，規模は80×58cm，深さ25cmである。炉跡に隣接して浅い土坑が掘られ，中に40×20×10cmの石が据えられていた。その他にも床面に２個の石材が置かれていた。

ところで，柱穴はＰ１～Ｐ10としたが，いずれも浅いものである。炉跡に隣接した南北の浅い土坑（北側：28×40cm，深さ10cm，南側：径30cm，深さ５cm）を松菊里式住居に似た中央２本柱とみると，Ｐ１～Ｐ10は副柱と考えることもできる。２つの柱穴が浅すぎる疑問は，北側の土坑中にみられる石を礎石とみることで解決する。南側の礎石は欠失したのであろう。

出土遺物としては，少量かつ小片で図示しえなかったが，土師器が主で須恵器を伴っていないことからこの住居跡の時期は，古墳時代前期頃と思われる。



第12図　曽川１号遺跡ＳＢ４実測図（1:60）
（アミ目は焼土）

（２）ＳＢ５（第13図，図版11）

Ｂ地区の北西部に位置する竪穴住居跡であるが，西辺及び西南隅部が地区外で，西辺は壁の立ち上がりが断面で確認できたのみである。平面形態は一辺６ｍの方形（床面積33.6㎡）である。壁高は18cm，壁溝は調査範囲内の壁際を巡り，上端幅20～30cm，深さ５～10cmである。北辺からＰ２の方向へ2.95ｍほど浅い溝が延びる。溝の両側の床面の高さはほとんど変わらない。この溝は間仕切りとも考えられる。

主柱穴は４個で，柱間距離はＰ１－Ｐ２が3.1ｍ，Ｐ２－Ｐ３が2.7ｍ，Ｐ３－Ｐ４が2.95ｍ，Ｐ４－Ｐ１が2.6ｍである。Ｐ２を除いて残り３個の柱穴は二段掘りとなっている。Ｐ２では柱痕跡が検出された。柱穴の規模は，Ｐ１は上端の径50cm，深さ54cm，Ｐ２は径50cm，深さ40cm，Ｐ３は上端で65×50cm，深さ30cm，Ｐ４は上端で60×50cm，深さ37cmである。

住居跡中央で径40cm，深さ２cmの土坑を検出したが，浅い穴で炭化物も認められなかったので，炉跡かどうか不明である。南辺際で55cm×45cmの範囲で焼土を検出した。性格は不明である。

Ｐ２の南側及びＰ２とＰ３の間で作業用の台石と思われる石を検出した。

出土遺物としては，弥生時代後期中葉の壺(95)・鉢(96)，弥生時代後期末葉の甕(94)，６世紀頃の土師器の甕(97・98)と須恵器の杯身(99)，坩蓋(100)，高杯(101)などがある。この住居跡の時期は，平面形態が方形であり，土師器や須恵器の時期に同じく６世紀頃と思われる。

（３）ＳＢ６（第14図，図版12）

Ｂ地区の南西部に位置する竪穴住居跡で，北東側１/２ほどが調査できた。南西側１/２は地区外である。西辺は壁の立ち上がりが断面で確認できたのみである。平面形態は一辺６ｍの方形（残存床面積約9.5㎡）である。壁高は17～40cm，壁溝は南辺で検出した。上端幅25cm，深さ５～15cmである。北辺から約１ｍのところに長さ4.1ｍ，上端幅15cm，深さ２cmの溝がある。この溝と壁とで区切られた場所は住居跡中央部より10cm高い。ベッド状遺構であろうか。

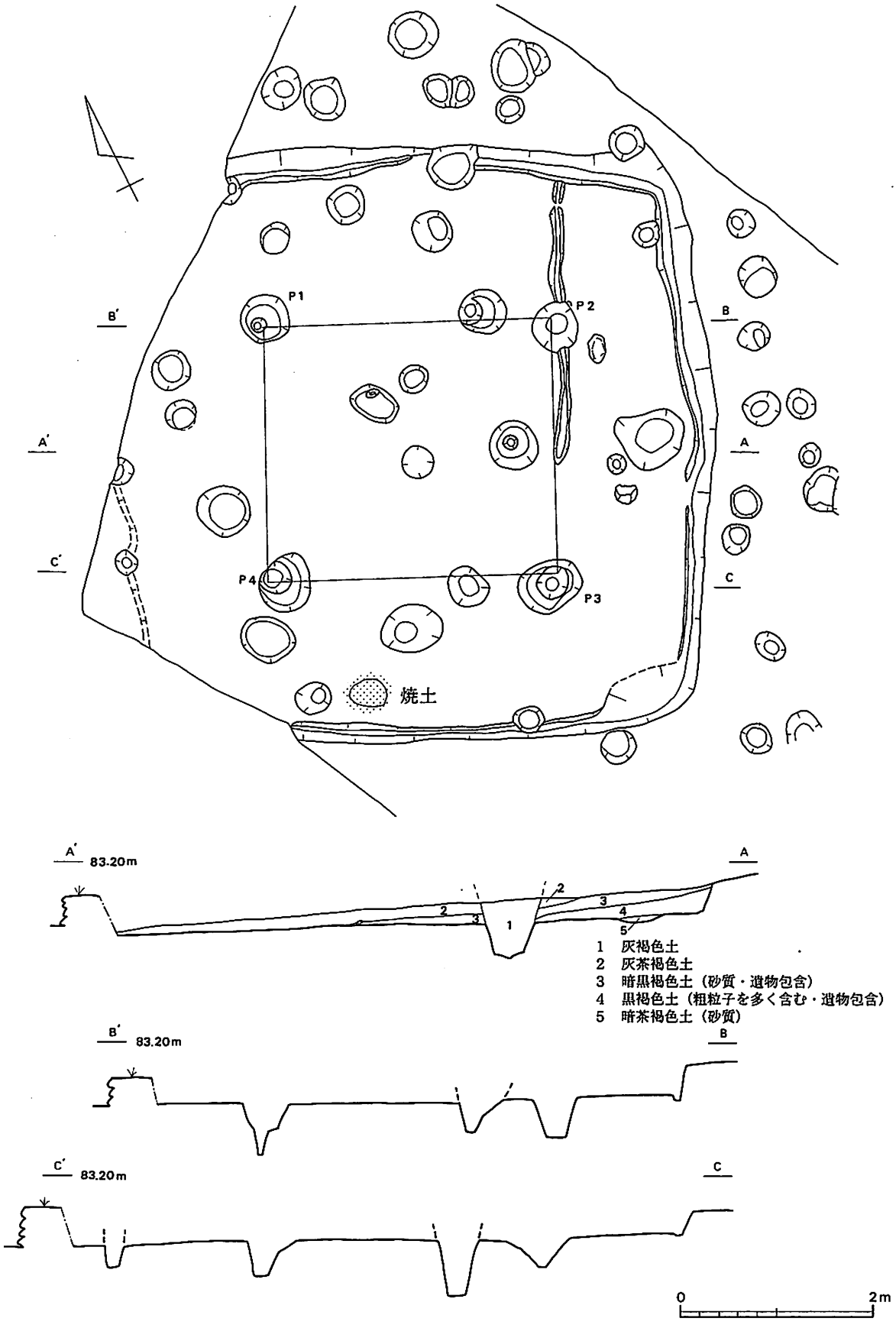
いくつかの柱穴がみられるが，主柱穴は不明。

出土遺物としては，弥生土器片や土師器片がある。この住居跡の時期は，平面形態が方形であり，ＳＢ５と同様６世紀頃と思われる。

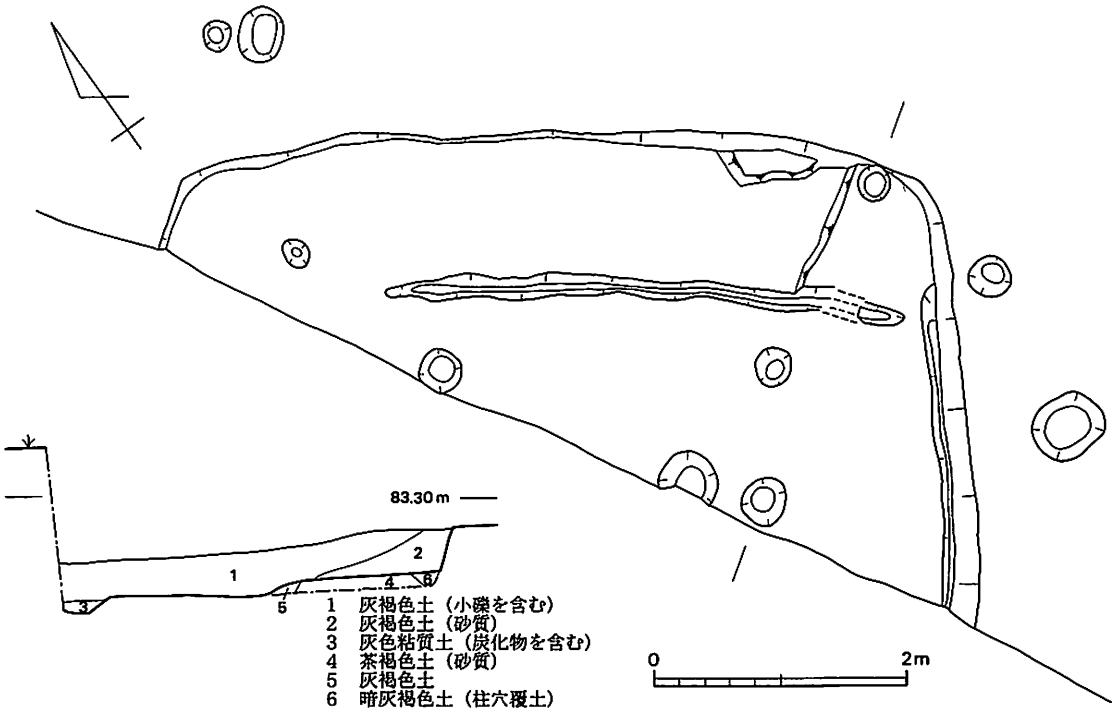
（４）ＳＢ７（第15図，図版12）

Ａ地区の北東部に位置する竪穴住居跡で，西南部の隅部分のみ調査した。その他は地区外である。平面形態は隅丸方形（残存床面積約1.6㎡）と思われる。壁高は20～30cm，壁溝は上端幅25cm，深さ５～15cmである。壁溝から10cm程度内側に厚さ３～４cmの貼床が施されている。

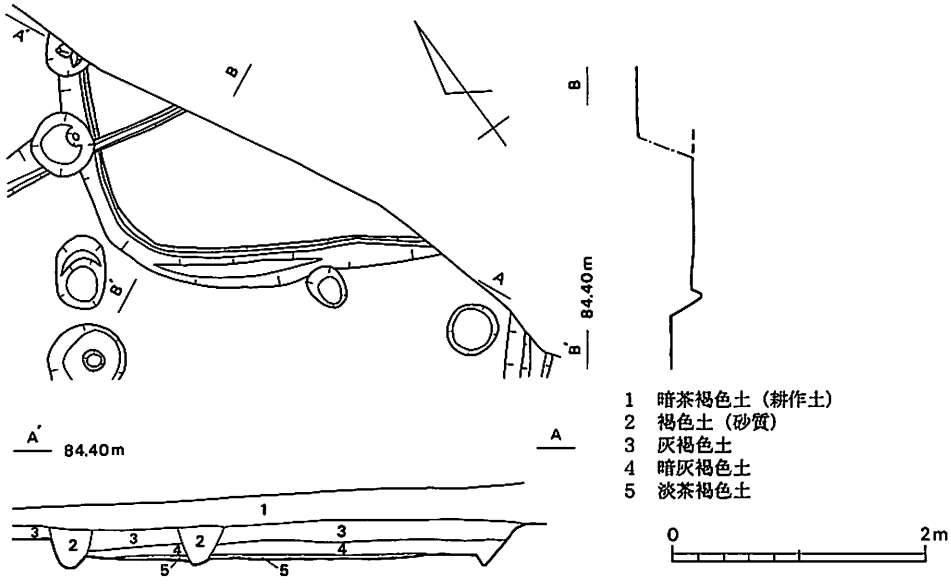
出土遺物としては，弥生土器や土師器の細片がある。



第13図　曽川１号遺跡ＳＢ５実測図（1:60）



第14図　曽川１号遺跡ＳＢ６実測図（1:60）



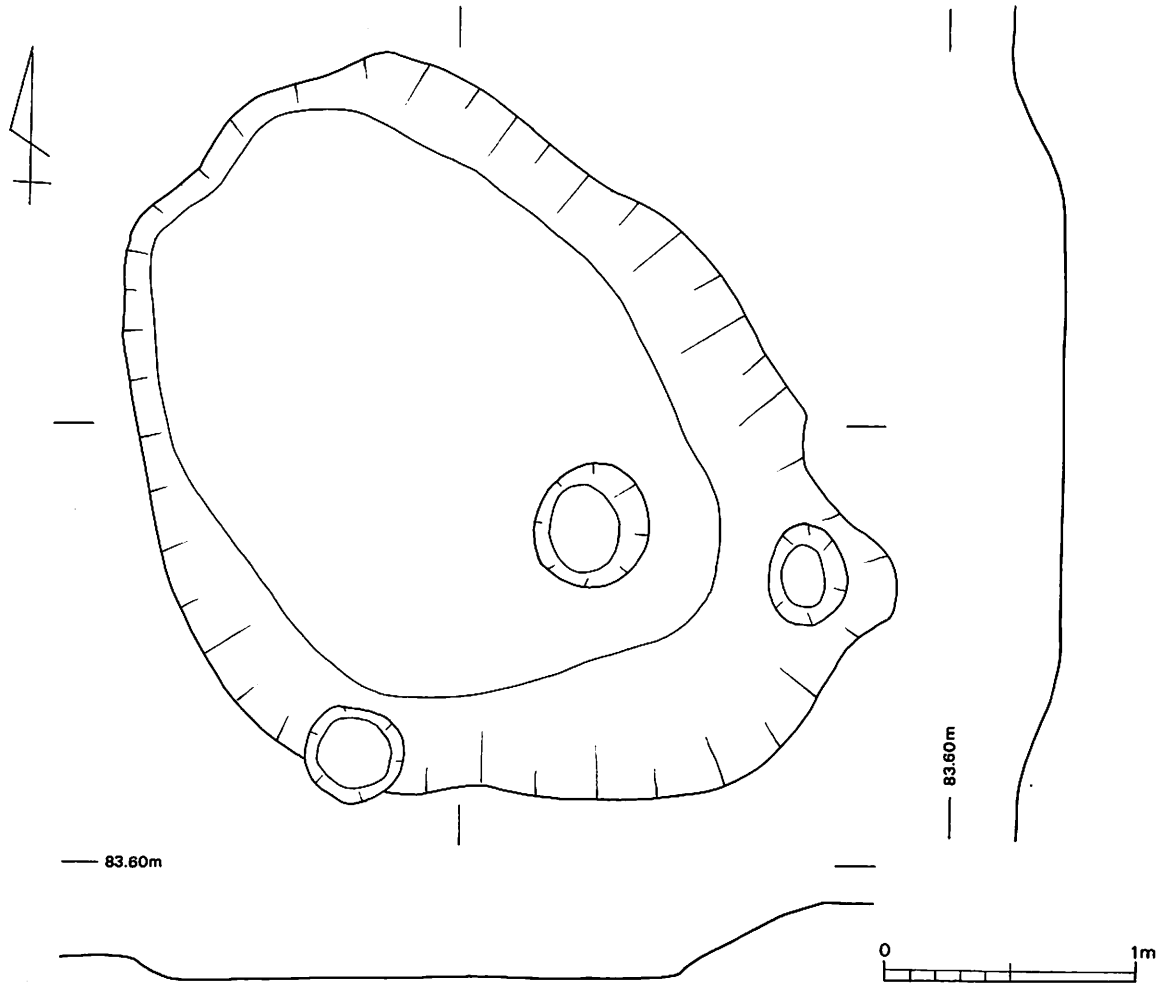
第15図　曽川１号遺跡ＳＢ７実測図（1:60）

（5）ＳＫ６（第16図）

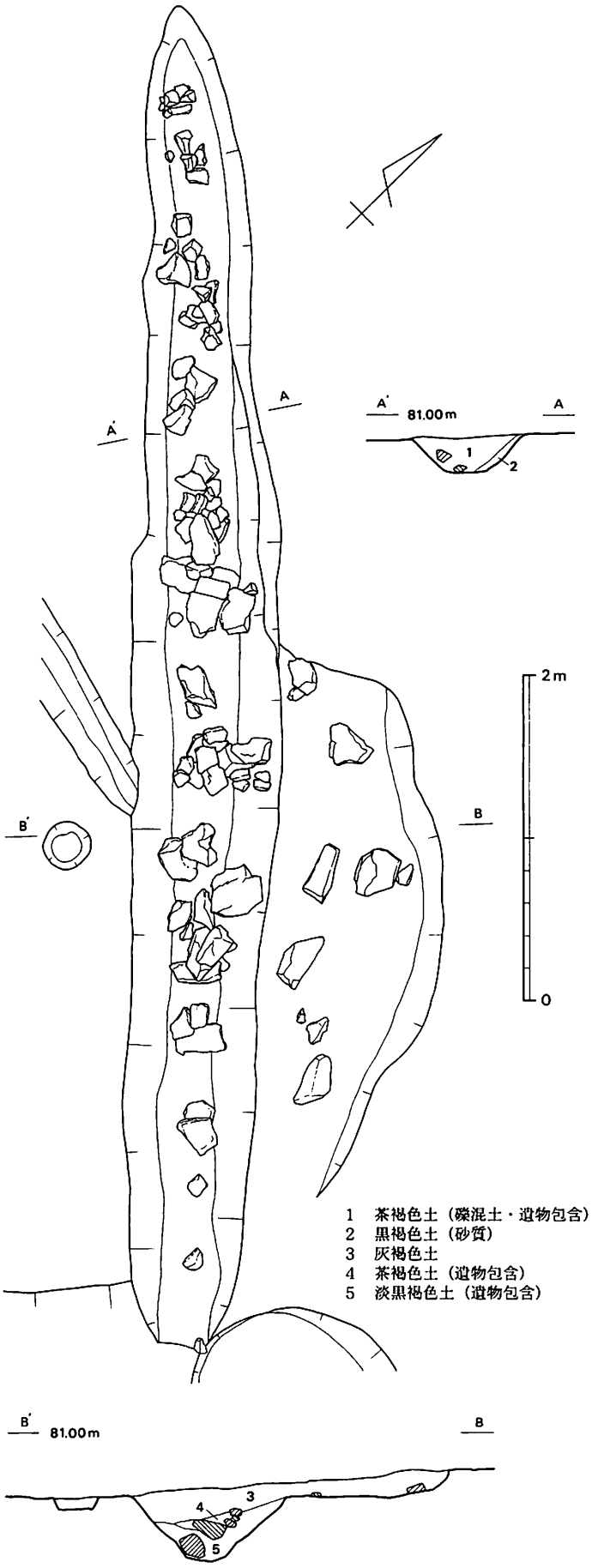
Ａ地区の北部中央，ＳＫ３の東北部に位置する。平面形態は3.25×2.5mの不整形で，深さ10～20cm，坑底は平坦である。底面東南隅に１個，東側及び南側壁面に各１個の柱穴のような穴がある。底面東南隅のものは上端の径45cm，深さ10cm，東側壁面のものは上端の大きさが40×30cm，深さ14cm，南側壁面のものは径40cm，深さ14cmである。

遺構の性格は不明である。

出土遺物としては，弥生時代後期後葉の高杯(102)，７世紀頃の須恵器の高杯(103)，壺(104)などがある。



第16図　曽川１号遺跡ＳＫ６実測図（1:30）



第17図　曽川１号遺跡ＳＤ１実測図（1:40）

（６）ＳＤ１（第17図，図版13）

Ｄ地区の北部に位置し，長さ8.15m，上端幅60～90cm，深さ50cmの溝で，北東から南西方向に等高線とほぼ直角に直線的に走る。東南側に，3.3×1.0m，深さ30cmのテラス状の平坦面がある。溝底面に10～40cm大の礫が多数あり，水の流れをよくするため，当初から礫が置かれたとも考えられる。

出土遺物としては，９世紀と考えられる須恵器の杯身(105，106)，土錘(107)，ガラス小玉(108)などがある。

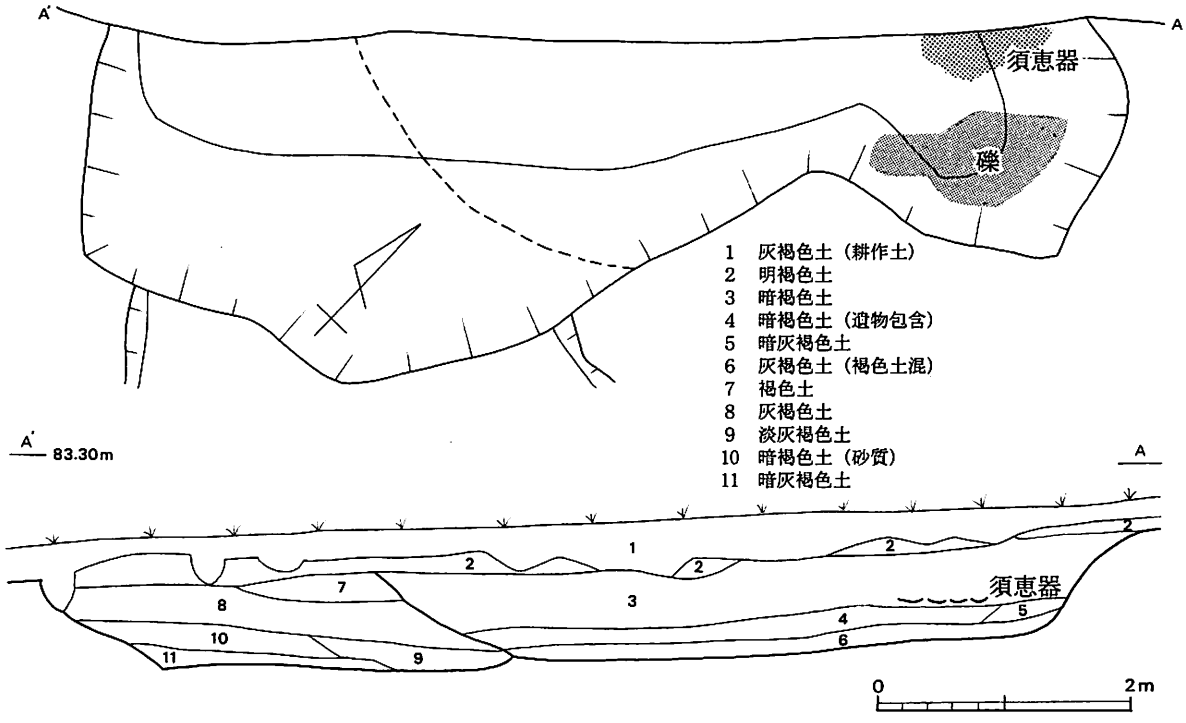
（７）ＳＸ１（第18図，図版13，14）

Ａ地区の中央北端，ＳＫ３の西側に位置する。地区の端にあり，遺構の全容は不明である。平面形態は不整形で，8.2×現存１～2.75m，深さ1.1mである。

北側断面付近で須恵器大甕の破片が90×50cmの範囲に，須恵器の分布範囲から15cm程度東南側，20cm程度高い位置で，10～30cm大の礫群が1.7×0.7mの範囲に置かれているのを確認した。

土層観察によれば，ＳＸ１は２時期に分かれると思われる。最初に南側に作られ，次に北寄りに長さ5.8mの土坑が作られたと思われる。須恵器や礫は第２期目の土坑に伴うと思われる。

出土遺物としては６世紀後半頃の須恵器の甕(109)などがある。



第18図　曽川１号遺跡ＳＸ１実測図（1:60）

3　中世以降の遺構

（1）ＳＢ８，ＳＤ２・３（第19図，図版３，14）

ＳＢ８はＤ地区の南西部，ＳＫ７の南側に位置し，梁方向の北側にＳＤ２，桁方向東側にＳＤ３の溝を配置する，１間×２間の掘立柱建物跡である。建物の主軸は等高線に沿い，N30°Ｗを指す。建物の規模は距離の長い南北方向を桁行とすると，桁行１間（Ｐ３－Ｐ４，Ｐ６－Ｐ１），梁行２間（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３，Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６）である。建物の面積は，桁行方向4.97m，梁間方向3.92mの19.5㎡である。柱間距離は桁行方向が4.97m，梁行方向はＰ１－Ｐ２・Ｐ５－Ｐ６で２m，Ｐ２－Ｐ３・Ｐ４－Ｐ５で1.92mである。柱穴の規模は，Ｐ１が径35cm，深さ48.5cm，Ｐ２が径30cm，深さ18.5cm，Ｐ３が径40cm，深さ40cm，Ｐ４が50×58cm，深さ71.5cm，Ｐ５が径50cm，深さ66cm，Ｐ６が40×45cm，深さ53cmである。Ｐ３では25×15×10cmの礫のまわりに10cm大の礫を詰めて根石としている。Ｐ４では３段に礫が出土した。一番底に25×25×10cmと15×15×５cmの礫，その上に20cm大の角礫が６個，最上段に２個の礫が出土した。底から50cm上で古銭（元豊通宝）１枚が出土した。Ｐ５では土層断面で柱痕跡が確認できた。

出土遺物としてＰ１から土師質土器皿(110)，Ｐ４から元豊通宝(138)などがある。この遺構の時期は出土遺物から中世後期，16世紀頃と考えられる。

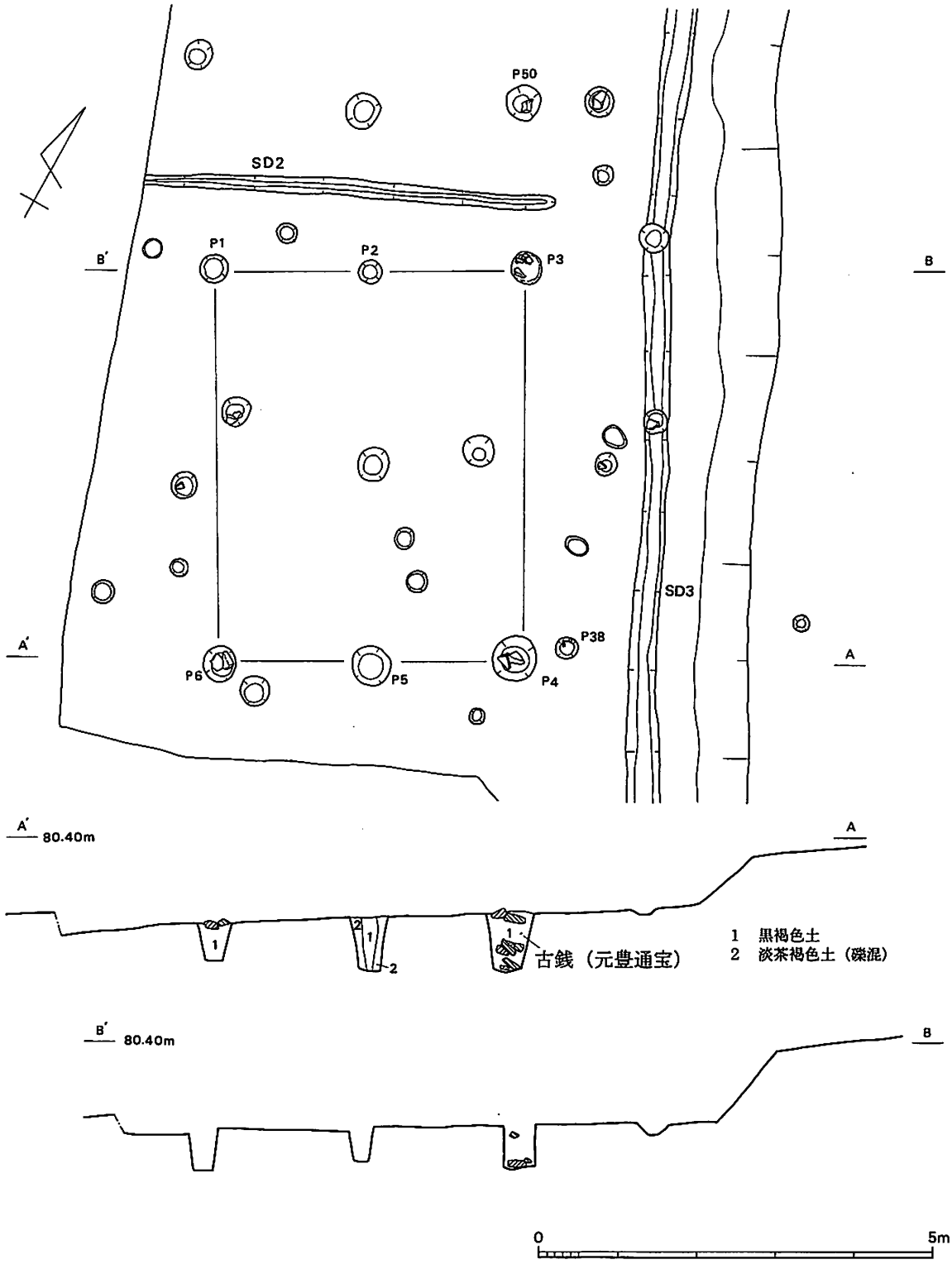
ＳＤ２はＳＢ８の梁方向の北側に，ＳＤ３は桁方向東側に位置する。ＳＤ２の規模は，西端は地区外となるが，現存長5.25m，上端幅20cm，深さ５cmで，ＳＤ３の規模は，南端は地区外となるが，現存長22m，上端幅40cm，深さ２～６cmである。いずれも時期を特定する出土遺物はないが，ＳＢ８の方向と整合性があるため，ＳＢ８に伴なうものと考えられる。

なお，ＳＢ８のＰ４の東側，Ｄ地区Ｐ38から瓦質土器の擂鉢(127)が出土した。16世紀頃のものと思われる。また，ＳＤ２の北側，Ｄ地区Ｐ50から土師質土器の皿(128)が出土した。16世紀頃のものと思われる。

（2）ＳＢ９，ＳＢ１０，ＳＤ４（第20図，図版３，15）

ＳＢ９はＡ地区の東部に位置し，桁方向東側にＳＤ４を配置する，２間×１間の掘立柱建物跡である。建物の主軸はN23°Ｅを指す。建物の規模は，桁行２間（Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４，Ｐ５－Ｐ６－Ｐ１），梁行１間（Ｐ１－Ｐ２，Ｐ４－Ｐ５）である。建物の面積は，桁行方向3.9m，梁行方向2.8mの10.9㎡である。柱間距離は桁行方向がＰ２－Ｐ３で２m，Ｐ３－Ｐ４で1.9m，Ｐ５－Ｐ６で1.95m，Ｐ６－Ｐ１で1.95m，梁行方向は2.8mである。柱穴の規模は，Ｐ１が35×45cm，深さ40cm，Ｐ２が径45cm，深さ18.5cm，Ｐ３が径35cm，深さ50cm，Ｐ４が径70cm，深さ40cm，一部二段掘りである。Ｐ５が35×40cm，深さ55cm，Ｐ６が径40cm，深さ20cmである。いずれも中から礫が出土しており，詰石と思われる。なお，Ｐ４の東側に一部二段掘りの柱穴がある。Ｐ２の東側が地区外となるためはっきりとはしないが，庇となる可能性もある。

出土遺物としてＰ４から土師質土器皿(111，112)，瀬戸焼の折縁皿(113)などがある。この遺構の時期は出土遺物から16世紀頃と考えられる。



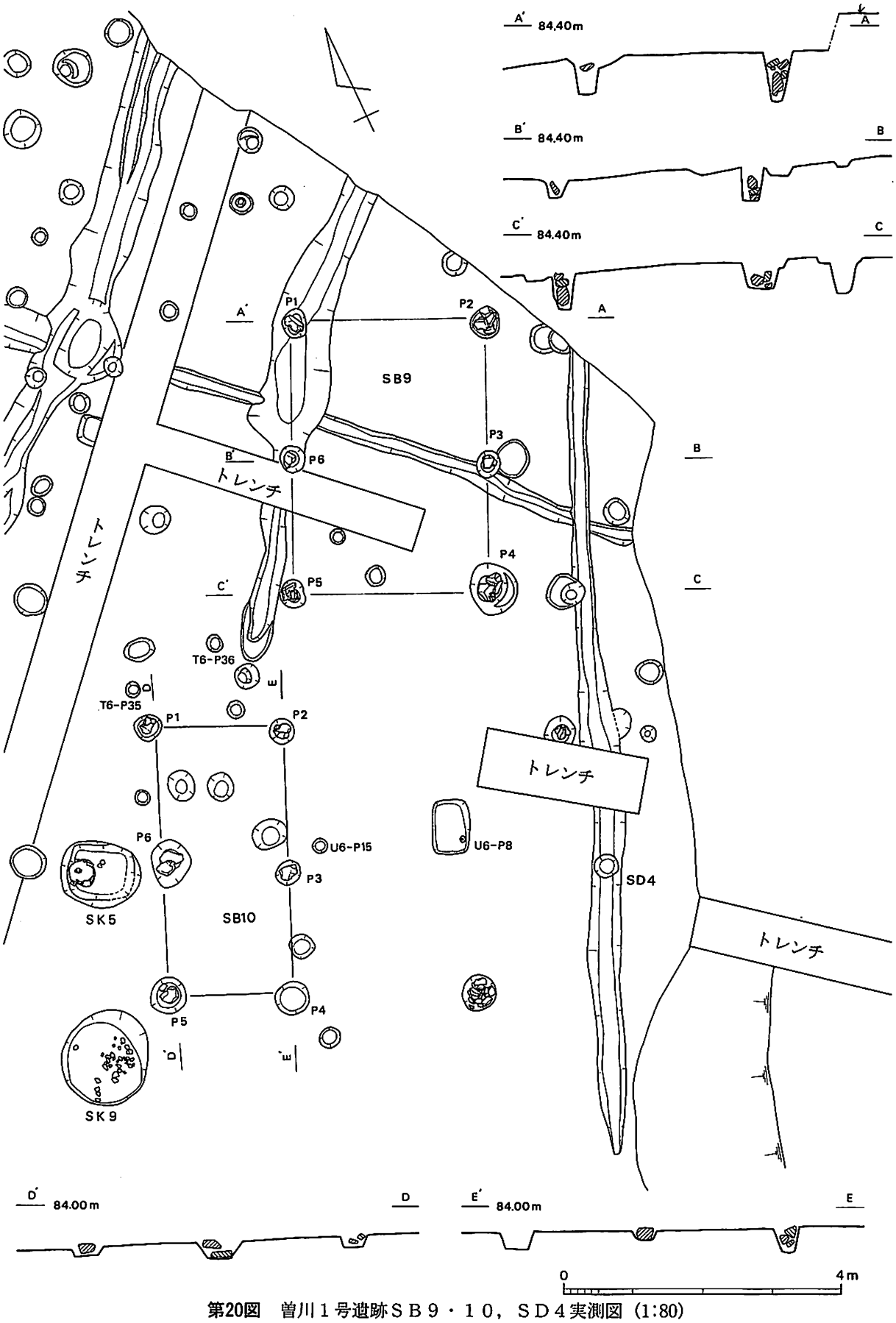
第19図　曽川１号遺跡ＳＢ８実測図（1:80）

ＳＢ１０はＡ地区の中央東部，ＳＫ５やＳＫ９の東側に位置する，２間×１間の掘立柱建物跡である。建物の主軸はN23°Ｅを指す。建物の規模は，桁行２間（Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４，Ｐ５－Ｐ６－Ｐ１），梁行１間（Ｐ１－Ｐ２，Ｐ４－Ｐ５）である。建物の面積は，桁行方向3.9m，梁行方向1.8mの７㎡である。柱間距離は桁行方向がＰ２－Ｐ３で2.1m，Ｐ３－Ｐ４で1.8m，Ｐ５－Ｐ６で1.9m，Ｐ６－Ｐ１で２m，梁行方向は1.8mである。柱穴の規模は，Ｐ１が35×40cm，深さ15cm，Ｐ２が径35cm，深さ40cm，Ｐ３が径35cm，深さ13cm，Ｐ４が径50cm，深さ22cm，Ｐ５が径50cm，深さ13cm，Ｐ６が65×55cm，深さ20cmである。Ｐ４を除いていずれも中から礫が出土しており，根石あるいは詰石と思われる。

出土遺物としては，Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５から土師器が少量出土したが，細片であり，ここでは建物方向がＳＢ９の方向と同一方向であり，それと同時期ととらえたい。

ＳＤ４は，ＳＢ９の桁方向東側に位置する溝である。ＳＤ４の規模は，北東端は地区外となるが，現存長11.5m，上端幅30～50cm，深さ10cmである。出土遺物として，16世紀頃の土師質土器皿(114・115)などがある。ＳＢ９の方向と整合性があり，出土遺物の時期も同じ頃なので，ＳＢ９に伴なうものと思われる。

なお，ＳＢ１０のＰ１の北側のＡ地区Ｔ６Ｐ35から元符通宝(139)が，Ａ地区Ｔ６Ｐ36から弥生時代中期中葉の底部(123)が，Ｐ３の東側のＡ地区Ｕ６Ｐ15から弥生時代後期後葉の壺(121)及び底部(122)が，Ａ地区Ｕ６Ｐ８から８～９世紀の製塩土器(126)が出土した。

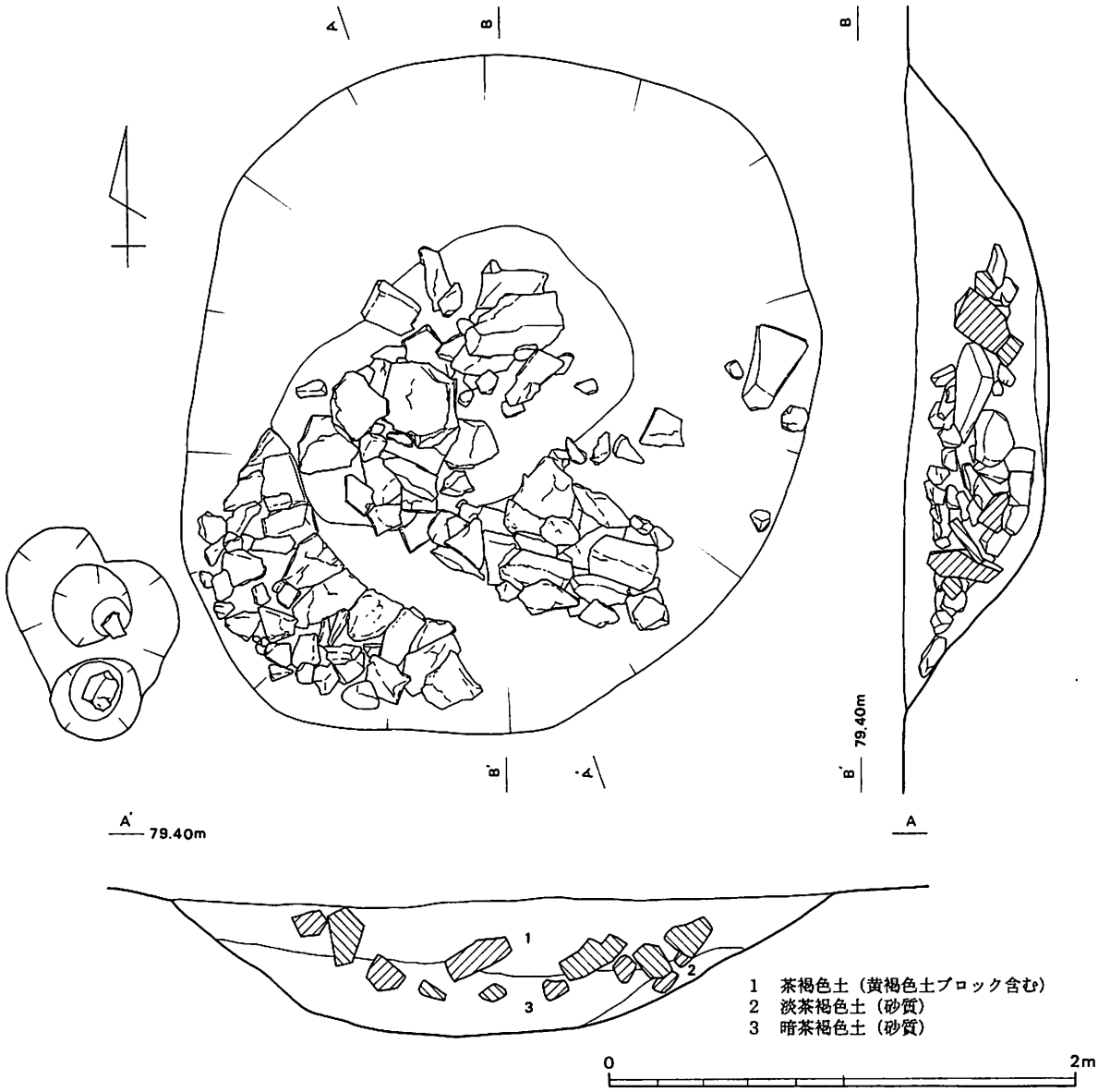


第20図　曽川１号遺跡ＳＢ９・１０，ＳＤ４実測図（1:80）

（3）ＳＫ７（第21図，図版15）

Ｄ地区の北側，ＳＢ８の北側に位置する土坑である。平面形態は径2.9mの円形で，深さは60cm。人頭大の礫が大量に出土した。坑底から若干の湧水が認められた。礫の間から土器片が出土した。遺構の性格は不明である。

出土遺物としては，16世紀頃の瓦器の火鉢(116)，亀山焼の甕(117)，土師質土器の皿(118)などがある。



第21図　曽川１号遺跡ＳＫ７実測図（1:30）

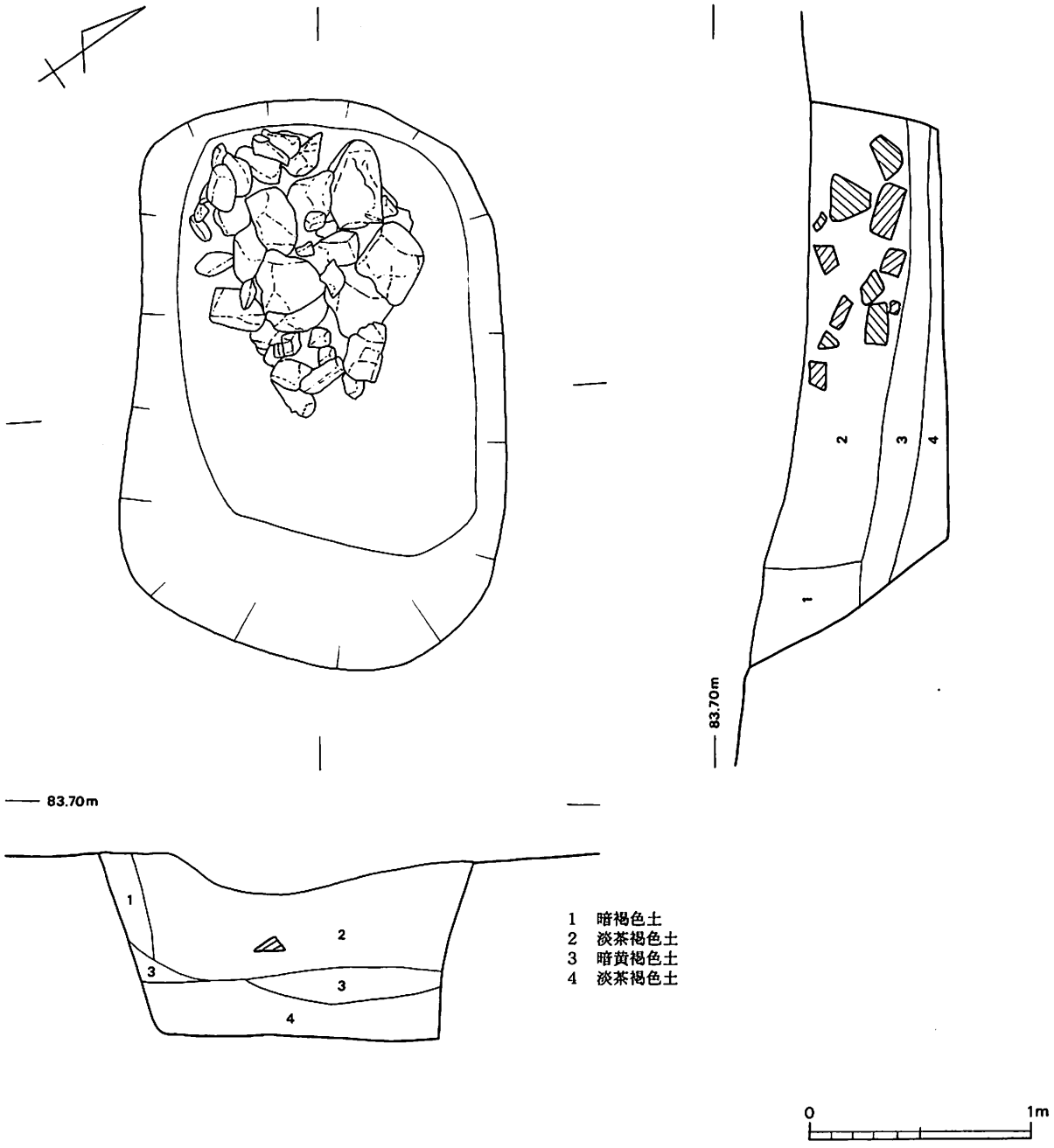
4　その他時期不明の遺構

（1）ＳＫ８（第22図，図版16）

Ａ地区の中央，ＳＫ１の東側に位置する土坑である。平面形態は1.55～1.75×2.5mの隅丸長方形で，深さは0.6～0.9m，坑底は平坦である。土坑内北西側で拳大から人頭大の礫が多数出土した。

土層観察から，坑底南半に何らかの容器を据えていたことが考えられ，その上に礫を載せていたのだろうか。

出土遺物としては，土師器，土師質土器，陶磁器，須恵質土器と思われる擂鉢などがある。

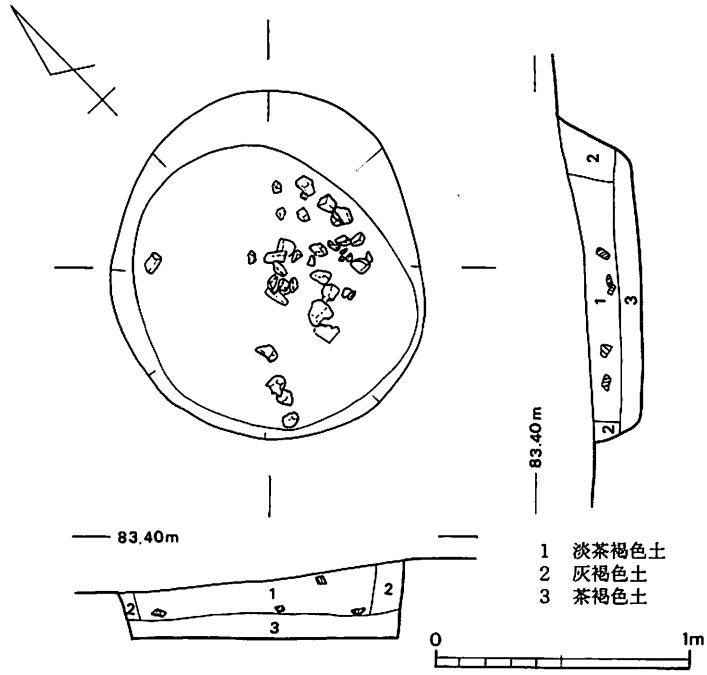


第22図　曽川１号遺跡ＳＫ８実測図（1:30）

（２）ＳＫ９（第23図，図版17）

Ａ地区の中央，ＳＢ１０の西側に位置する土坑である。平面形態は1.4×1.2mの楕円形で，深さは30cm，坑底は平坦である。坑底から10cm程度浮いて拳大の礫が多数出土した。土層観察から何らかの容器を据えていたと考えられる。

出土遺物としては，土師質土器や陶磁器の破片などがある。

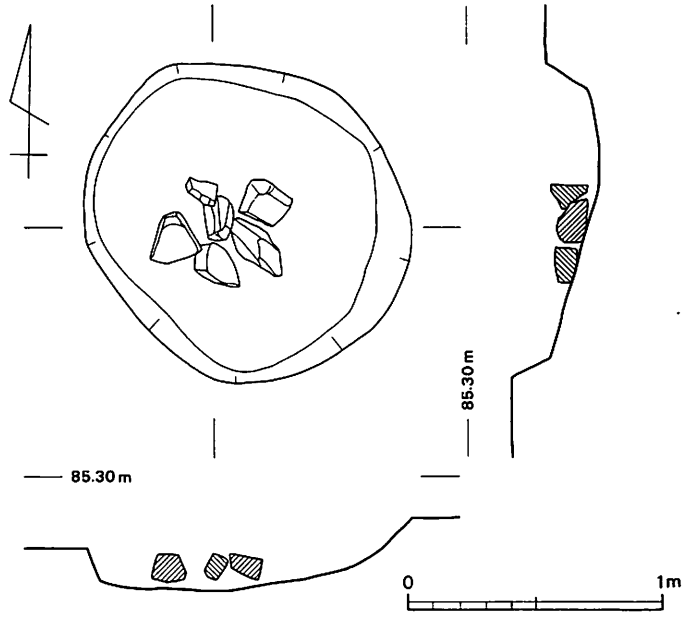


第23図　曽川１号遺跡ＳＫ９実測図（1:30）

（３）ＳＫ１０（第24図，図版15）

Ａ地区の南東部，ＳＫ４の南西側に位置する土坑である。平面形態は径1.2mの円形で，深さは38cmである。坑底から20cm大の礫が６個出土した。遺構の性格は不明である。

出土遺物としては，弥生土器や瓦質土器擂鉢の破片などがある。



第24図　曽川１号遺跡ＳＫ１０実測図（1:30）

（４）ＳＫ１１（第25図）

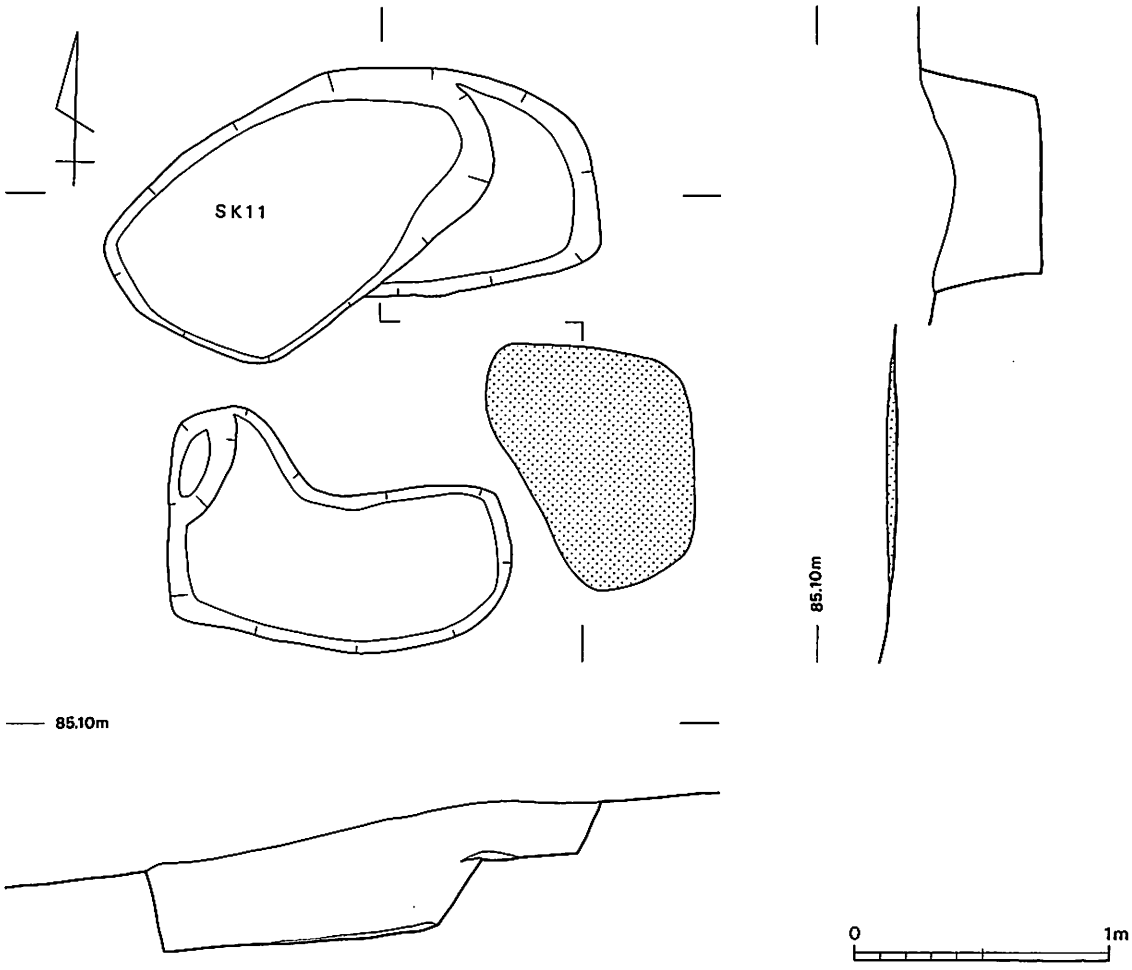
Ａ地区の南東隅部に位置する土坑である。平面形態は1.95×1.0mの長楕円形で，深さは43cmである。東側は坑底面から30cm程度高いテラス状となっている。坑底は平坦であるが，西に向かって傾斜する。

出土遺物としては，弥生土器の破片などが出土した。

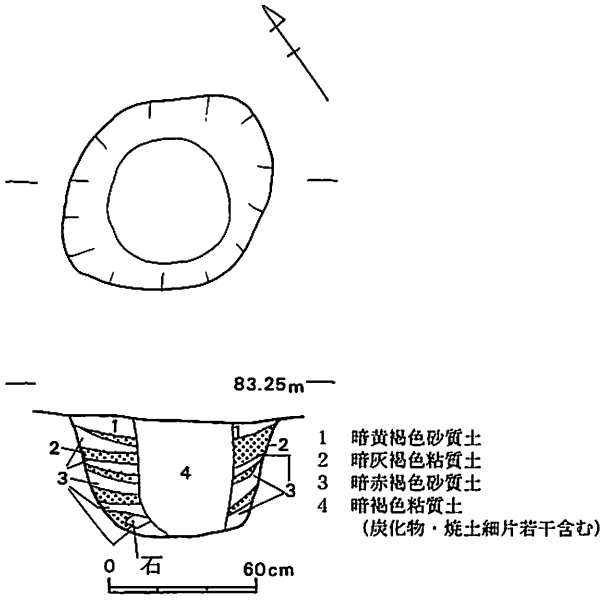
ＳＫ１１の南東側に80×90cmの範囲で土器が集中して出土したが，遺構等は確認できなかった。出土遺物としては須恵器(134)・土師器(135・136)などがある。

（５）Ａ地区Ｔ５-Ｐ１１（第26図，図版17）

Ａ地区では北端部を中心に柱痕跡が確認できる柱穴が多数あるが，建物跡とするにはいたらなかった。その中で，地区の北西端に位置するＡ地区Ｔ５-Ｐ１１では柱の両側を突き固めたこと



第25図　曽川１号遺跡ＳＫ１１実測図（1:30）
（アミ目は土器が集中して出土した範囲）



第26図　曽川１号遺跡Ａ地区Ｔ５-Ｐ１１実測図（1:30）

が土層観察により確認できた。平面形態は80cm四方の隅丸方形で，深さは50cmである。土層断面で見ると，砂質土と粘質土を交互に突き固めて柱を固定している。地区の端にあたるため，このほかには同様の柱穴は確認できなかった。

出土遺物としては，柱穴内から６世紀代の須恵器高杯(125)などがある。

5　遺　物

（1）ＳＢ１（第27・28図，図版18）

弥生後期中葉（Ｖ－２様式）の壺・甕・鉢・器台のほか，この時期のものとしては珍しい有孔砥石が出土している。

弥生土器（1'～18）

壺（１・２）ともに口縁部が屈曲する複合口縁の中型壺の口頸部破片である。１は口縁部の屈曲が鋭く「く」の字状に内傾し，口縁外面に不明瞭な凹線を３～４条めぐらせる。口径14cm。２は口縁部がほぼ直立して立ち上がり，口縁外面はやや窪むが凹線としては認定できない。口径15.6cm。

甕（３～10）口縁部が屈曲して立ち上がる複合口縁の中・小型甕の口頸部～胴部上半の破片である。口縁外面に２条程度の不明瞭な凹線をめぐらすもの(９)もあるが，多くが凹線とは認定しがたい不明瞭な凹凸がめぐるものである。口頸部の内外面は横ナデ，胴部上半外面はハケ目，胴部上半内面は頸部直下までヘラケズリするものが多い。口径10cm(３)，9.8cm(４)，12.5cm(５)，14.4cm(６)，13.8cm(７)，14.5cm(８)。

鉢（11～13）口縁部が屈曲して立ち上がり，体部も「く」の字に屈曲するいわゆる「神谷川式」特有の鉢の口頸部～体部の破片である。口縁外面は甕と同じく凹線とは認定しがたい不明瞭な凹凸がめぐる。体部の屈曲は鋭く，屈曲部に不明瞭な凹線を２条めぐらせるもの(11)もある。口頸部～体部上半は内外面とも横ナデ，体部下半外面は縦方向のヘラミガキで，内面は横方向のヘラケズリである。口径16.8cm(11)，18.2cm(12)，20.2cm(13)。

底部（14・15）ともに中・小型甕の底部と推定されるものである。

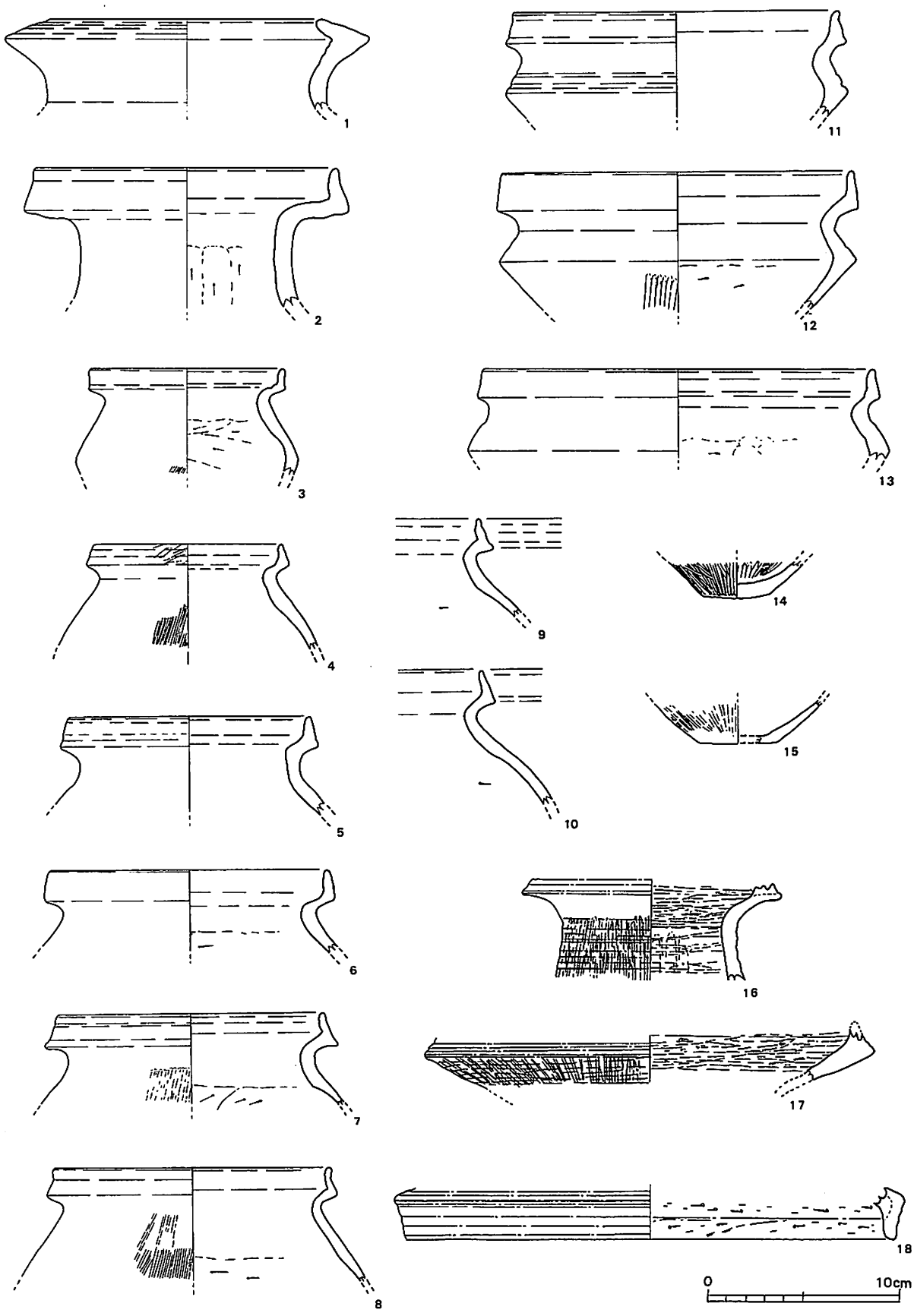
器台（16～18）すべて受け部と台部の両端が拡張する器台の破片で，別個体である。受け部の端面には２条以上の比較的明瞭な凹線をめぐらせる(16・17)が，台部の端面には不明瞭な凹凸がめぐる(18)のみである。(16)・(17)の受け部は内外面ともにヘラミガキを丁寧に施し，胎土は長石などの微細な砂粒を含むが精良で，他地域からの搬入の可能性がある。(18)の台部の内面はヘラケズリのままであるが，この部分を含めて３点の破片のすべての内外面に丹塗りを施す。台部径25cm(18)。

石器（19）

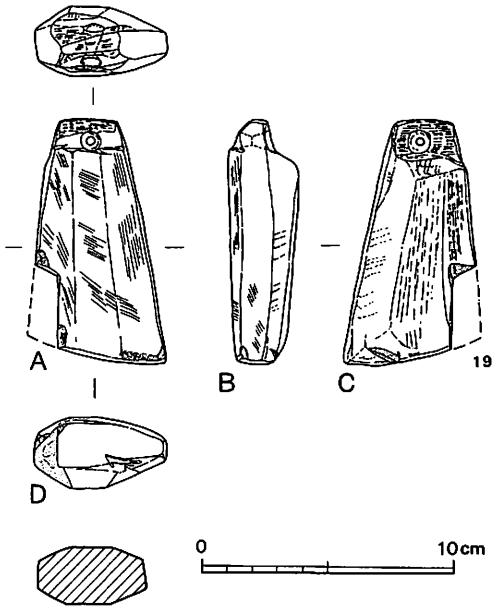
有孔砥石（19）横断面が八角形の有孔砥石で，砥面は側面の八つの面と底面の合計九面が使用できるように整形されているが，実際によく使用されているのはＢ・Ｃ面である。孔は両面穿孔で，紐ずれの痕跡は観察できない。長さ9.8cm，幅5.5cm，厚さ2.8cm，重量160ｇで細粒凝灰岩製のきめの細かい石材を使用している。

（2）ＳＫ１（第29～32図，図版19～21,25）

弥生後期後葉（Ｖ－３様式）の壺・甕・鉢・高杯・器台など土坑内から一括して出土している。



第27図　曽川１号遺跡ＳＢ１出土遺物実測図１（1:3）



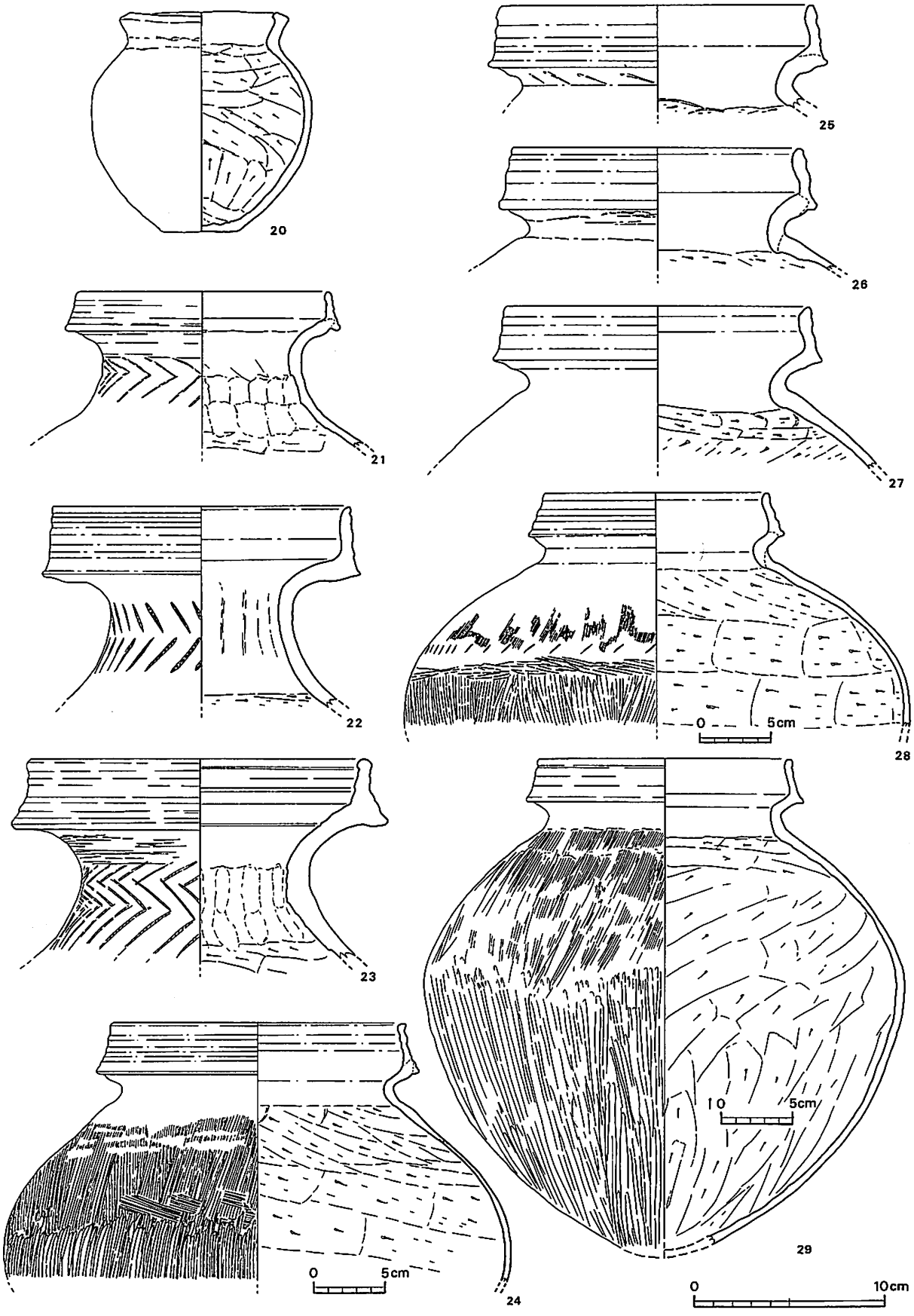
第28図　曽川１号遺跡ＳＢ１
出土遺物実測図２（1:3）

弥生土器（20～53）

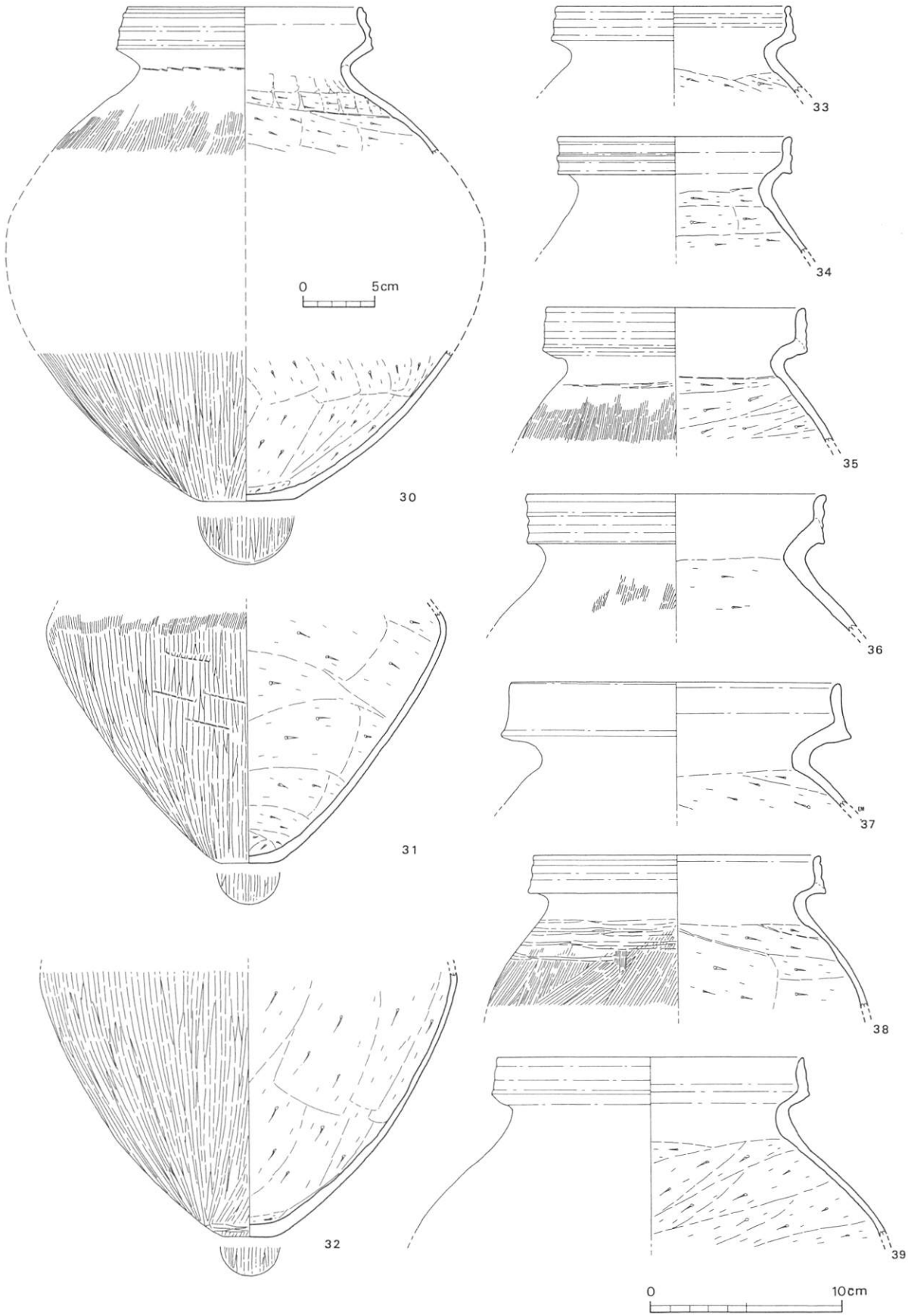
壺（20～32） 小型の短頸壺(20)と複合口縁のやや頸部の長い壺(21～23)と頸部の短い壺(24～30)がある。小型の短頸壺(20)は，安定した底部に球形の胴部，短く開く頸部をもち，口縁部はやや内側に折り曲げて成形している。外面はナデ，内面は頸部までヘラケズリとし，胴部下半に焼成時の黒斑がある。口径7.8cm，胴部最大径11.7cm，器高11.5cm。頸部のやや長い複合口縁壺(21～23)は，内傾気味に立ち上がる口縁部の外面に不明瞭な凹線状のナデを施し，頸部外面には板の小口を押圧した綾杉文をめぐらせる。内面は頸部までヘラケズリとし，頸部内面には成形時の指頭圧痕を残す。口径13cm(21)，15.5cm(22)，17.5cm(23)。頸部の短い複合口縁壺(24～30)は，内傾して立ち上がる口縁部の外面に２～３条程度の不明瞭な凹線文を施し，胴部上半にヘラ描きの「ノ」の字状列点文をめぐらすもの(28)ものもあるが，ほとんどのものが無文である。(34)・(35)はこの種の壺の胴部下半と思われる。内面は頸部までヘラケズリとし，胴部外面上半は縦方向のハケ目，下半は縦方向のヘラミガキとし，底部外面もヘラミガキするものが多く，底部付近に焼成時の黒斑を残すもの(29・30・32)が多い。口径20.4cm(24)，16.2cm(25)，15cm(26)，15.9cm(27)，15.8cm(28)，17.4cm(29)，16cm(30)。胴部最大径35.6cm(24)，35.4cm(28)，33.6cm(29)，21cm(31)，21.9cm(32)。

甕（33～41） 口縁部が屈曲して立ち上がる複合口縁の中型甕で，口縁外面に２～３条程度の不明瞭な凹線をめぐらすものがほとんどである。口頸部の内外面は横ナデ，胴部上半外面はハケ目，内面は頸部直下までヘラケズリする。全形のわかるもの(41)では，胴部外面下半は縦方向のヘラミガキとし，底部は小さくやや張り出し，この部分にもヘラミガキを加えている。なお，(41)の底部には焼成後の穿孔があり，外面から穿孔している。口径12.2cm(33)，12.2cm(34)，13.5cm(35)，15.6cm(36)，17.2cm(37)，15cm(38)，16cm(39)，13.2cm(40)，13cm(41)。胴部最大径18.2cm(41)。器高21.7cm(41)。

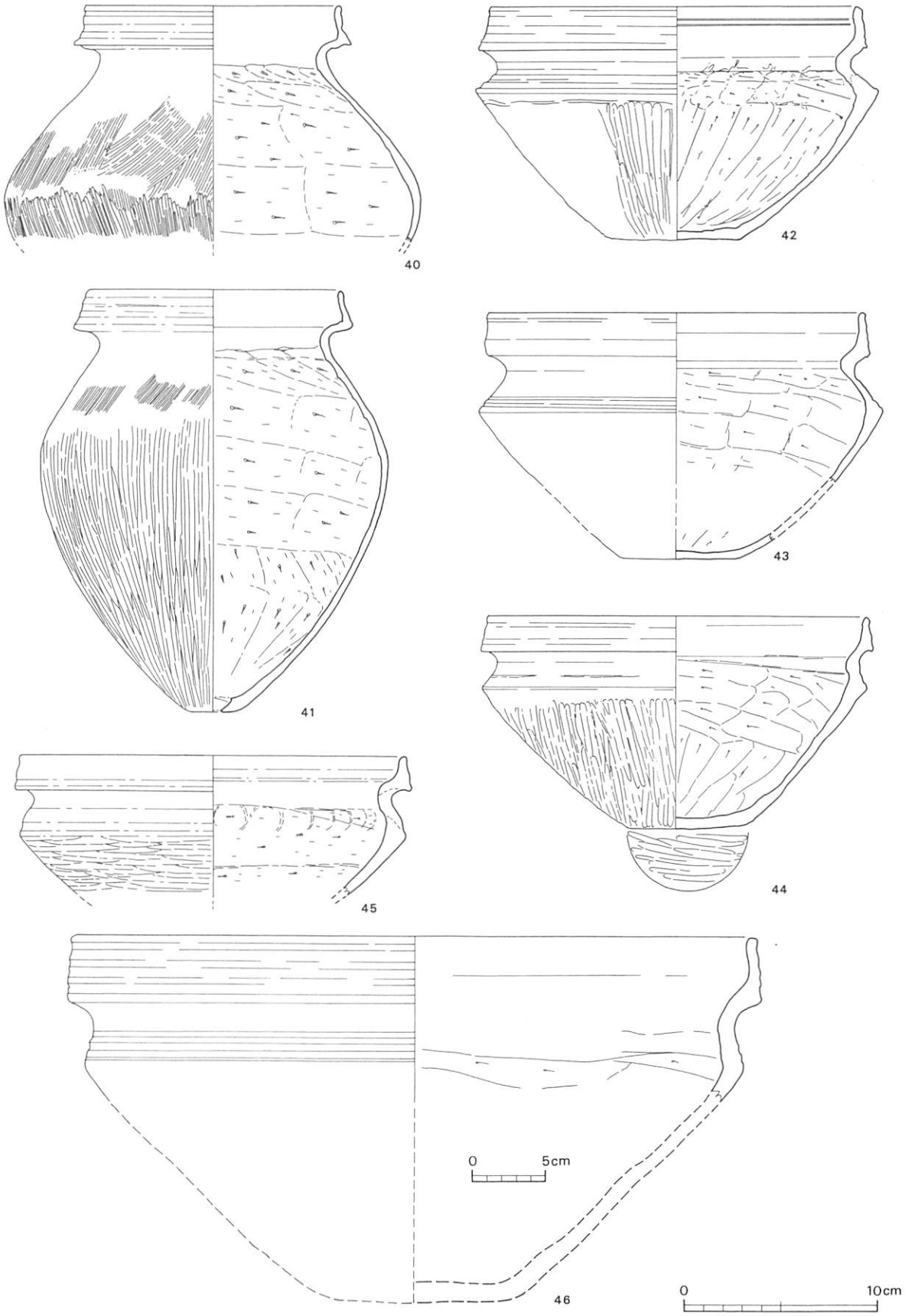
鉢（42～48） 口縁部が屈曲して立ち上がり，体部も「く」の字に屈曲するいわゆる「神谷川式」の鉢である。通常の鉢形のもの(42～47)と，口縁部の立ち上がりが弱く体部が間延びして深いタイプ(48)がある。口縁外面は凹線とは認定しがたい不明瞭な凹凸がめぐる。体部の屈曲は鋭く，屈曲部に不明瞭な凹線を１～２条めぐらせるもの(43・45・46)もある。口頸部～体部上半は内外面とも横ナデ，体部下半外面は縦方向のヘラミガキが多いが，横方向のヘラミガキを施すもの(45)もある。内面は頸部付近までヘラケズリするものが多く，底部外面はヘラミガキする(44)ようである。口径19cm(42)，19.4cm(43)，19.4cm(44)，19.8cm(45)，47cm(46)，21.6cm(47)，16.5cm(48)。器高12cm(42)，11cm(44)。



第29図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図１（1:3, 1:4）



第30図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図２（1:3, 1:4）



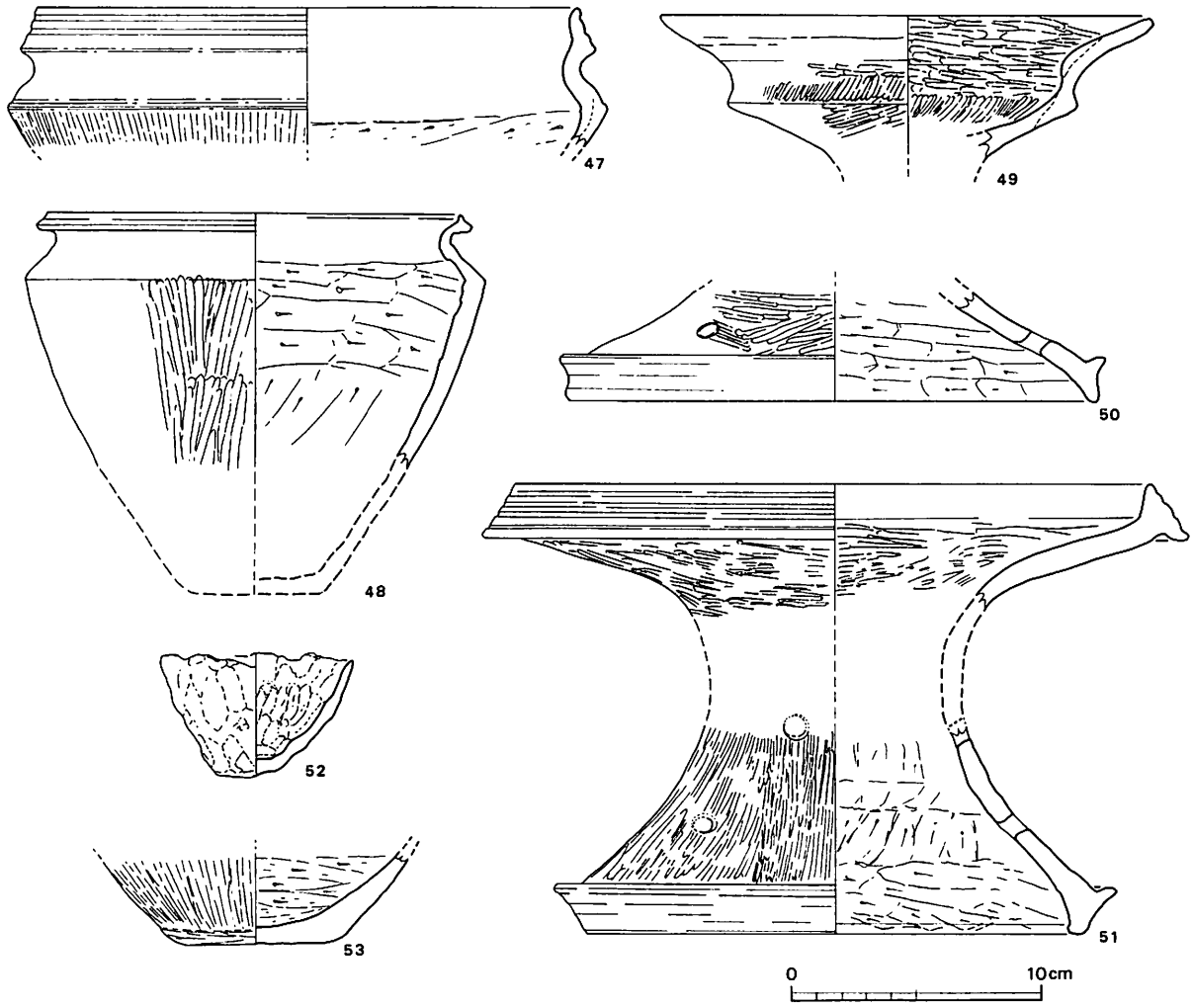
第31図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図３（1:3, 1:4）

高杯（49） 口縁部が反転して開く高杯の杯部の破片である。内外面とも比較的丁寧なヘラミガキを施す。口径19.5cm。

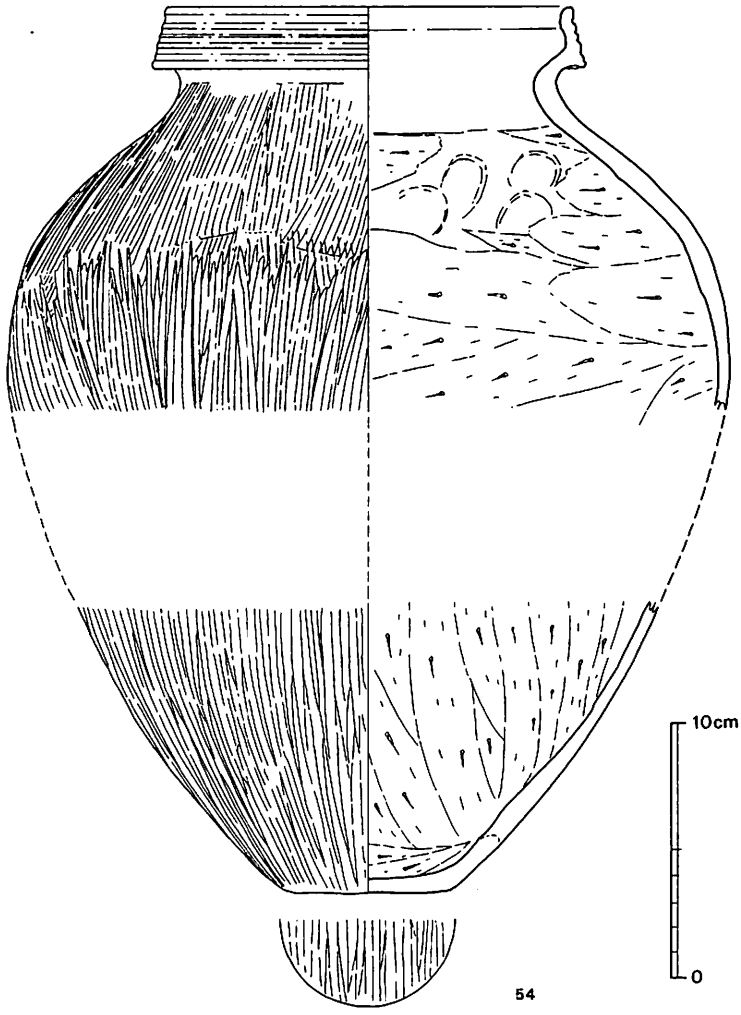
器台（50・51） 受け部と台部の両端が拡張する器台の破片で，筒部は比較的短い。受け部の端面に４条程度の不明瞭な凹線をめぐらせ(51)，筒部及び台部に円形の透かし孔がある。台部の拡張する端面は横ナデで凹線は観察できない。(50)も(51)と同じ器台の台部と推定される。外面及び受け部内面はヘラミガキで，台部内面はヘラケズリとする。受け部の口径25.5cm，台部径20cm。

手づくね土器（52） 内外面ともに指頭圧痕を残す手づくねの小型鉢である。口径7.7cm，器高4.9cm。

底部（53） 壺の底部と推定される破片である。胴部下半外面は縦方向のヘラミガキとするが，底部付近は横方向に磨いている。内面はヘラケズリとする。底面はヘラミガキと思われるが摩滅して不明である。



第32図　曽川１号遺跡ＳＫ１出土遺物実測図４（1:3）



第33図　曽川１号遺跡ＳＫ２出土遺物実測図（1:3）

（３）ＳＫ２（第33図）

弥生後期中葉（Ｖ－２様式）の壺が出土している。

弥生土器（54）

壺（54） 口縁部がやや内傾して立ち上がる複合口縁の短頸壺で，形態的に甕と類似する。口縁部外面には４条の不明瞭な凹線をめぐらせ，口頸部は内外面ともナデとする。胴部は卵形で肩が張らず，上半はハケ目を残し，最大径以下は縦方向のヘラミガキとする。内面は頸部付近までヘラケズリである。底部は比較的安定した平底であるが，ここもヘラミガキを施す。底部付近全面に焼成時の黒斑が観察され，口縁部の一部にも黒斑がある。胴部最大径付近に一部煮炊きの痕跡である煤が付着しており，用途的には甕として使用されたことが推定される。口径16cm，胴部最大径28.6cm，器高35cm（推定）。

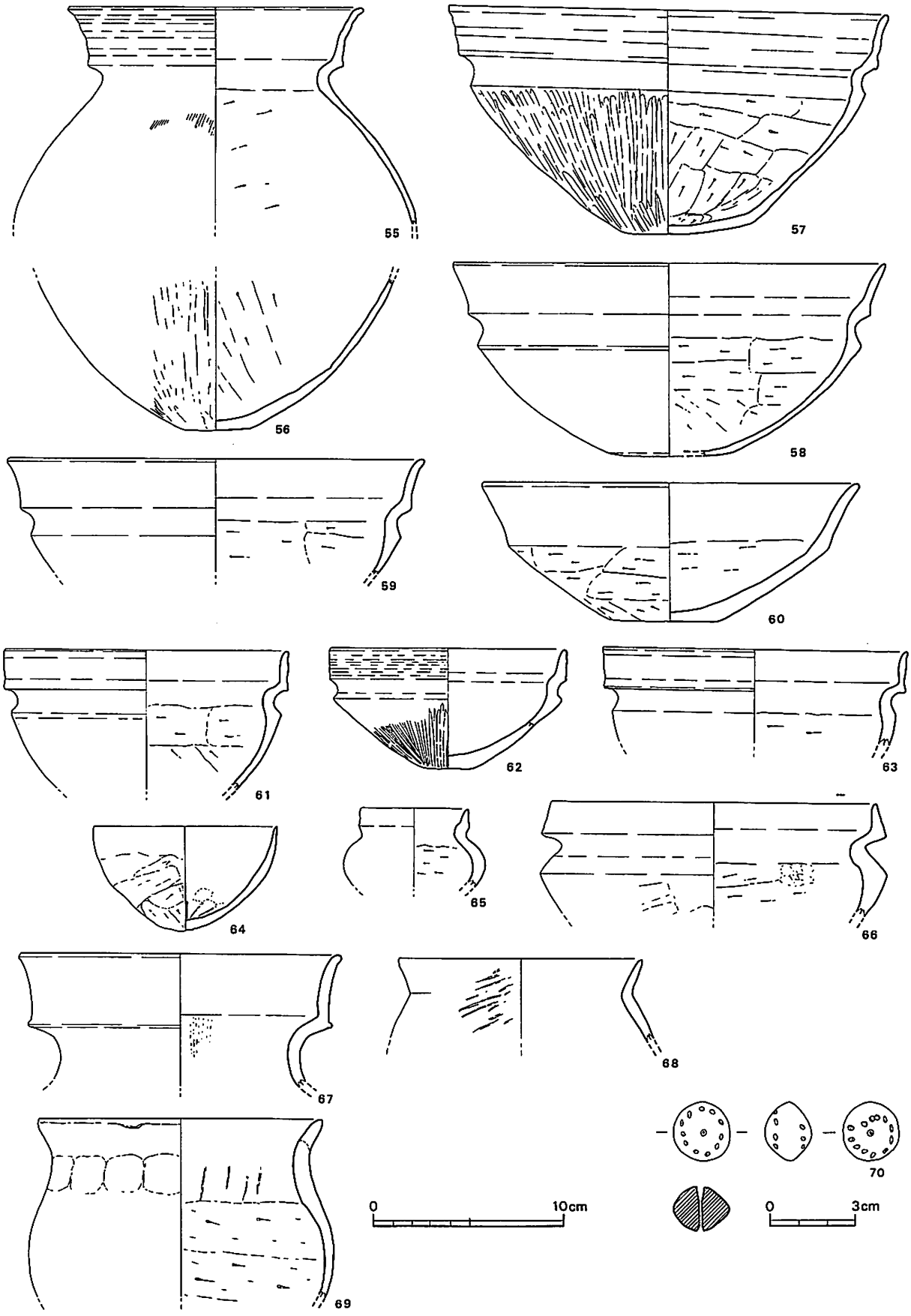
（４）ＳＢ２（第34図，図版22）

弥生後期後葉（Ｖ－３様式）～末葉（いわゆる庄内併行期）の壺・鉢・甕・土製品などが出土している。

弥生土器（55～69）

壺（65・67） ともに複合口縁の壺である。(65)はきわめて小型で器壁も厚く，通常の壺の用途は想定しがたい手づくね土器風の壺である。口頸部内外面及び胴部外面はナデ，内面は頸部付近までヘラケズリとする。口径5.7cm。(67)は口縁部が外反して立ち上がり，口縁部，頸部とも無文の壺である。口縁部と頸部の接合部は，丸みを帯びて外方にやや突出する。口縁端部はやや外反ぎみに丸くおさめる。口縁部，頸部は内外面ともナデとするが，頸部内面に成形時の縦ジワが残る。形態的に中国山地以北に分布するいわゆる山陰系の土器である。口径16.8cm。

甕（55・68・69） 複合口縁のもの(55)と単純口縁のもの(68・69)がある。複合口縁のもの(55)は口縁部が外反して開き，外面に強いナデによる凹線状の凹凸がある。口縁部と頸部の接合部は，



第34図　曽川１号遺跡ＳＢ２出土遺物実測図（1:2, 1:3）

丸みを帯びて外方にやや突出する。口縁端部はやや外反ぎみに丸くおさめる。口縁部，頸部は内外面ともナデとし，胴部上半外面はハケ目，内面は頸部までヘラケズリとする。全体に器壁が薄く，壺(67)と同じく形態的にもいわゆる山陰系の土器である。口径15.4cm。単純口縁のもの(68・69)は頸部が「く」の字状あるいはゆるやかに外反して開き，口縁端部はやや尖りぎみにまとめる。成形，調整ともに粗雑で，内面を頸部付近までヘラケズリ，その他はナデを基本とするらしいが，器面も摩滅して明瞭に観察できない。とくに(69)は二次焼成を受けて器面が剥離し変色している。口径13cm(68)，15cm(69)。

鉢（57～64，66） 口縁部が屈曲して立ち上がり，体部も「く」の字に屈曲するいわゆる「神谷川式」の鉢(57～59，61～63，66)と体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢(60)，内湾する単純口縁の鉢(64)の三種の鉢がある。いわゆる「神谷川式」の鉢(57～59，61～63，66)は，口縁部が外反して開くもの(57～59)，ほぼ直立するもの(61～63)，内傾ぎみのもの(66)の三種があるが，いずれのタイプのものも外面の凹線状のナデがきわめて不明瞭あるいは失われている。また体部の屈曲も口縁径よりも外に出ずこの種の鉢としてはもっとも退化した形態を示している。調整は体部外面をヘラミガキ，内面をヘラケズリとするものが一般的である。体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢(60)は，体部下半外面をヘラケズリし，内面はヘラケズリののちナデを施す。また，内湾する単純口縁の鉢(64)も外面をヘラケズリ，内面を丁寧なナデとし，これらは形態の違いだけでなく前出の「神谷川式」の鉢の調整手法が基本的に逆転している。口径23.4cm(57)，23cm(58)，21.9cm(59)，19.9cm(60)，14.9cm(61)，12.4cm(62)，16.2cm(63)，9.7cm(64)，17.2cm(66)。器高11.8cm(57)，10.2cm(58)，6.3cm(62)，5.5cm(64)。

底部（56） 卵形の胴部をもつ甕の底部とみられるもので，やや外湾ぎみの小さな底部である。胴部下半から底部外面までヘラミガキとし，内面はヘラケズリであるが，底面に指で押さえた痕跡を残す。

土製品（70）

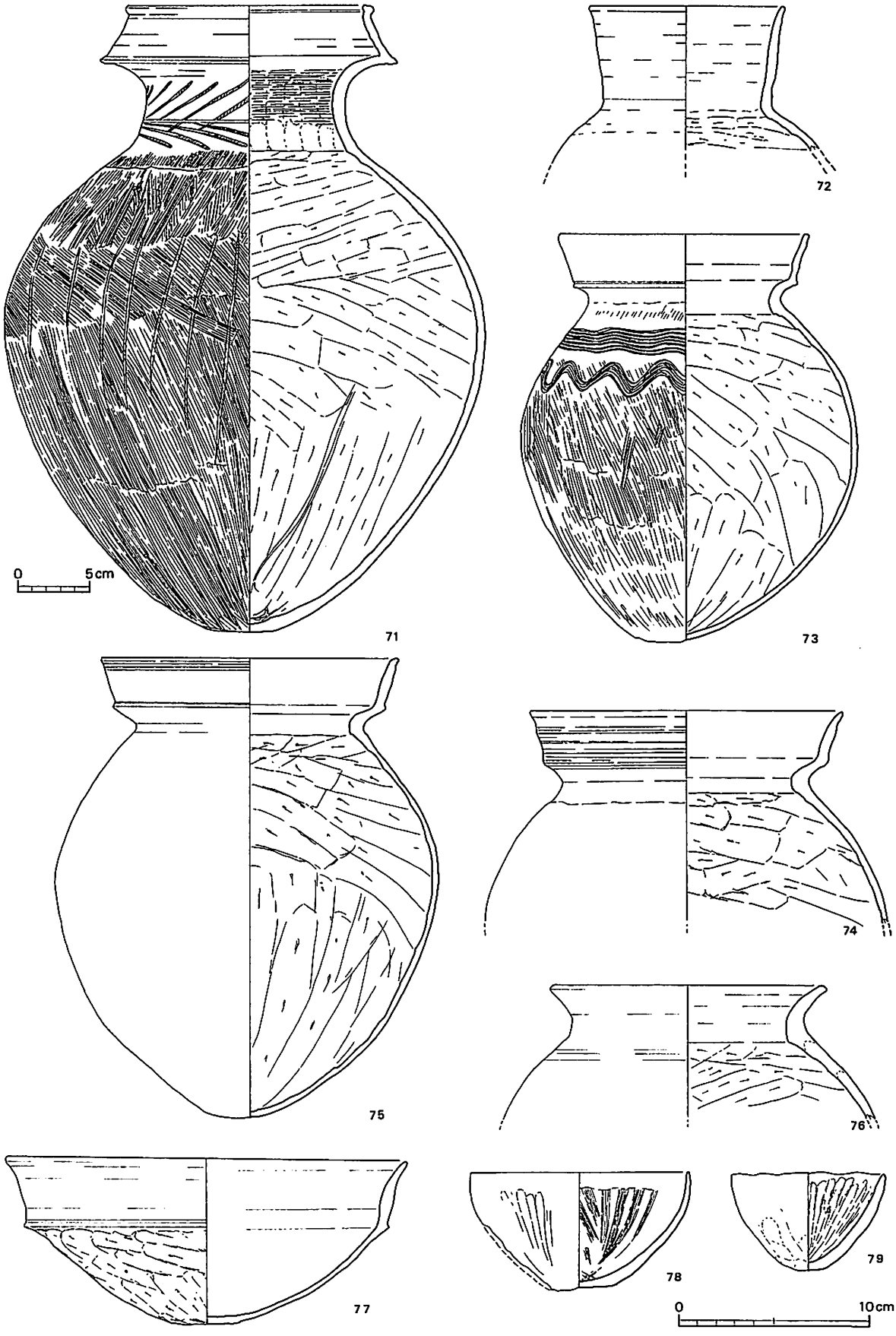
土玉（70） 断面が角のとれた算盤玉状をした土玉で，中央に焼成前の穿孔が貫通し，周囲に竹串状のもので刺突した列点文が片側に11箇所，裏面に12箇所認められる。焼成はよく，色調は明るい赤褐色である。最大径2.1cm，厚さ1.6cm，重さ6.1ｇ。

（５）ＳＢ３（第35～37図，図版23・24）

弥生後期末葉（いわゆる庄内併行期）の壺・甕・鉢のほか土製紡錘車，砥石，中世後期（16世紀）の土師質土器などが出土している。

弥生土器（71～78）

壺（71・72） 内傾して立ち上がる複合口縁の壺(71)と単純口縁の直口壺(72)がある。複合口縁の壺(71)は，口縁端部はやや外反ぎみに内外に拡張し，口縁部外面は無文。頸部中央に沈線を１条めぐらせ，その上下に板状工具の小口の押圧による綾杉文を施す。胴部は全面にハケ目を残すが胴部上半から下半にかけて筋状にヘラミガキを加えている。底部はわずかに平底をつくりだすが，



第35図　曽川１号遺跡ＳＢ３出土遺物実測図１（1:3, 1:4）

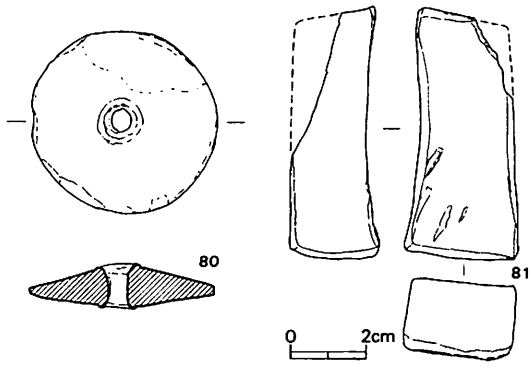
安定を意図したものではない。内面は頸部以下をヘラケズリとし，底面付近には指頭圧痕を残す。全体につくりや調整は丁寧で淡褐色を呈し焼成はよい。口径17cm，胴部最大径33.5cm，器高43.2cm。単純口縁の直口壺(72)は，口縁部が外傾ぎみに立ち上がり，口唇部はやや外反する。胴部は球形あるいはタマネギ形に膨らむものと推定される。口縁部内外面とも強い横ナデを施し，内面は頸部以下をヘラケズリとする。全体に乳白色を呈し，つくりも丁寧で他地域からの搬入土器の可能性がある。口径10cm。

甕（73～76） 複合口縁のもの(73～75)と単純口縁のもの(76)がある。複合口縁のもの(73～75)は，口縁部が外傾して開き，口縁部と頸部の接合部は，丸みを帯びて外方にやや突出する。口縁端部は丸くおさめるもの(73)とやや外反ぎみに尖るもの(74・75)とがある。口縁部，頸部は内外面ともナデとする以外は器面が摩滅して明確ではないが，胴部外面はハケ目，内面は頸部までヘラケズリを基本とするようである。胴部上半に櫛描きによるやや波打つ直線文と波状文を施すもの(73)がある。全体に器壁が薄く，形態的に中国山地以北に分布するいわゆる山陰系の土器である。口径12.8cm(73)，16.3cm(74)，15.3cm(75)。胴部最大径17.6cm(73)，20.2cm(75)。器高21.2cm(73)，24cm(75)。単純口縁のもの(76)は，ゆるやかに「く」の字状に外反する口縁部に卵形の胴部がつくようである。口縁端部は，やや角張って丸くおさめる。外面はナデ，内面は頸部以下をヘラケズリとする。頸部及び胴部上半外面に煮炊きの痕跡である煤が付着している。口径14cm。

鉢（77～79） 体部にアクセントをつけて外反する単純口縁の鉢(77)と内湾する単純口縁の鉢(78・79)の二種の鉢がある。前者(77)は，アクセント部分がやや鋭く突出して突帯状をなし，アクセント部分より上は内外面ともナデとする。体部下半から底部にかけての外面はヘラケズリし，底部と体部の境界は失われている。体部下半内面はヘラケズリののちナデを施し，外面よりも内面の仕上げを丁寧に行っている。後者(78・79)は，口縁部が内湾して鋭く立ち上がる小型鉢(78)と手ずくね土器風の鉢(79)がある。ともに外面をナデ，内面をヘラミガキとし，外面よりも内面の仕上げを丁寧に行っている。口径11.5cm(78)，8cm(79)。器高6.2cm(78)，5.2cm(79)。

土製品（80）

紡錘車（80） 断面が菱形に近い均整のとれた紡錘車である。中央の孔は焼成前の穿孔で孔の内径は0.5cm，開口部で0.8cmである。周縁は部分的に面とりを施す。直径4.8cm，厚さ1.2cm，重量21ｇ。



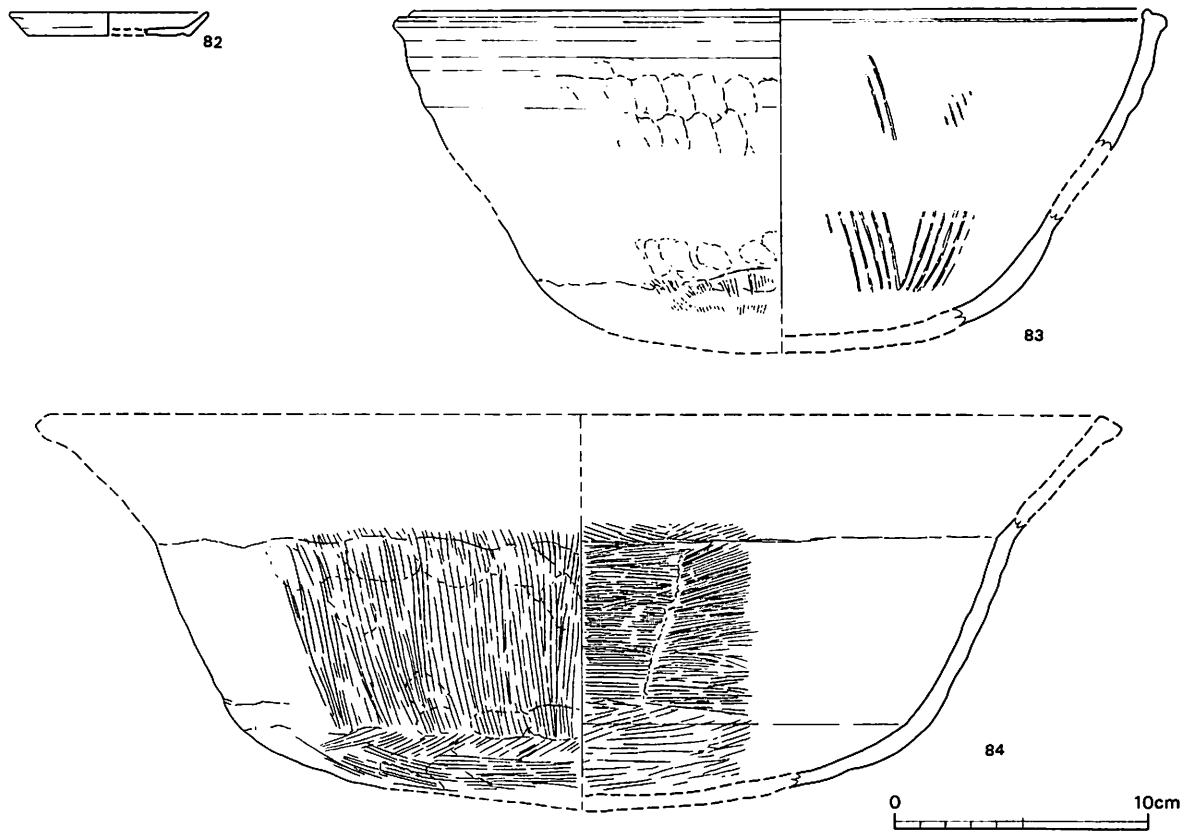
第36図 曽川１号遺跡ＳＢ３出土遺物実測図２ (1:2)

石器（81）

砥石（81） 長方形の小型の砥石で，小口面を含めて六面すべてを砥面として使用している。石材は細粒凝灰岩できめが細かい。長さ6.6cm，幅2.9cm，厚さ２cm，重量43.5ｇ。

土師質土器（82～84）

皿（82） 底部が回転糸切りの小皿で，淡褐色を呈し，焼成はやや軟質。口径7.8cm，器高0.9cm。



第37図　曽川１号遺跡ＳＢ３出土遺物実測図３（1:3）

擂鉢（83） 内面に六条単位のカキ目をやや間隔をあけて施す土師質の擂鉢である。口縁端部は内外に拡張して玉縁状にする。口径29.4cm。

鍋（84） 内外面ともハケ目調整を密に施す土師質の土鍋である。外面に煤が付着し，内底面には黒色のこげつきの痕跡が残る。

（６）ＳＫ３（第38図，図版25）

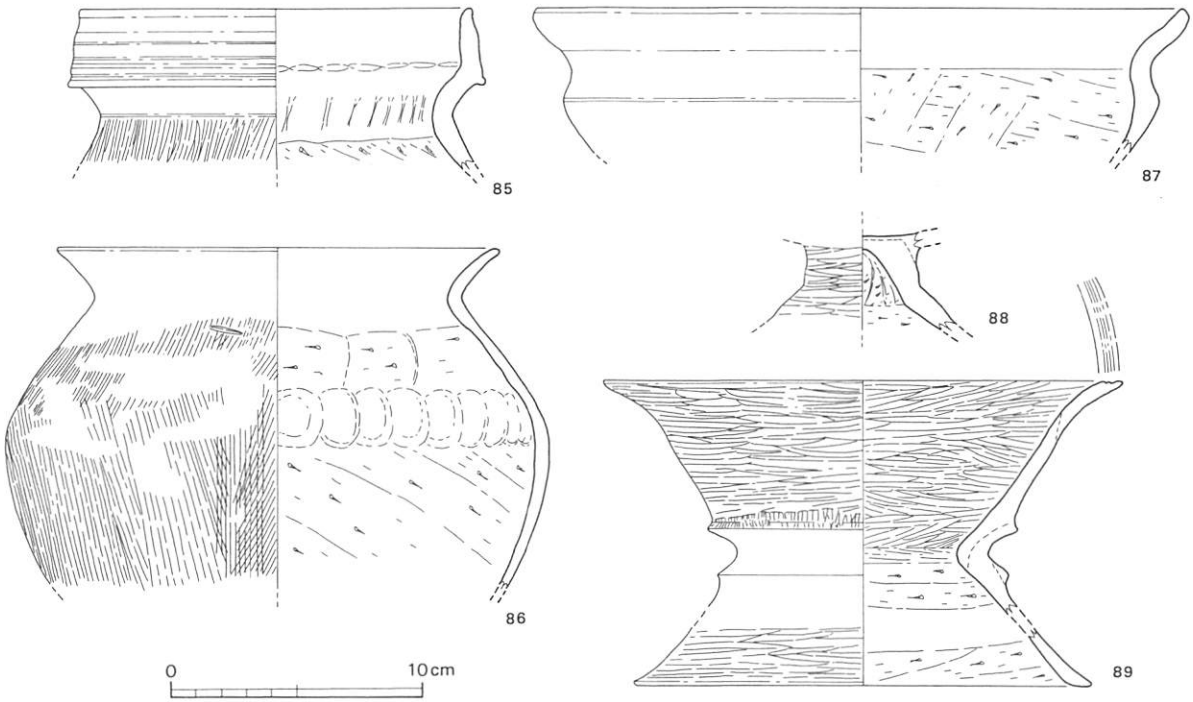
弥生後期後葉（Ｖ－３様式）を中心とする時期の壺・甕・鉢・高杯・鼓形器台が出土している。

弥生土器（85～89）

壺（85） 複合口縁の壺の口頸部破片で，口縁部が内傾して立ち上がり，口縁部外面に数条の不明瞭な凹線状の凹凸をめぐらす。胴部上半外面はヘラミガキ，内面は頸部以下をヘラケズリとする。形態的に甕と類似する頸部の短い壺である。口径15.4cm。

甕（86） 口縁部が「く」の字状に外反する単純口縁の甕で，口縁端部は拡張せず丸みを帯びている。外面の頸部以下はハケ目を残し，頸部下に一箇所だけヘラによる刺突がある。内面は頸部直下までヘラケズリで，胴部上半に指頭圧痕を残し，この上下でケズリの方向が変わる。外面の胴部最大径以下に煤が付着する。口径17.3cm，胴部最大径21.5cm。

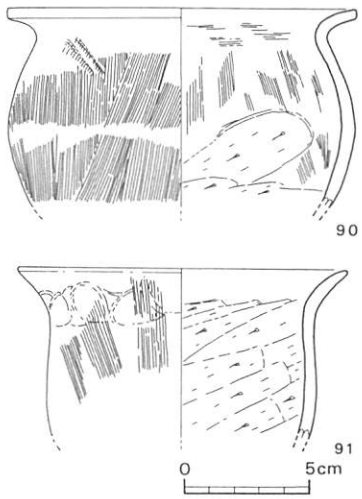
鉢（87） 体部に屈曲をもって口縁部が開く単純口縁の鉢で，口縁部はやや内湾ぎみに開く。口頸部内外面ともに横ナデを施し，内面は屈曲部以下をヘラケズリとする。口径25.3cm。



第38図　曽川１号遺跡ＳＫ３出土遺物実測図（1:3）

高杯（88） 脚柱部が短く，脚裾部が大きく開く高杯での脚柱部の破片で，脚部を杯部に差し込んで成形している。脚柱部外面は丁寧なヘラミガキ，内面はヘラケズリである。杯部の内底面はナデで，杯部内面及び脚部外面を丹塗りしており，丁寧なつくりと丹塗りを施すことなどから，他地域からの搬入土器かと思われる。

鼓形器台（89） 受け部と裾部がともに大きく開く鼓形器台で，受け部の上端を横のやや拡張して二条の鈍い凹線をめぐらせている。受け部内面はヘラケズリの後丁寧なヘラミガキを施し，裾部内面はヘラケズリのままである。外面は受け部，裾部ともにヘラミガキとし，外面と受け部内面には丹塗りを施す。受け部口径20.5cm，裾部口径18cm，器高（推定）12cm。



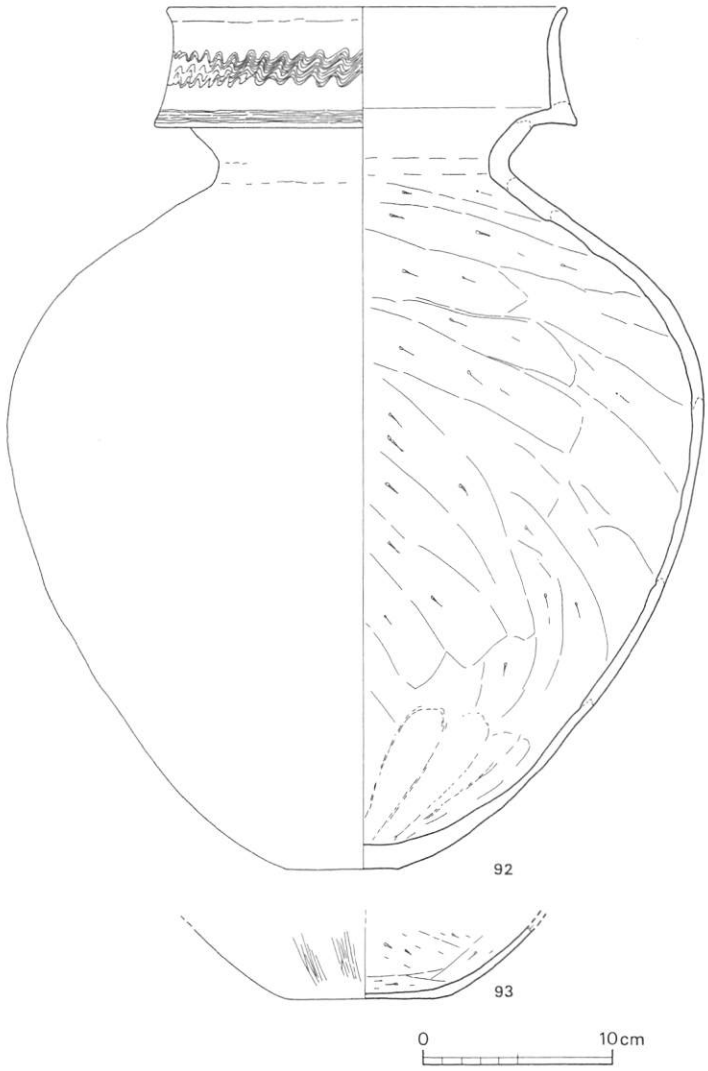
第39図　曽川１号遺跡ＳＫ４出土遺物実測図（1:3）

（７）ＳＫ４（第39図，図版26）

弥生後期後葉（Ｖ－３様式）と推定される甕が出土している。

弥生土器（90・91）

甕（90・91） ともに単純口縁の甕で，胴部がやや張って口縁部が強く外反するの甕(90)と，胴部が張らず口縁部の外反もゆるやかな甕(91)がある。口縁部が強く外反する甕(90)は，口縁端部をやや上方にナデ上げ，頸部が「く」の字状に外反



第40図　曽川１号遺跡ＳＫ５出土遺物実測図（1:4）

する。口頸部内外面はナデ，胴部外面はハケ目を残し，内面は上半部まで粗雑なヘラケズリとする。口径及び胴部最大径はともに13.8cm。口縁部の外反がゆるやかな甕(91)は，口縁端部をやや尖りぎみに整形した小型の甕で，外面には細かなハケ目の痕跡を残し，内面はヘラケズリとする。形態的に備後地方のＶ様式にはないタイプで，色調は暗赤褐色を呈し胎土もやや異質で，安芸方面からの搬入土器の可能性が考えられる。口径13cm，胴部最大径10.7cm。

（８）ＳＫ５（第40図，図版25）

弥生後期末葉（いわゆる庄内併行期）の壺などが出土している。

弥生土器（92・93）

壺（92） 口縁部がやや内湾して立ち上がる複合口縁の壺で，口縁端部は外反し，外面に細かな櫛描き波状文をめぐらす。頸部は短く卵形の胴部へとつづき，底部はやや張りだす平底である。外面は全面ナデ調整とするようであるが，焼成がやや軟質で表面が剥離して不明瞭である。内面は頸部以下をヘラケズリとする。胴部下半に焼成時の大きな黒斑が観察される。口径20.8cm，胴部最大径36.7cm，器高45.3cm。

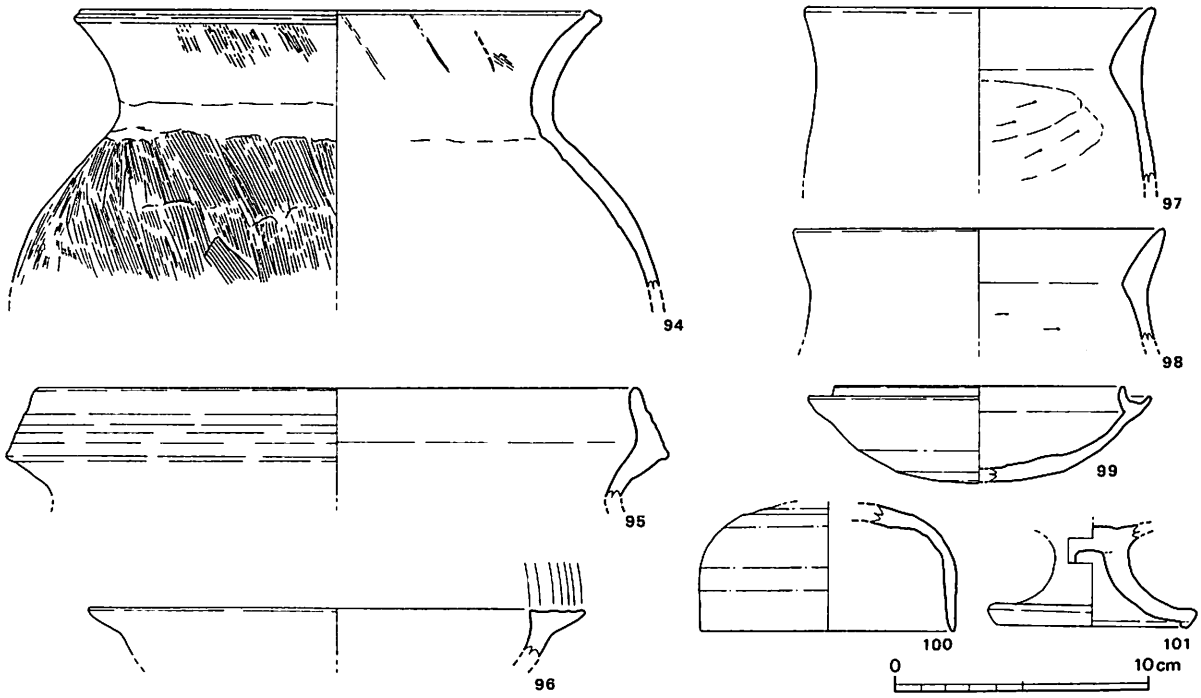
底部（93） 壺の底部とみられ，比較的大きな底部であるが，器壁が薄いところから中型壺の底部と推定される。

（９）ＳＢ５（第41図，図版26）

弥生後期中葉（Ｖ－２様式）の壺と鉢，弥生後期末葉（いわゆる庄内併行期）の甕のほか，古墳時代後期（６世紀）の土師器の甕，須恵器の杯身・坩蓋・高杯などが出土している。

弥生土器（94・95・96）

甕（94） 頸部がゆるやかに「く」字状に外反し，口縁端部は強いナデを施して内側へやや拡張する。外面は全面ハケ調整ののち口頸部はナデを施しハケ目を消しているが，頸部以下はハケ目を



第41図　曽川１号遺跡ＳＢ５出土遺物実測図（1:3）

明瞭に残す。内面は全面に丁寧なナデを施す。焼成はきわめて良好で明褐色を呈し，形態や調整手法などから他地域からの搬入土器の可能性が考えられる。口径20.2cm。

壺（95） 口縁部がやや内傾して立ち上がる複合口縁の壺で，口縁部外面に不明瞭な凹線状の凹凸がめぐる。口径23.8cm。

鉢（96） 口縁部を水平方向に拡張して，上面に３条の鈍い凹線をめぐらす鉢または高杯の杯部と推定される。口径19.5cm。

土師器（97・98）

甕（97・98） ともに口縁部がわずかに外反する小型の甕で，内面の頸部以下を大きくヘラケズリして胴部の器壁を薄く仕上げている。口径13.8cm(97)，14.6cm(98)。

須恵器（99～101）

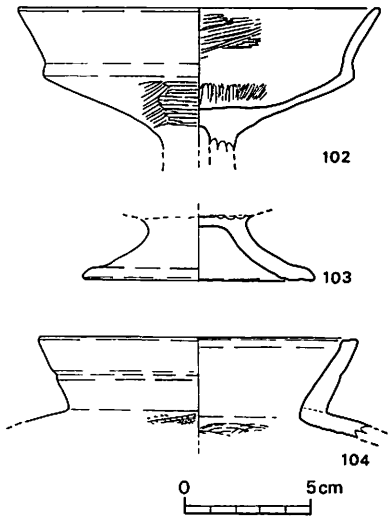
杯身（99） 立ち上がり部が外湾ぎみに短く立ち上がり，受部も短く外上方に伸びる杯身で，外底面は回転ヘラ切りののち未調整で，その他は回転水ビキとする。口径11.4cm，器高3.8cm。

坩蓋（100） 天井部が高いやや大型の坩蓋と推定されるもので，天井部の外面は回転ヘラ切りののち未調整で，その他は回転水ビキとする。口径10cm，器高５cm。

高杯（101） 裾部を折り返して内傾ぎみにした脚部の低い小型の高杯で，大きさに比べて器壁が厚い。調整は内外面とも回転水ビキとする。脚裾部径7.5cm。

（10）ＳＫ６（第42図，図版26）

弥生後期中葉（Ｖ－２様式）の高杯のほか，古代（７世紀）の須恵器の高杯・壺などが出土している。



第42図　曽川１号遺跡ＳＫ６
出土遺物実測図（1:3）

弥生土器（102）

高杯（102） 杯部が屈曲して上半が短く外方に開く高杯で，杯部と脚柱部の接合は，差込み技法によっている。上半は内外面ともナデを基本とするが，内面の一部はヘラミガキを行っている。下半は内外面ともヘラミガキで，内面は放射状，外面は脚柱部を中心に多角形状にヘラミガキを施している。口径14.3cm。

須恵器（103・104）

高杯（103） 裾部がアクセントをつけて開く脚部の低い小型の高杯で，調整は内外面とも回転水ビキとする。脚裾部径９cm。

壺（104） 口縁端部に面をもつ短頸壺で，口縁部外面に沈線を１条めぐらせる。胴部外面は縄タタキ，内面に青海波文を明瞭に残す。口径12.4cm。

（11）ＳＤ１（第43図，図版26）

古代（９世紀）の須恵器の杯身のほか，土錘やガラス製小玉などが出土している。

須恵器（105・106）

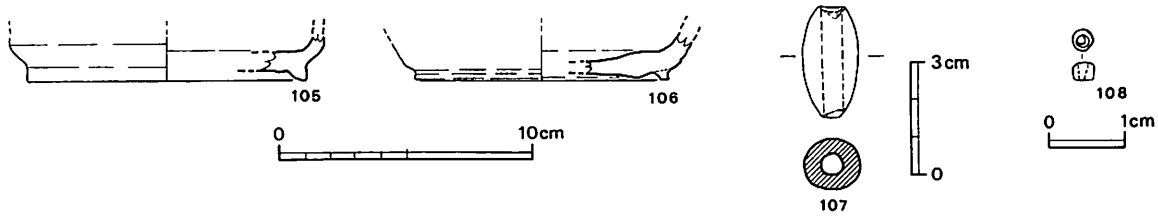
杯身（105・106） ともに高台付の杯身で，杯部外底面の周縁付近に断面が台形状の小さな高台が付く。杯部は高台からやや上がったあたりから屈曲をもって立ち上がる。調整は内外面とも回転水ビキである。高台径11.1cm(105)，10.2cm(106)。

土製品（107）

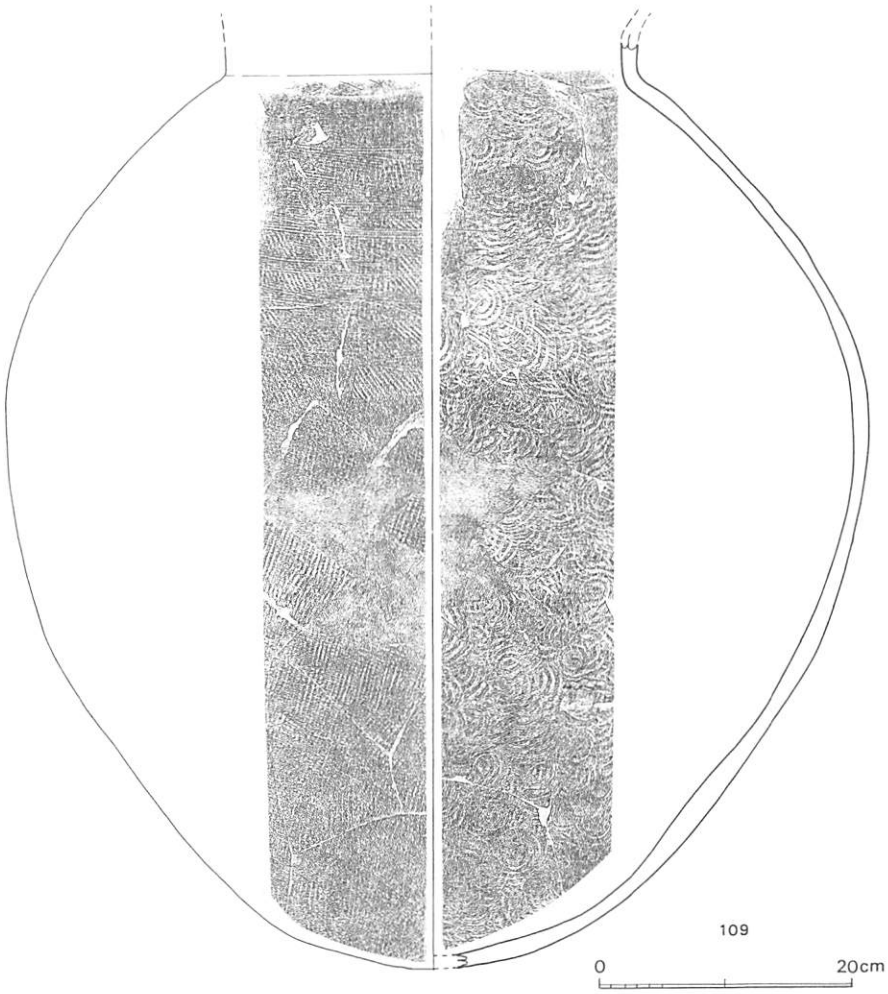
土錘（107） 紡錘形の素焼きの土錘で直径0.5cmの芯棒に粘土を巻いて成形している。中世のものと思われる。長さ2.9cm，最大径1.4cm，重さ3.9ｇ。

ガラス製品（108）

小玉（108） ライトブルーのガラス製小玉で，0.15cm程度の芯棒に巻きつけて成形している。弥生時代のものと思われる。最大径0.3cm，高さ0.25cm，重さ0.06ｇ。



第43図　曽川１号遺跡ＳＤ１出土遺物実測図（1:1, 1:2, 1:3）



第44図　曽川１号遺跡ＳＸ１出土遺物実測図（1:6）

（12）ＳＸ１（第44図）

古墳時代後期（６世紀）の須恵器の大甕が出土している。

須恵器（109）

大甕（109） 胴部最大径約70cm，器高80cmを超える大甕で，胴部外面は平行タタキののちカキ目を施し，内面には青海波文の当て具の痕跡が全面に残る。頸部付近から上は内外面ともナデを施し，口縁部はゆるやかに外反する。全体に乳灰色を呈し，焼成はやや軟質である。

（13）ＳＢ８（第45図，図版27）

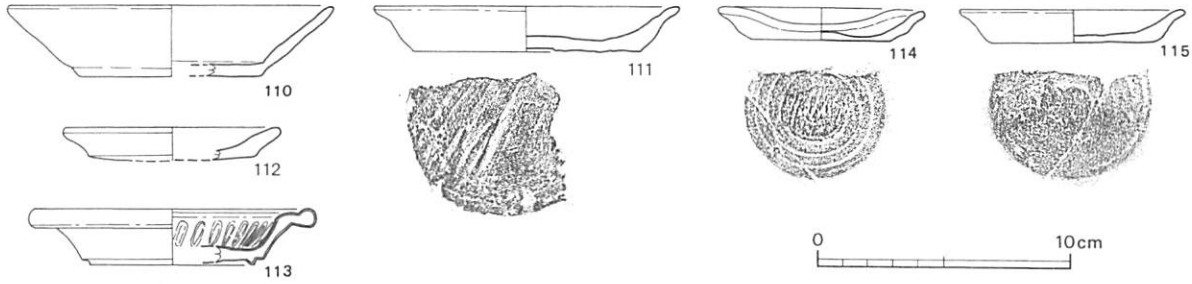
柱穴内から中世後期（16世紀）の土師質土器の皿や古銭（中国渡来銭）が出土している。

土師質土器（110）

皿（110） 底部を回転ヘラ切りとする平底の皿で，底部はヘラ切り離し後ナデを施す。口径12.8cm，器高2.85cm。

古銭

中国銭（138） 北宋銭の元豊通宝（初鋳1078年）である。



第45図　曽川１号遺跡ＳＢ８・９，ＳＤ４出土遺物実測図（1:3）

（14）ＳＢ９（第45図，図版27）

柱穴内から中世後期（16世紀）の土師質土器の皿と国産陶器の折縁皿などが出土している。

土師質土器（111・112）

皿（111・112） ともに底部を回転ヘラ切りとする平底の皿で，板状の圧痕を残すもの(111)とヘラ切り離しのままのもの(112)がある。111の内面には，赤色粘土による化粧が施されている。口径12cm(111)，8.4cm(112)，器高1.8cm(111)，1.3cm(112)。

国産陶器（113）

折縁皿（113） 口縁端部を折返して玉縁状にした瀬戸焼の折縁皿で，体部内面を蓮弁状に窪ませている。内底面を除いて体部内外面と高台内にも淡黄緑色の灰釉が掛けられているが，高台内と畳付の部分の釉はガラス化していない。素地に微細な砂粒を含み，胎土は暗灰色を呈し，焼成は堅緻。口径10.8cm，器高2.2cm。

（15）ＳＤ４（第45図，図版27）

中世後期（16世紀）の土師質土器の皿などが出土している。

土師質土器（114・115）

皿（114・115） ともに底部を回転ヘラ切りとする平底の皿で，底部はヘラ切り離しのままである。114は口縁部が部分的に押し下げられており，当初から灯明皿として製作されたものと推定され，この部分には燈芯による煤が付着している。口径８cm(114)，8.8cm(115)，器高1.2cm(114)，1.2cm(115)。

（16）ＳＫ７（第46図，図版27）

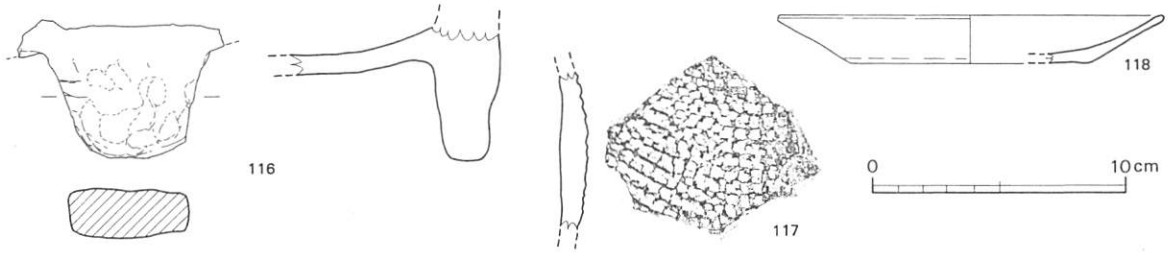
中世後期（16世紀）の瓦器の火鉢，国産陶器の甕，土師質土器の皿などが出土している。

瓦器（116）

火鉢（116） 平底の周囲に脚を付けた瓦器の火鉢で，内底面はハケ目の痕跡を残すヘラミガキで，外底面はナデ仕上げとしている。暗灰色を呈し，胎土も瓦質である。

国産陶器（117）

甕（117） 外面に格子状のタタキ目を明瞭に残す亀山焼の甕の体部破片で，内面の調整は摩滅して不明であるが，内面は明褐色を呈し，焼成は軟質である。



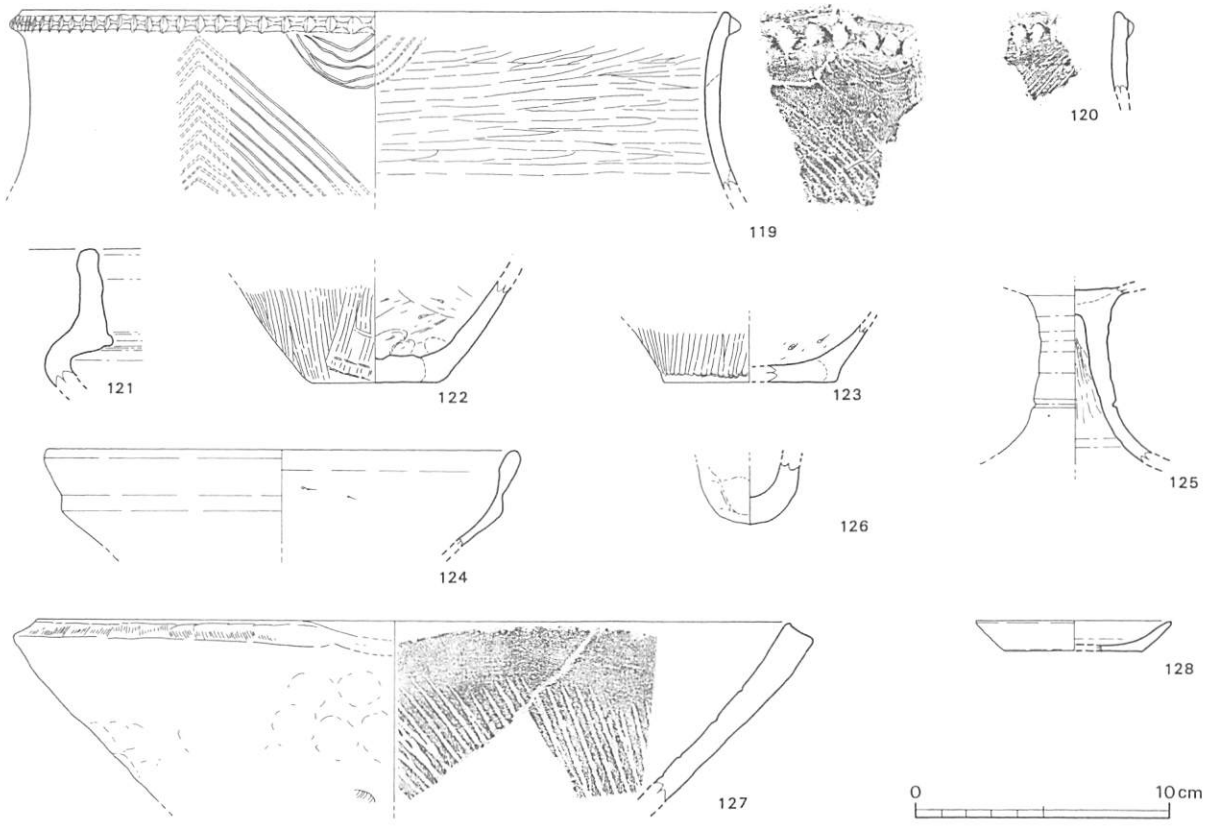
第46図　曽川１号遺跡ＳＫ７出土遺物実測図（1:3）

土師質土器（118）

皿（118） 底部を回転ヘラ切りとする平底の皿で，内外面ともに表面が赤褐色，内部が黒色を呈し，二次焼成を受けたようである。口径15.3cm，器高1.9cm。

（17）調査区内柱穴（第47図，図版28）

調査区内の各柱穴内から，縄文晩期土器の深鉢，弥生後期土器の壺・鉢，古墳時代（６世紀）の須恵器の高杯，古代（８～９世紀）の製塩土器，中世後期（16世紀）の瓦質土器の擂鉢や土師質土器の皿などが出土している。



第47図　曽川１号遺跡地区内柱穴出土遺物実測図（1:3）

縄文土器（119・120）

深鉢（119・120）ともに口縁端部外面に貼付突帯をめぐらす晩期後半の刻目突帯文土器で，突帯下にヘラ描きの山形文（あるいは複合鋸歯文か）と重弧文などを施す。体部内面はヘラミガキ，外面はナデとし，突帯の刻目が大きく明瞭なもの(119)とやや細いもの(120)がある。突帯下にヘラ描き文様を施すことなどから中山Ｂ式と共通する特徴をもつが，文様意匠はやや異なる。口径27.8cm(119)。Ａ調査区Ｔ５－Ｐ２２出土。

弥生土器（121～124）

壺（121）後期後葉（Ｖ－３様式）の複合口縁の壺の口縁部破片で，口縁部外面上端に鈍い凹線状の窪みがめぐる頸部の短い壺と推定される。Ａ調査区Ｕ６－Ｐ１５出土。

底部（122・123）ともに中型壺あるいは甕の底部と推定されるもので，内面はヘラケズリ，外面はハケ目，底面は無調整とする後期後葉（Ｖ－３様式）ごろのもの(122)と，内面をヘラケズリ，外面をヘラミガキ，底面はナデとする中期後葉（Ⅳ様式）ごろのもの(123)がある。Ａ調査区Ｕ６－Ｐ１５(122)，Ａ調査区Ｔ６－Ｐ３６(123)出土。

鉢（124）体部に屈曲をもって口縁部が開く単純口縁の鉢で，口縁端部が丸みをもって肥厚する。器面が磨耗して内外面とも調整は不明瞭であるが，内面は口縁部をやや下がってヘラケズリするようである。後期後半（Ｖ－３様式）の鉢と推定される。口径18.6cm。Ｄ調査区Ｐ６出土。

須恵器（125）

高杯（125）脚柱部の中央に沈線を１条めぐらすやや脚の長い高杯で，内面に成形時のしぼり目が残り，外面は回転水ビキとする。古墳時代後期（６世紀）ごろのものと推定される。Ａ調査区Ｔ５－Ｐ１１出土。

製塩土器（126）

製塩土器（126）小型の深鉢形をした製塩土器の底部付近の破片と思われるもので，器壁の厚さは0.8～1.0cmである。内面はナデ，外面は指頭圧痕を残すナデとし，明褐色を呈して焼成は良い。形態の特徴から古代（８～９世紀）の製塩土器と推定される。Ａ調査区Ｕ６－Ｐ８出土。

瓦質土器（127）

擂鉢（127）内面に六条単位のカキ目を密に施す瓦質の擂鉢である。口縁端部はあまり肥厚せず，端面をナデてやや窪ませる。外面の調整は指頭圧痕の残るナデとする。口径31.6cm。Ｄ調査区Ｐ３８出土。

土師質土器（128）

皿（128）底部を回転ヘラ切りとする平底の皿で，底部はヘラ切り離し後無調整である。口径7.6cm，器高1.2cm。Ｄ調査区Ｐ５０出土。

古銭（139）

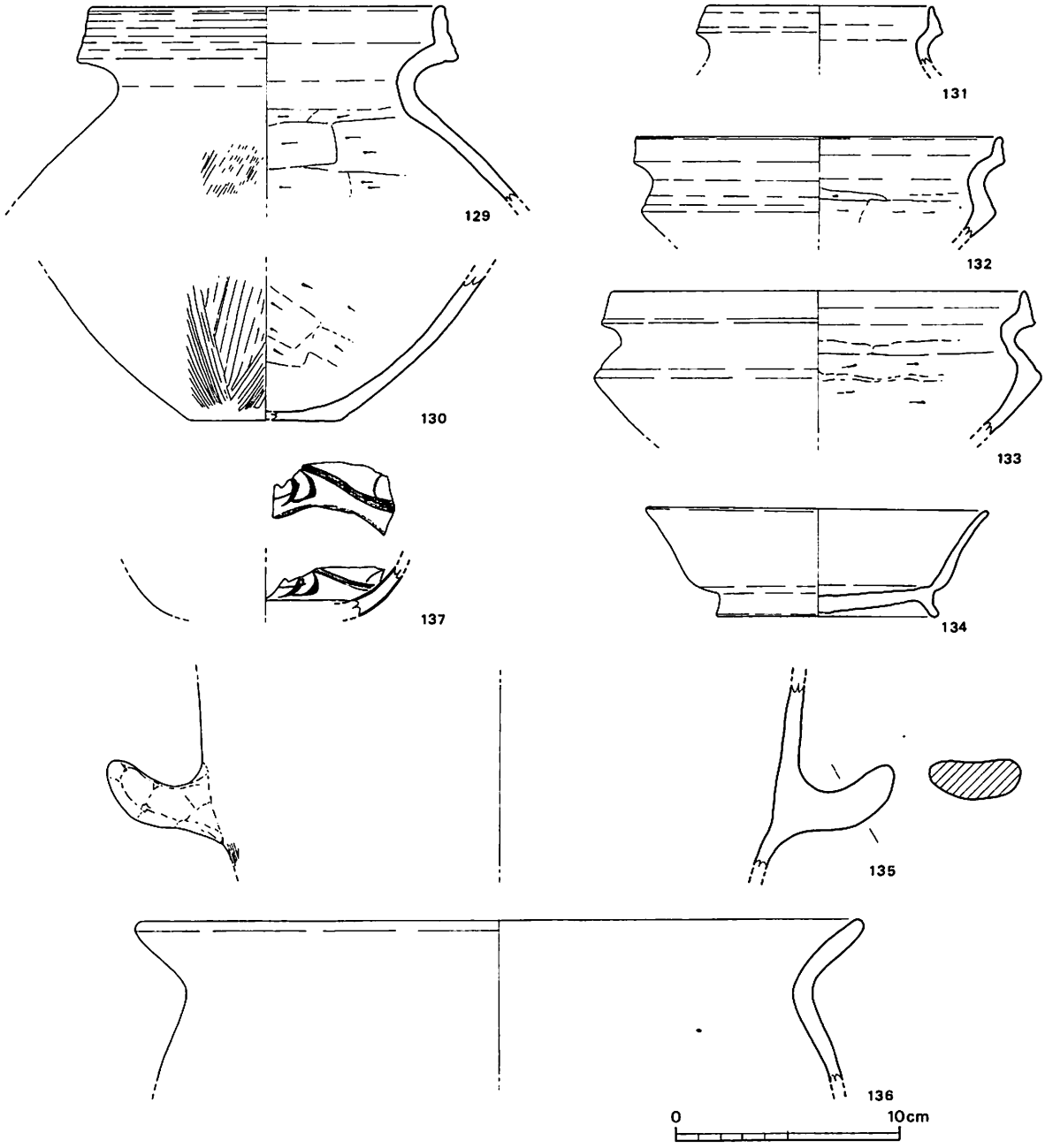
中国銭（139）北宋銭の元符通宝（初鋳1098年）と推定される。Ａ調査区Ｔ６－Ｐ３５出土。

（18）調査区内（第48図，図版26，28）

調査区内から，弥生後期土器の壺・甕・鉢，奈良時代の須恵器の杯身や古墳～奈良時代の土師器の甑，中世の輸入陶磁器の碗，古銭などが出土している。

弥生土器（129～133）

壺（129） 後期中葉（Ｖ－２様式）の複合口縁の壺の口頸部破片で，口縁部外面に不明瞭な凹線文が３～４条めぐる。内面は頸部以下をヘラケズリ，外面にはハケ目が残る。口径15.7cm。Ａ調査区出土。



第48図　曽川１号遺跡地区内出土遺物実測図（1:3）

底部（130） 中型壺の底部と推定されるもので，内面はヘラケズリ，外面はヘラミガキとし，底面もヘラミガキとする後期中葉（Ｖ－２様式）ごろのものであろう。Ａ調査区出土。

甕（131） 口縁部が屈曲して立ち上がる複合口縁の中型甕で，器面が磨耗して内外面とも調整は不明瞭である。後期中葉（Ｖ－２様式）以降のものと推定される。Ａ調査区出土。

鉢（132・133） ともに口縁部が屈曲して立ち上がり，体部も「く」の字に屈曲するいわゆる「神谷川式」の鉢である。口縁部外面及び体部の屈曲部上面にも凹線状の凹凸がほとんど観察されず，後期中葉（Ｖ－２様式）以降のものと推定される。口径16.2cm(132)，18.4cm(133)。Ａ調査区出土。

須恵器（134）

杯身（134） 体部が外反して開く高台付の杯身で，杯部外底面の周縁よりやや内側に高台が付く。杯部外底面は回転ヘラ切りで，その他は内外面とも回転水ビキ調整である。淡灰色を呈し焼成はやや軟質であるが，比較的丁寧なつくりである。口径15.1cm，器高4.7cm，高台径9.7cm。Ａ調査区出土。

土師器（135・136）

甑（135・136） ともに把手がつく甑と推定されるものである。135も同一個体と思われる把手が伴って出土している。形態的に，直線的に下部がすぼまるタイプ(135)と体部が球形に張り出すタイプ(136)があり，前者は古墳時代後期，後者は奈良時代ごろのものである可能性が高い。Ａ調査区出土。

輸入陶磁器（137）

碗（137） 青磁碗の体部下半の破片で，高台付近から弧状に割れている。内面に片切彫りと櫛描きで花文（いわゆる劃花文）を描き，内外面とも暗灰緑色の半透明釉をかける。外面は釉の下に回転ヘラケズリの痕跡が観察される。素地に微細な黒色粒子を含み，胎土は暗灰白色を呈する。釉の全面に細かな氷裂が観察される。12世紀ごろの宋代の製品と推定される。Ｄ調査区出土。

註

（１）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『中屋遺跡Ｂ地点発掘調査報告Ｉ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第162集　1998年

（２）庄原市教育委員会『妙見山遺跡』庄原市文化財調査報告書第６集　1999年

第3表　遺構一覧表

単位cm　括弧は現存値

遺構	性格	地区	時期	平面形	長さ	幅	深さ	備考
SB1	竪穴住居跡	A	弥生時代後期中葉	円形	径700		(4～7)	主柱穴7＋2？
SB2-a	竪穴住居跡	C	弥生時代後期末葉	円形	径430		(50)	拡張・建替，d→c→a→b 主柱穴a：3，b：2，c：7，d：不明
SB2-b	竪穴住居跡	C	弥生時代後期末葉	円形	径560		(35)	
SB2-c	竪穴住居跡	C	弥生時代後期末葉	円形	径670		(40)	
SB2-d	竪穴住居跡	C	弥生時代後期末葉	円形	径(870)		(30)	
SB3	竪穴住居跡	D	弥生時代後期末葉	隅丸方形	南北450	東西390	(44)	主柱穴2
SB4	竪穴住居跡	D	古墳時代前期	方形	南北570	東西540	(5～10)	主柱穴2？(壁周囲に10)
SB5	竪穴住居跡	B	古墳時代後期(6世紀)	方形	一辺600		(5～10)	主柱穴4
SB6	竪穴住居跡	B	古墳時代後期(6世紀)	方形	一辺600		(5～15)	主柱穴不明
SB7	竪穴住居跡	A	古墳時代？	隅丸方形	一辺(250)		(5～15)	主柱穴不明
SB8	掘立柱建物跡	D	中世(16世紀)	1間×2間	桁行497	梁行392		N30° W
SB9	掘立柱建物跡	A	中世(16世紀)	2間×1間	桁行390	梁行280		N23° E
SB10	掘立柱建物跡	A	中世(16世紀)	2間×1間	桁行390	梁行180		N23° E
SD1	溝	D	古代(9世紀)		(815)	(60～90)	(50)	等高線に直交
SD2	溝	D	中世(16世紀)		(525)	(20)	(5)	SB8に伴う(北側)
SD3	溝	D	中世(16世紀)		(2200)	(40)	(2～6)	SB8に伴う(東側)
SD4	溝	A	中世(16世紀)		(115)	(30～50)	(10)	SB9に伴う(東側)
SK1	土坑	A	弥生時代後期後葉	隅丸長方形	長軸154～164，底184	短軸78～87，底85	(40～60)	
SK2	土坑	A	弥生時代後期中葉	不整円形	径230		(10)	
SK3	土坑	A	弥生時代後期後葉	長方形	長軸400	短軸270	(20)	
SK4	土坑	A	弥生時代後期後葉	方形	長軸330	短軸280	(10)	
SK5	土坑(土器棺墓？)	A	弥生時代後期末葉	隅丸方形	長軸230，中段190，底140	短軸185，中段155，底120	(11～30)	弥生土器壺(棺？)，2段掘り
SK6	土坑	A	古代(7世紀)	不整形	長軸325	短軸250	(10～20)	
SK7	土坑	D	中世(16世紀)	円形	径290		(60)	
SK8	土坑	A	中世	隅丸長方形	長軸155～175	短軸250	(60～90)	
SK9	土坑	A	中世	楕円形	径140～120		(30)	
SK10	土坑	A	中世	円形	径120		(38)	
SK11	土坑	A	不明	楕円形	径195～100		(43)	
SX1	土坑状遺構	A	古墳時代後期	不整形	長軸820	短軸(100～275)	(110)	古・新の2時期あり，新(須恵器甕，礫)
T5-P11	柱穴	A	古代？	隅丸方形	一辺80		(50)	柱掘方は版築状につき固める

第4表　掲載遺物一覧表

単位cm　＊は復元値

遺物番号	器種	器種	地区	遺構	口径	高さ	胴部最大径	底径
1	弥生土器	壺	A	SB1	＊14	－	－	－
2	弥生土器	壺	A	SB1	＊15.6	－	－	－
3	弥生土器	甕	A	SB1	＊10	－	－	－
4	弥生土器	甕	A	SB1	＊ 9.8	－	－	－
5	弥生土器	甕	A	SB1	＊12.5	－	－	－
6	弥生土器	甕	A	SB1	＊14.4	－	－	－
7	弥生土器	甕	A	SB1	＊13.8	－	－	－
8	弥生土器	甕	A	SB1	＊14.5	－	－	－
9	弥生土器	甕	A	SB1	－	－	－	－
10	弥生土器	甕	A	SB1	－	－	－	－
11	弥生土器	鉢	A	SB1	＊16.8	－	－	－
12	弥生土器	鉢	A	SB1	＊18.2	－	－	－
13	弥生土器	鉢	A	SB1	＊20.2	－	－	－
14	弥生土器	底部	A	SB1	－	－	－	3.2
15	弥生土器	底部	A	SB1	－	－	－	4.1
16	弥生土器	器台	A	SB1	－	－	－	－
17	弥生土器	器台	A	SB1	－	－	－	－
18	弥生土器	器台	A	SB1	－	－	－	＊25
19	石製品	砥石	A	SB1	長 9.8	幅 5.5	厚 2.8	重 160g
20	弥生土器	壺	A	SK1	＊ 7.8	11.5	11.7	4
21	弥生土器	壺	A	SK1	＊13	－	－	－
22	弥生土器	壺	A	SK1	15.5	－	－	－
23	弥生土器	壺	A	SK1	17.5	－	－	－
24	弥生土器	壺	A	SK1	20.4	－	35.6	－
25	弥生土器	壺	A	SK1	＊16.2	－	－	－
26	弥生土器	壺	A	SK1	15	－	－	－
27	弥生土器	壺	A	SK1	15.9	－	－	－
28	弥生土器	壺	A	SK1	15.8	－	35.4	－
29	弥生土器	壺	A	SK1	17.4	＊35	33.6	－
30	弥生土器	壺	A	SK1	16	＊34.2	－	6.8
31	弥生土器	壺	A	SK1	－	－	＊21	3.3
32	弥生土器	壺	A	SK1	－	－	21.9	3.2
33	弥生土器	甕	A	SK1	12.2	－	－	－
34	弥生土器	甕	A	SK1	12.2	－	－	－
35	弥生土器	甕	A	SK1	13.5	－	－	－
36	弥生土器	甕	A	SK1	＊15.6	－	－	－
37	弥生土器	甕	A	SK1	＊17.2	－	－	－
38	弥生土器	甕	A	SK1	＊15	－	－	－
39	弥生土器	甕	A	SK1	＊16	－	－	－
40	弥生土器	甕	A	SK1	13.2	－	21.6	－
41	弥生土器	甕	A	SK1	＊13	21.7	＊18.2	2.4
42	弥生土器	鉢	A	SK1	19	12	－	6.8
43	弥生土器	鉢	A	SK1	19.4	＊12.6	－	6
44	弥生土器	鉢	A	SK1	19.4	11	－	6.2
45	弥生土器	鉢	A	SK1	＊19.8	－	－	－
46	弥生土器	鉢	A	SK1	＊47	－	－	－
47	弥生土器	鉢	A	SK1	＊21.6	－	－	－
48	弥生土器	鉢	A	SK1	＊16.5	－	－	－
49	弥生土器	高杯	A	SK1	＊19.5	－	－	－
50	弥生土器	器台	A	SK1	－	－	－	＊21.2
51	弥生土器	器台	A	SK1	＊25.5	－	－	＊20
52	弥生土器	手づくね	A	SK1	＊ 7.7	4.9	－	2.6
53	弥生土器	底部	A	SK1	－	－	－	6.4
54	弥生土器	壺	A	SK2	16	＊35	28.6	6.4
55	弥生土器	甕	C	SB2	＊15.4	－	－	－
56	弥生土器	底部	C	SB2	－	－	－	3.4
57	弥生土器	鉢	C	SB2	23.4	11.8	－	5
58	弥生土器	鉢	C	SB2	＊23	10.2	－	5
59	弥生土器	鉢	C	SB2	＊21.9	－	－	－
60	弥生土器	鉢	C	SB2	＊19.9	7.3		6.6
61	弥生土器	鉢	C	SB2	＊14.9	－	－	－
62	弥生土器	鉢	C	SB2	＊12.4	6.3	－	2.6
63	弥生土器	鉢	C	SB2	＊16.2	－	－	－
64	弥生土器	鉢	C	SB2	＊ 9.7	－	－	－
65	弥生土器	壺	C	SB2	＊ 5.7	－	＊ 7.4	－
66	弥生土器	鉢	C	SB2	＊17.2	－	－	－
67	弥生土器	壺	C	SB2	＊16.8	－	－	－
68	弥生土器	甕	C	SB2	＊13	－	－	－
69	弥生土器	甕	C	SB2	15	－	16.2	－
70	土製品	土玉	C	SB2	径 2.1	厚 1.6	重 6.1g	－
71	弥生土器	壺	D	SB3	17	43.2	33.5	3.6
72	弥生土器	壺	D	SB3	10	－	－	－
73	弥生土器	甕	D	SB3	12.8	21.2	17.6	2.8
74	弥生土器	甕	D	SB3	16.3	－	－	－
75	弥生土器	甕	D	SB3	15.3	24	20.5	2.4
76	弥生土器	甕	D	SB3	＊14	－	－	－
77	弥生土器	鉢	D	SB3	21	8.8	－	3.2
78	弥生土器	鉢	D	SB3	11.5	6.2	－	3
79	弥生土器	鉢	D	SB3	8	5.2	－	1.2
80	土製品	紡錘車	D	SB3	径 4.8	厚 1.2	重21 g	孔径 0.5
81	石製品	砥石	D	SB3	長 6.6	幅 2.9	厚 2	重43.5g
82	土師質土器	皿	D	SB3	＊ 7.8	0.9	－	＊ 6.4
83	土師質土器	擂鉢	D	SB3	＊29.4	－	－	－
84	土師質土器	鍋	D	SB3	－	－	－	－
85	弥生土器	壺	A	SK3	＊15.4	－	－	－
86	弥生土器	甕	A	SK3	＊17.3	－	＊21.5	－
87	弥生土器	鉢	A	SK3	＊25.3	－	－	－
88	弥生土器	高杯	A	SK3	－	－	－	－
89	弥生土器	鼓形器台	A	SK3	＊20.5	＊12	－	＊18
90	弥生土器	甕	A	SK4	＊13.8	－	＊13.8	－
91	弥生土器	甕	A	SK4	＊13	－	＊10.7	－
92	弥生土器	壺	A	SK5	20.8	45.3	36.7	4.6
93	弥生土器	底部	A	SK5	－	－	－	8
94	弥生土器	甕	B	SB5	20.2	－	－	－
95	弥生土器	壺	B	SB5	＊23.8	－	－	－
96	弥生土器	鉢	B	SB5	＊19.5	－	－	－
97	土師器	甕	B	SB5	＊13.8	－	－	－
98	土師器	甕	B	SB5	＊14.6	－	－	－
99	須恵器	杯身	B	SB5	＊11.4	3.8	－	－
100	須恵器	坩蓋	B	SB5	＊10	5	－	－
101	須恵器	高杯	B	SB5	－	－	－	7.5
102	弥生土器	高杯	A	SK6	＊14.3	－	－	－
103	須恵器	高杯	A	SK6	－	－	－	9
104	須恵器	甕	A	SK6	＊12.4	－	－	－
105	須恵器	杯身	D	SD1	－	－	－	＊11.1
106	須恵器	杯身	D	SD1	－	－	－	＊10.2
107	土製品	土錘	D	SD1	長 2.9	径 1.4	重3.9 g	－
108	ガラス製品	小玉	D	SD1	径 0.3	高0.25	重0.06g	－
109	須恵器	甕	A	SX1	－	＊80以上	＊70	－
110	土師質土器	皿	D	SB8	＊12.8	2.85	－	＊ 6.4
111	土師質土器	皿	A	SB9	12	1.8	－	＊ 9
112	土師質土器	皿	A	SB9	＊ 8.4	1.3	－	＊ 6.6
113	瀬戸焼	折縁皿	A	SB9	＊10.8	2.2	－	＊ 6.5
114	土師質土器	皿	D	SD4	8	1.2	－	5.6
115	土師質土器	皿	D	SD4	8.8	1.2	－	6.8
116	瓦器	火鉢	D	SK7	－	－	－	－
117	亀山焼	甕	D	SK7	－	－	－	－
118	土師質土器	皿	D	SK7	＊15.3	1.9	－	＊ 9.4
119	縄文土器	深鉢	A	柱穴	＊27.8	－	－	－
120	縄文土器	深鉢	A	柱穴	－	－	－	－
121	弥生土器	壺	A	柱穴	－	－	－	－
122	弥生土器	底部	A	柱穴	－	－	－	5
123	弥生土器	底部	D	柱穴	－	－	－	6.8
124	弥生土器	鉢	D	柱穴	＊18.6	－	－	－
125	須恵器	高杯	A	柱穴	－	－	－	－
126	製塩土器	鉢	A	柱穴	－	－	－	－
127	瓦質土器	擂鉢	D	柱穴	＊31.6	－	－	－
128	土師質土器	皿	D	柱穴	＊ 7.6	1.2	－	＊ 5.4
129	弥生土器	壺	A	包含層	＊15.7	－	－	－
130	弥生土器	底部	A	包含層	－	－	－	6.6
131	弥生土器	甕	A	包含層	－	－	－	－
132	弥生土器	鉢	A	包含層	＊16.2		－	－
133	弥生土器	鉢	A	包含層	＊18.4	－	－	－
134	須恵器	杯身	A	包含層	15.1	4.7	－	9.7
135	土師器	甑	A	包含層	－	－	－	－
136	土師器	甑	A	包含層	＊32.3	－	－	－
137	青磁	碗	D	包含層	－	－	－	－
138	古銭	元豊通宝	D	SB8	－	－	－	－
139	古銭	元符通宝	A	柱穴	－	－	－	－

Ⅴ まとめ

曽川１号遺跡は御調川の南側にあり，牛の皮城跡が存在する丘陵の北側裾部に立地する集落遺跡である。西側には御調川に注ぐ小河川の江国川があり，東側には小さな谷が入りこんでいる。集落はそれらに挟まれた丘陵裾部緩斜面に立地する。

調査の結果，竪穴住居跡７軒，掘立柱建物跡３棟，土坑11基，溝４条のほか多数の柱穴を検出した。ここでは，遺構の時期，集落の変遷，竪穴住居跡の形態，ＳＫ１出土土器について述べ，まとめとする。

１　遺構の時期

検出した遺構の時期を，出土遺物，土層関係，埋土などを基に，次のように推定する。

時　　期	遺構の種類（平面形）	遺構番号（調査地区）
弥生時代後期中葉（Ⅴ－２期）	竪穴住居跡（円形） 土坑（不整円形）	ＳＢ１（Ａ地区） ＳＫ２（Ａ地区）
弥生時代後期後葉（Ⅴ－３期）	土坑（隅丸長方形） 土坑（長方形） 土坑（方形）	ＳＫ１（Ａ地区） ＳＫ３（Ａ地区） ＳＫ４（Ａ地区）
弥生時代後期末葉（庄内式併行期）	竪穴住居跡（円形） 竪穴住居跡（円形） 竪穴住居跡（円形） 竪穴住居跡（円形） 竪穴住居跡（隅丸方形） 土坑（隅丸方形）	ＳＢ２-ａ（Ｃ地区） ＳＢ２-ｂ（Ｃ地区） ＳＢ２-ｃ（Ｃ地区） ＳＢ２-ｄ（Ｃ地区） ＳＢ３（Ｄ地区） ＳＫ５（Ａ地区）
古墳時代前期	竪穴住居跡（方形）	ＳＢ４（Ｄ地区）
古墳時代後期（６世紀）	竪穴住居跡（方形） 竪穴住居跡（方形）	ＳＢ５（Ｂ地区） ＳＢ６（Ｂ地区）
古墳時代後期	土坑状遺構（不整形）	ＳＸ１（Ａ地区）
古墳時代？	竪穴住居跡（隅丸方形）	ＳＢ７（Ｂ地区）
古代（７世紀）	土坑（不整形）	ＳＫ６（Ａ地区）
古代（９世紀）	溝	ＳＤ１（Ｄ地区）
古代？	柱穴	Ｔ５－Ｐ11（Ａ地区）

時　　期	遺構の種類（平面形）	遺構番号（調査地区）
中世（16世紀）	掘立柱建物跡	ＳＢ８（Ｄ地区）
	掘立柱建物跡	ＳＢ９（Ａ地区）
	掘立柱建物跡	ＳＢ10（Ａ地区）
	溝	ＳＤ２（Ｄ地区）
	溝	ＳＤ３（Ｄ地区）
	溝	ＳＤ４（Ｄ地区）
	土坑（円形）	ＳＫ７（Ｄ地区）
中世	土坑（隅丸長方形）	ＳＫ８（Ａ地区）
	土坑（楕円形）	ＳＫ９（Ａ地区）
	土坑（円形）	ＳＫ10（Ａ地区）
不明	土坑（楕円形）	ＳＫ11（Ａ地区）

2　集落の変遷

１）縄文時代　Ａ地区では晩期の土器片が出土しているが，明確な遺構は確認していない。

２）弥生時代後期　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区では弥生時代後期中葉～末葉の円形や隅丸方形の竪穴住居跡，土坑が見つかっている。また，ＳＫ５は土器棺墓の可能性がある。竪穴住居は径7.0～8.7mの大型の円形住居跡が中心になっている。土器はこの地域産の土器のほかに吉備や山陰の影響を受けたとみられる土器も出土している。

３）古墳時代前期　Ｄ地区で方形の竪穴住居跡を１軒確認している。

４）古墳時代後期　Ｂ地区で６世紀頃の方形竪穴住居跡を２軒確認した。ＳＢ７も同時期の可能性がある。竪穴住居は方形であるが，竈等は付設されていない。

５）古代・中世　古代の遺構としては，Ｄ地区で江国川方向に流れる溝ＳＤ１を確認した。また，Ａ地区で土坑，柱穴を確認しており，ＳＤ１より南側，Ｔ５－Ｐ１１付近に掘立柱建物が存在した可能性が高い。古代には山陽道が御調川沿いに通っていたと推定でき，山裾にあたる曽川１号遺跡周辺も候補地であるが，現在までのところ道路遺構は確認していない。中世，特に16世紀頃には，掘立柱建物や土坑などが多数存在する。Ａ地区とＤ地区の２箇所に集中している。南接する牛の皮城跡の活動時期と重なり，何らかの関連があったと考えられる。

６）集落の変遷　今回の発掘調査区は江国川沿いにあり，曽川１号遺跡全体のなかでは南西部に位置し，一番高い場所に位置する。主な遺構は，弥生時代後期の竪穴住居跡・土坑・墓？・柱穴，古墳時代前期の竪穴住居跡，古墳時代後期の竪穴住居跡・土坑・柱穴，古代の東西溝・土坑・柱穴，中世の掘立柱建物・柱穴群・土坑などを確認した。今後も調査が継続されており，これまで調査した資料を含めて整理検討し，御調川流域を中心とした周辺の遺跡との関連も研究して，集落としての曽川１号遺跡の全体像を明らかにしていきたい。

3　曽川１号遺跡の住居形態

曽川１号遺跡では竪穴住居７軒が検出されており，その時期は弥生時代後期後半から古墳時代に及ぶ。その中で特徴的な住居について少し検討を加えたい。この遺跡のＳＢ２-ｂ・ＳＢ３及びＳＢ４では中央部に不整形あるいは楕円形の土坑を挟んで２個の柱穴がある。いわゆる松菊里式住居と呼ばれるものに類似する住居構造である。この松菊里式住居は韓国西南の忠清南道松菊里遺跡に由来するが，青銅器時代にあたる無文土器時代の円形竪穴住居は，住居中央にある楕円形土坑を挟む形の２本の主柱を特徴としている。この類似形態の住居はわが国でも北部九州を中心とした西日本一帯の弥生時代前期から中期にかけての遺跡で確認されている。東日本にも拡散しており，愛知県朝日遺跡[(1)]でも中期前半頃の住居２軒が検出されている。かつて広島県では，福山市手坊谷遺跡・池ノ内遺跡・長波遺跡・深安郡神辺町御領遺跡などの例から，福山，神辺平野を中心に備後地方の弥生時代中期・後期前半に限定的にみられると考えられていた[(2)]。

ところが，曽川１号遺跡のＳＢ２-ｂ・３・４は時期が弥生時代後期後半以降で，この住居型式が後期以降も存続していることが判明しつつある。このような類例は最近増加しており，２本柱の住居は弥生時代後期から古墳時代にかけての集落に伴う場合が多い[(3)]。

以上のように，中央に２本柱を持つ住居は２つのグループに分けることができるようである。本来の松菊里式住居に由来するのは弥生時代前期から中期にかけてのグループとすることができるが，後期以降のものは松菊里式住居に由来すると考えるより，類似形態ではあっても，系譜的にはつながらないものと想定される。

広島市安芸区上瀬野町塔之原遺跡[(4)]では弥生時代終末から古墳時代にかけての集落が調査されている。この遺跡では曽川１号遺跡とほぼ同時期の17軒の竪穴住居が検出されている。このうち中央に２本柱をもつ竪穴住居は８軒に及ぶ。しかも特徴的なことに小型のものが５軒を占める。こうした住居についてはその用途や機能などについて不明な点が多いとされるが，何らかの工房の可能性が指摘されている[(5)]。

もう一つの興味深い例を挙げてみよう。庄原市大成遺跡[(6)]は古墳時代中期の５世紀代中葉を中心とする遺跡であるが，ここでは竪穴住居８軒のほか段状遺構などの遺構が確認されているが，これらの住居のうち２軒が２本柱である。ＳＢ０１・ＳＢ３４がそれで，後者では製塩土器や鉄滓が出土している。この遺跡では特に段状遺構から鉄滓が多数出土しており，鍛冶関連の遺跡とされている。段状遺構は傾斜面上の等高線に平行して帯状に残存している遺構であるが，本来は傾斜面の前面に置き土等を施し，平坦面を形成していたのが，前面が流出して現状の段状遺構として残存していると考えられる。おそらく一般の住居構造ではなく，工房としての機能を最優先した住居形態といえる。とすれば，ことさら４本柱である必要はなく，小屋掛けに近い形態で十分であろう。つまり，中央の２本柱で梁を支え，それに垂木を掛ければ，一応の工房の機能は果たすであろう。初期の松菊里式住居の用途や機能は必ずしも明らかでないが，弥生時代後半期にも引き続き類似形態の住居が作られるのは，その簡単な構造にあるといえよう。そして，その住居に期待されたのは何らかの工房としての位置づけであろう。塔之原遺跡では未確認であるが，大

成遺跡の例では鉄器生産に関わる工房であったらしい。こうした例はすでに弥生時代中期にもみられる。三次市高平遺跡の２号住居は弥生時代中期中葉を前後する時期のものであるが，中央の２本柱の間にある土坑からは鉄滓が出土しており，鉄に関する何らかの工房跡と考えられる。[7]

曽川１号遺跡では，出土遺物の検討からは生産活動の実態は不明である。２本柱の住居は，その他の住居と床面積に大きな違いはないので，２本柱の住居が簡易な一般居住のための住居であったともいえるが，しかし，何らかの生産に伴う住居形態であったとみることもまた可能である。今後の調査面積の拡大によって確認できることに期待したい。

４　備後南部の弥生後期土器における曽川１号遺跡ＳＫ１出土土器の位置

土坑内に一括して投棄された状態で見つかったＳＫ１の土器群は，従来の備後南部の後期土器編年では後期後葉（Ｖ－３様式）に位置付けられる諸特徴をもっている。ここではＳＫ１出土土器を中心として，今回出土した後期土器の編年的な位置付けを行い，今後の周辺部での調査の進展に備える基礎資料としたい。

ＳＫ１出土土器は，一部に土坑の上・中層から出土したものもあるが主体は下層に一括して投棄された土器群で，時期的にほぼ同時期と考えられる。これらは壺，甕，鉢など主要器種の口縁部がほぼ直立し，口縁部外面の凹線文は，極めて不明瞭なものが２～３条程度めぐるか，あるいはすでに消失してナデのみとなっている。壺・甕の胴部は肩が張るものは少なく球形のものが多くなる。底部は壺，甕ともに小さくなり，底面にまでヘラミガキを施すものが多い。鉢の体部は屈曲して神谷川式（備後のＶ様式）特有の形態を保持しているが，口縁部外面や体部屈曲部上面の凹線文は壺，甕と同じく不明瞭である。高杯は，杯部が屈曲して大きく外方へ開くようになるが数は少ない。こうした諸特徴は，これまでの備後Ｖ－３様式[8]の特徴とほぼ合致し，後期後葉ごろのものとすることができる。ただし，備後Ｖ－３様式の一般的特徴とされている鉢や高杯の外面へのヘラケズリの導入はＳＫ１では認められない。これが認められるのは次の段階(庄内式(古段階）併行期）としたＳＢ２やＳＢ３出土土器からである。この点はＳＫ１の土器群が備後Ｖ－３様式のなかでも古い様相を示しているものとみられ，従来のＶ－３様式の古い一群として分離することが可能である。これについては後述する。

なお，ＳＫ１出土土器（備後Ｖ－３様式）に先行すると考えられる土器群にＳＢ１やＳＫ２の出土土器がある。これらは壺の胴部の肩がやや張りぎみになっている点や，甕や鉢の口縁部の発達（立ち上がり）と外面の凹線文の特徴などからみて，備後Ｖ－２様式の特徴と合致する。

一方，ＳＫ１に後続するいわゆる庄内式（古段階）併行期の土器として，ＳＢ２やＳＢ３，ＳＫ５の土器がある。これらの特徴は，①壺，甕ともに口縁部の凹線文が消失するとともに底部が極めて小さく不明瞭となる。②鉢は体部に屈曲をもつ神谷川式独特の形態のもの（第49図57など）に加えて，体部にアクセントをつけて開く形態のもの（第49図60など）や小型で椀形の形態のもの（第49図64など）が増えて，神谷川式独特の形が崩れてくる段階と考えられる。また，体部の外面をヘラケズリし，内面を丁寧に仕上げる鉢（第49図64・66・77など）が目立ってくる段

階である。③壺，甕などの器種で山陰系と総称される独特の形態をもつ複合口縁のもの（第49図55・67・73・75）が著しく増加し，これと備後在来のもの（第49図71）や両者が融合したらしいもの（第49図92）などがみられるようになる。④とくに甕では，備後在来のものが目立たなくなり，山陰系のもの（第49図55・73・75）と「く」の字口縁の甕（第49図69・76）が主体となっている。

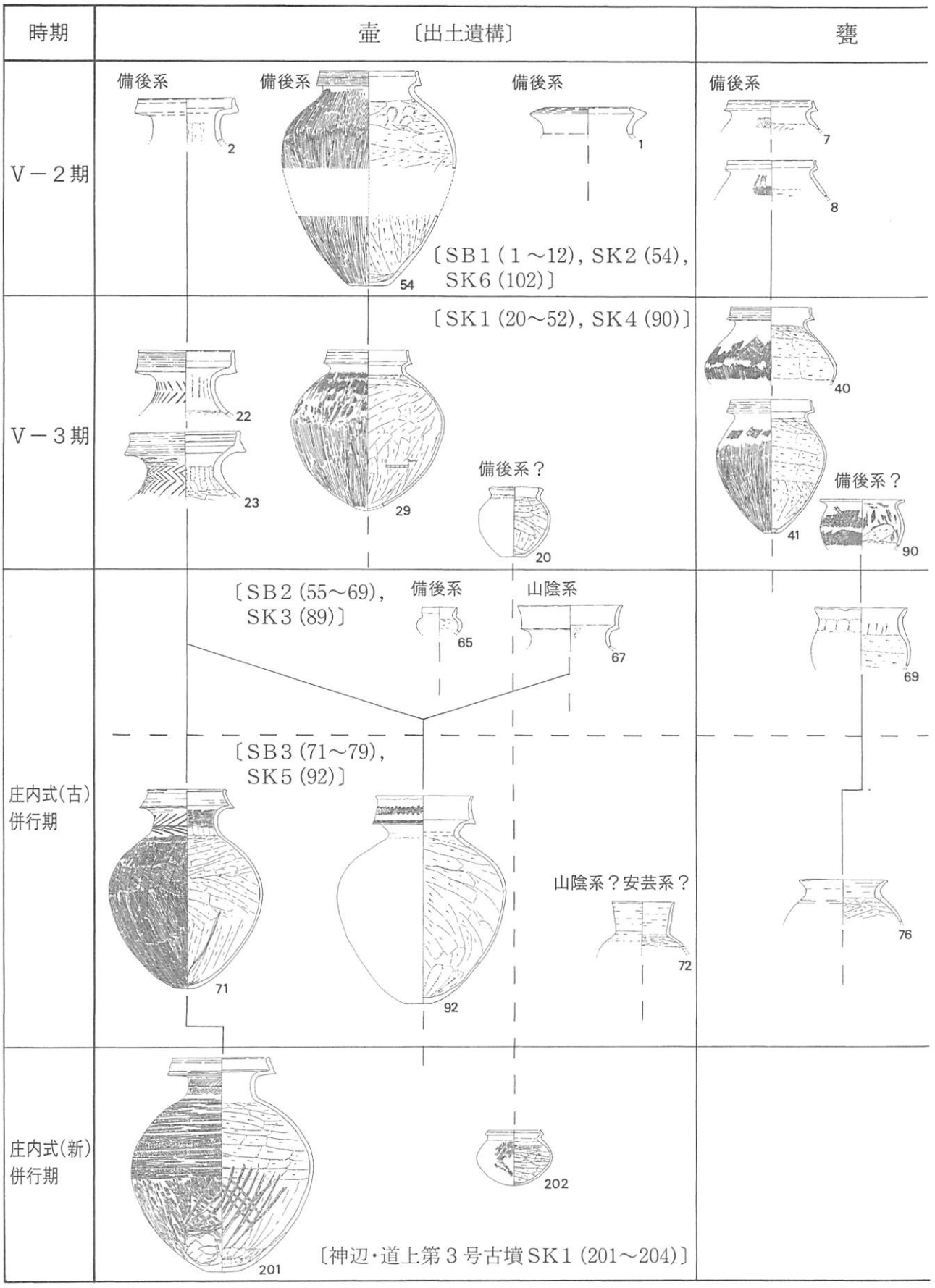
以上のように，庄内式（古段階）併行期とした時期の土器様相は山陰系土器を主体とした外来系の土器様式の流入によって，それまでの神谷川式の伝統を保持する在来の土器形態が大きく変質する時期ととらえられる。

ところで，曽川１号遺跡のある備後南部地域の弥生時代後期後葉から末葉（Ｖ－３様式）の時期は，従来から吉備系と総称される備中南部の土器や山陰，近畿地方の土器の搬入が目立ってくる時期と考えられている[9]。今回の発掘成果では，ＳＫ１（Ｖ－３様式）に後続すると考えられるＳＢ２（庄内式（古段階）併行期）などで山陰系の壺（第49図67）や甕（第49図55），鼓形器台（第49図89）などがまとまって流入してきていることが指摘できる。

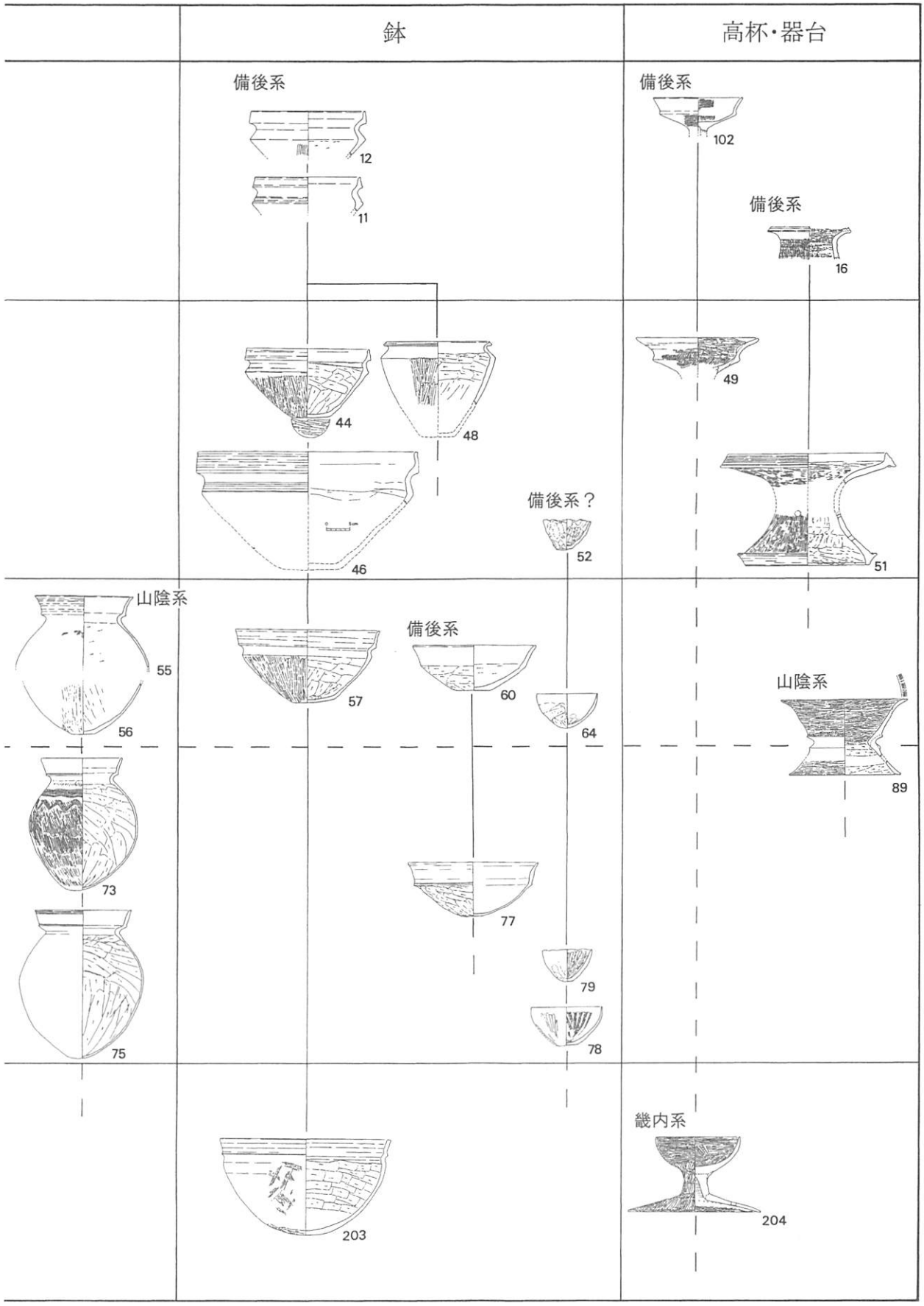
ＳＫ１の土器群は先述したようにＶ－３様式でも古い一群である可能性が高い。一方，ＳＫ１に後続すると考えられる土器群に山陰系の土器が目立ってくる。このようなことから，これまでＶ－３様式として一括されていた後期後葉から末葉の土器群は，備後の地域色を保持した古い一群（ＳＫ１出土土器・Ｖ－３様式）と山陰系土器などの影響を受けて変質した新しい一群（ＳＢ２やＳＢ３出土土器・庄内式（古）併行期）に分離できる可能性が高いことを指摘できる。

さらに，ＳＢ２やＳＢ３出土土器（庄内式（古段階）併行期）に後続する土器群は，曽川１号遺跡では良好な一括資料が得られていないが，同じ備後南部地域の深安郡神辺町（現・福山市）の道上第３号古墳墳裾の土器棺墓（ＳＫ１）から庄内式（新段階）併行期と考えられる良好な一括資料が報告されている[10]。ここでは備後の在来の壺（第49図201）や鉢（第49図203）とともに畿内系の椀形高杯[11]（第49図204）が出土しており，この時期以降，畿内系と総称される庄内式や布留式の土器が備後地方に流入し，在地の土器群に大きな影響を与えたものとみられる。

今回の曽川１号遺跡出土土器群を概括すると，出土した弥生土器は後期中葉以降の土器が主体で，なかでも後期後葉（Ｖ－３様式）から末葉（庄内式併行期）が最盛期のようである。その終末はいわゆる庄内式（古段階）併行期とよばれる後期末葉ごろである。とくにＳＫ１出土土器は，従来の備後南部・弥生土器編年の備後Ｖ－３様式のなかでも古相を示す土器群として抽出することができた。この土器群は，これまで後期後葉（Ｖ－３様式）から末葉（庄内式併行期）までを含んでいた従来の備後Ｖ－３様式を，より古いＶ－３様式（後期後葉）と新しい庄内式併行期（後期末葉）に分離する重要な手がかりを示すとともに，遺跡の最盛期の様相の一端を示す良好な一括資料として評価できる。



第49図 曽川1号遺跡出土土器編年図



(1:9, ただし46・71・92・201・203は1:12)

新旧編年対照表

曽川１号遺跡 （２００６年）	『弥生土器の様式と編年』 （１９９２年）
備後Ｖ－２様式	備後Ｖ－２様式
備後Ｖ－３様式	備後Ｖ－３様式
庄内式（古段階）併行期	
庄内式（新段階）併行期	

註

（１）愛知県教育委員会『朝日遺跡Ⅲ』 1982年。財団法人愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集　1991年
（２）石野博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館　1990年
（３）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植谷遺跡・根野見遺跡・植谷古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第199集　2002年，三良坂町教育委員会『杉谷遺跡』広島県三良坂町文化財調査報告書第６集　2003年
（４）財団法人広島県教育事業団『塔之原遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第14集　2006年
（５）広島県教育委員会「高平遺跡群」『広島県文化財調査報告』第９集　1971年
（６）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大成遺跡－庄原市三日市町所在遺跡の発掘調査－』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第82集　1989年
（７）註（５）に同じ。
（８）正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社　1992年
（９）註（８）に同じ。
（10）財団法人広島県教育事業団『道上第２・３・５号古墳　門前２号遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第６集　2004年
（11）財団法人大阪府文化財センター『古墳出現期の土師器と実年代－シンポジウム資料集－』 2003年

図版　1

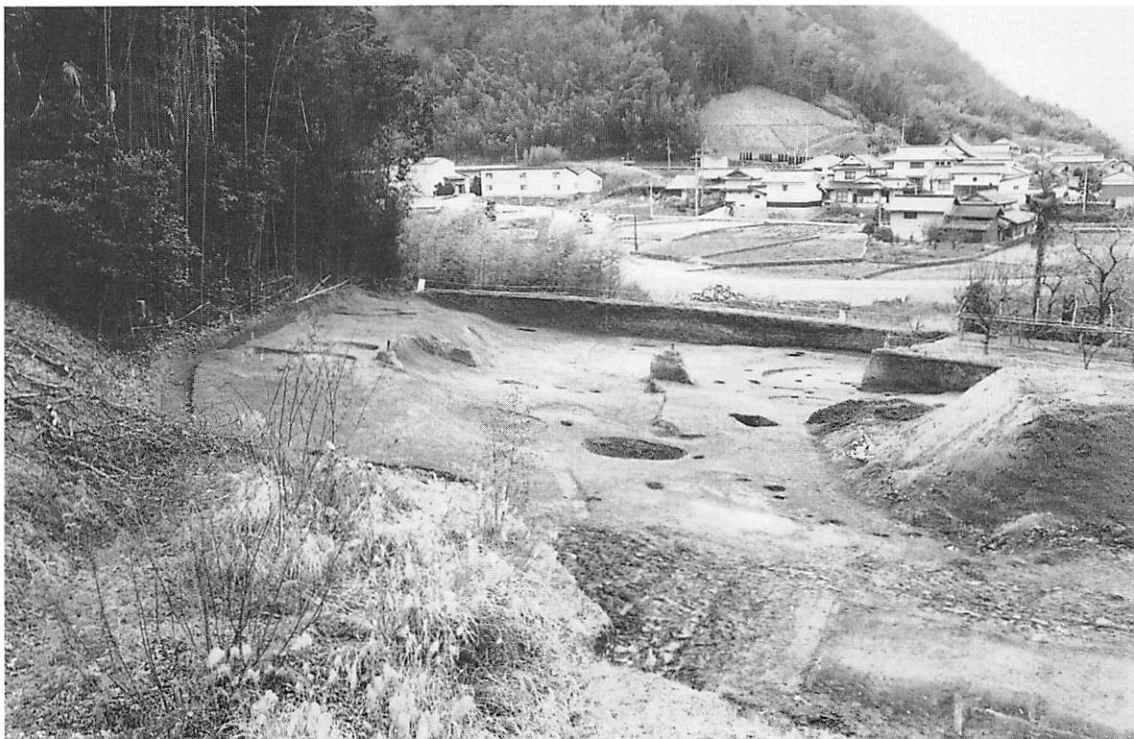
a　調査前遠景（東から）

b　A～D地区調査前近景
（西から）

c　A地区東西畦南壁断面，
調査風景

a　A地区北側調査後近景
（北西から）

b　A地区東側調査後近景
（北から）



c　A地区南側調査後近景
（北東から）

a　B地区調査後全景
（南東から）

b　C地区調査後全景
（北から）

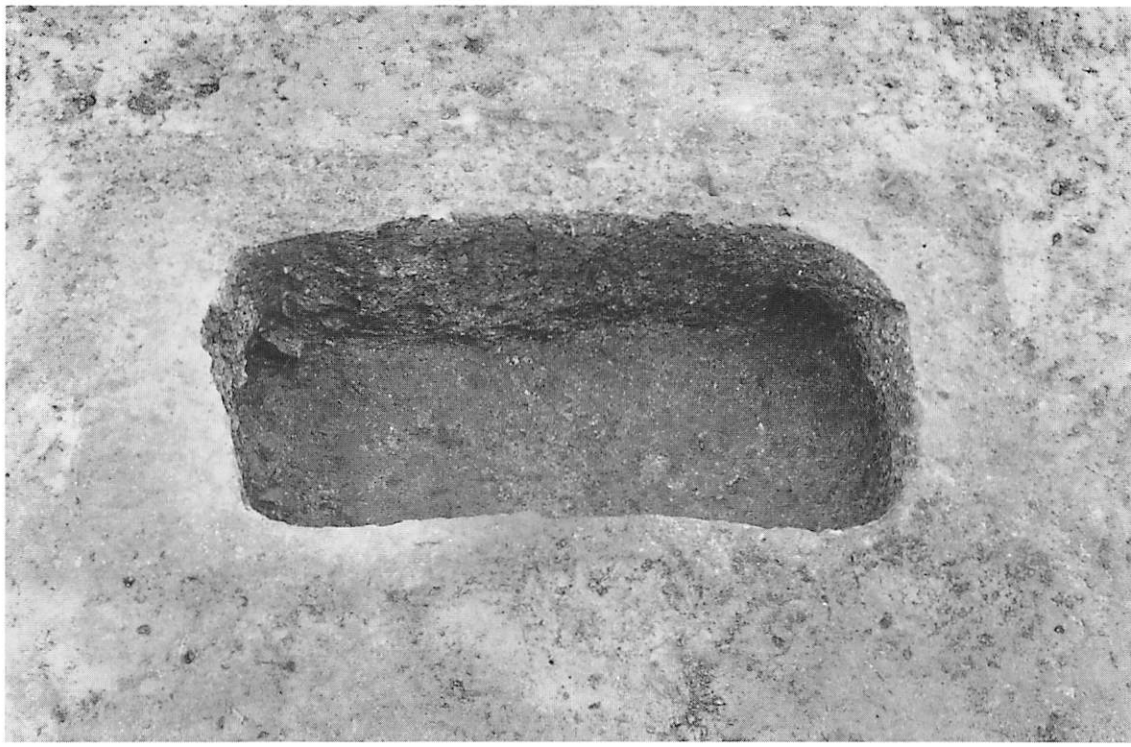
c　D地区調査後全景
（北から）

a　ＳＢ１完掘（東から）

b　ＳＢ１中央ピット完掘
（南から）

c　ＳＢ１石製品出土状況
（東から）

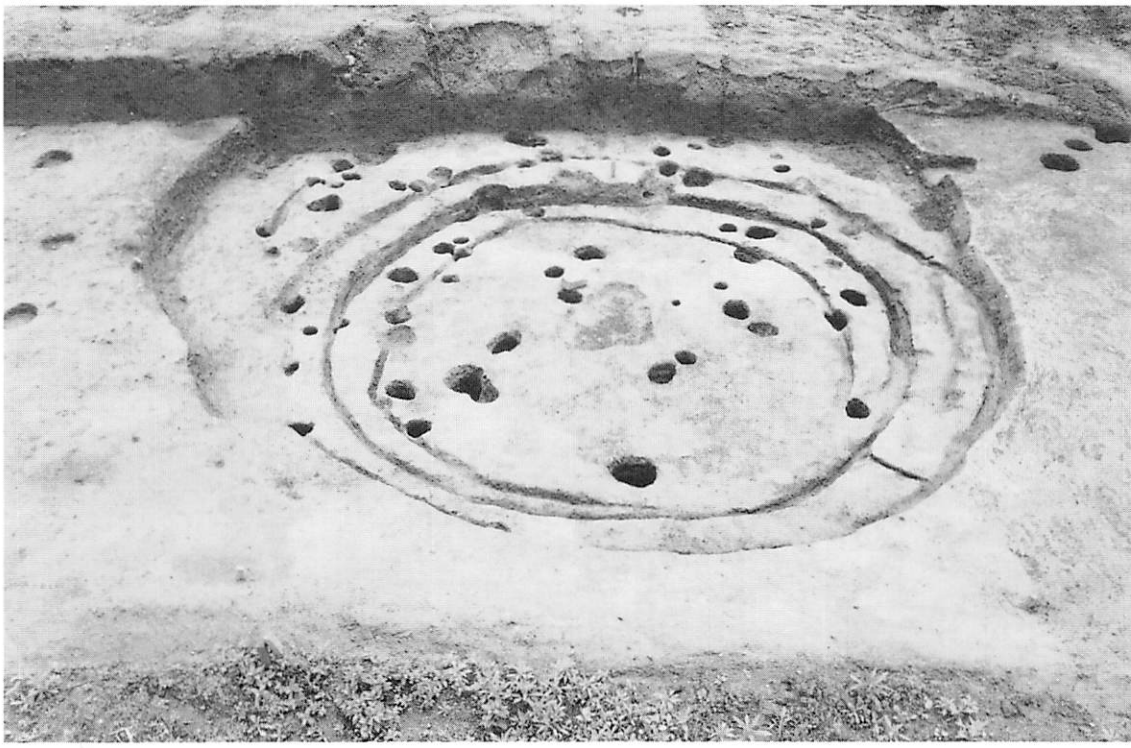
a　ＳＫ１遺物出土状況
（西から）



b　ＳＫ１完掘（西から）

c　ＳＫ２完掘（北西から）

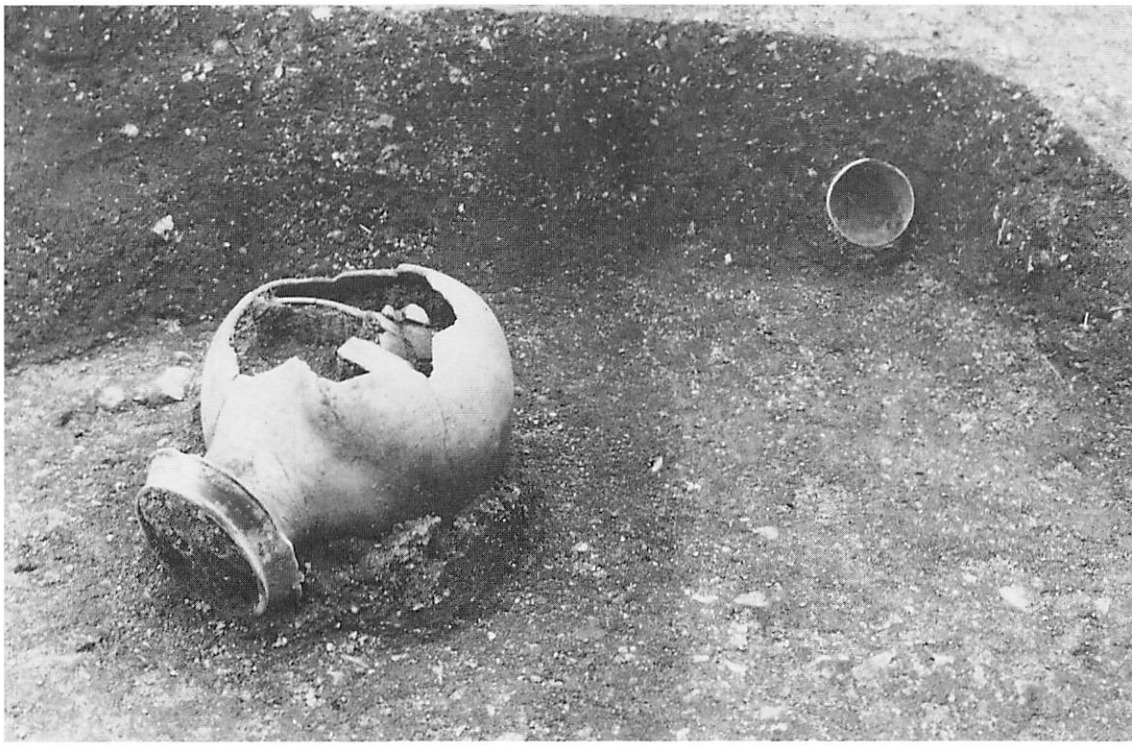
a　ＳＢ２土層断面
（南から）



b　ＳＢ２完掘（西から）

c　ＳＢ３土層断面
（西から）

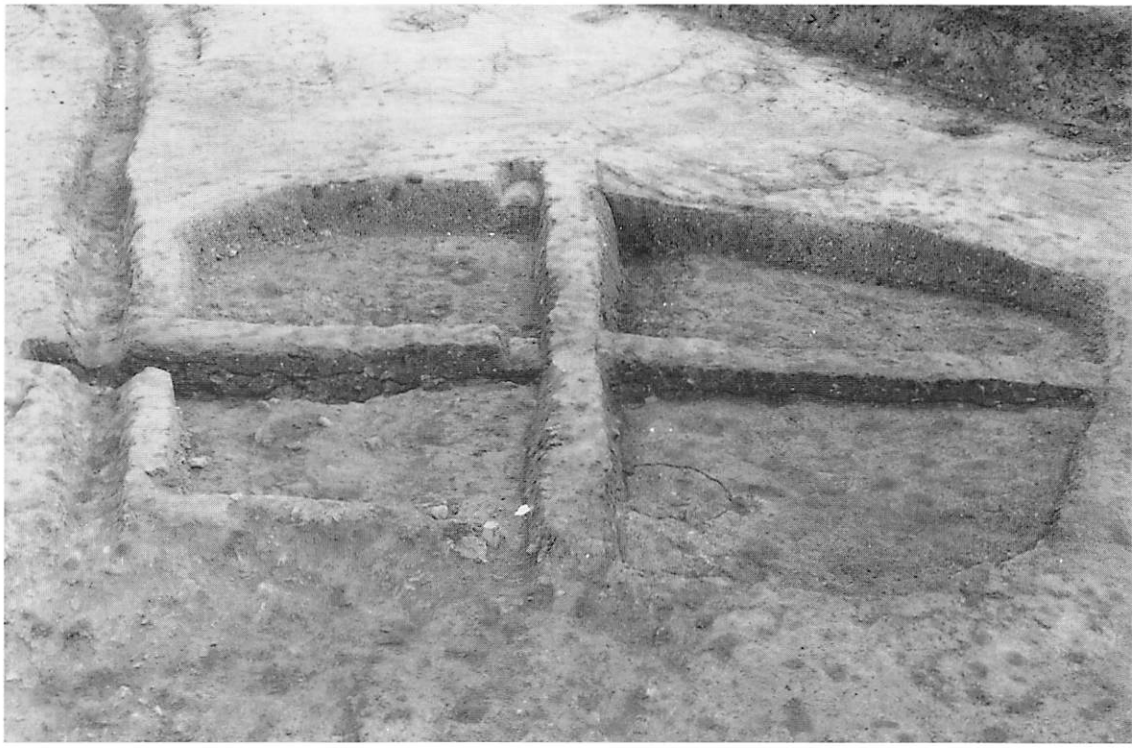
a　ＳＢ３北西部土器
出土状況（西から）



b　ＳＢ３南東部土器
出土状況（西から）

c　ＳＢ３南西部土器
出土状況（西から）

a　ＳＢ３完掘（南から）



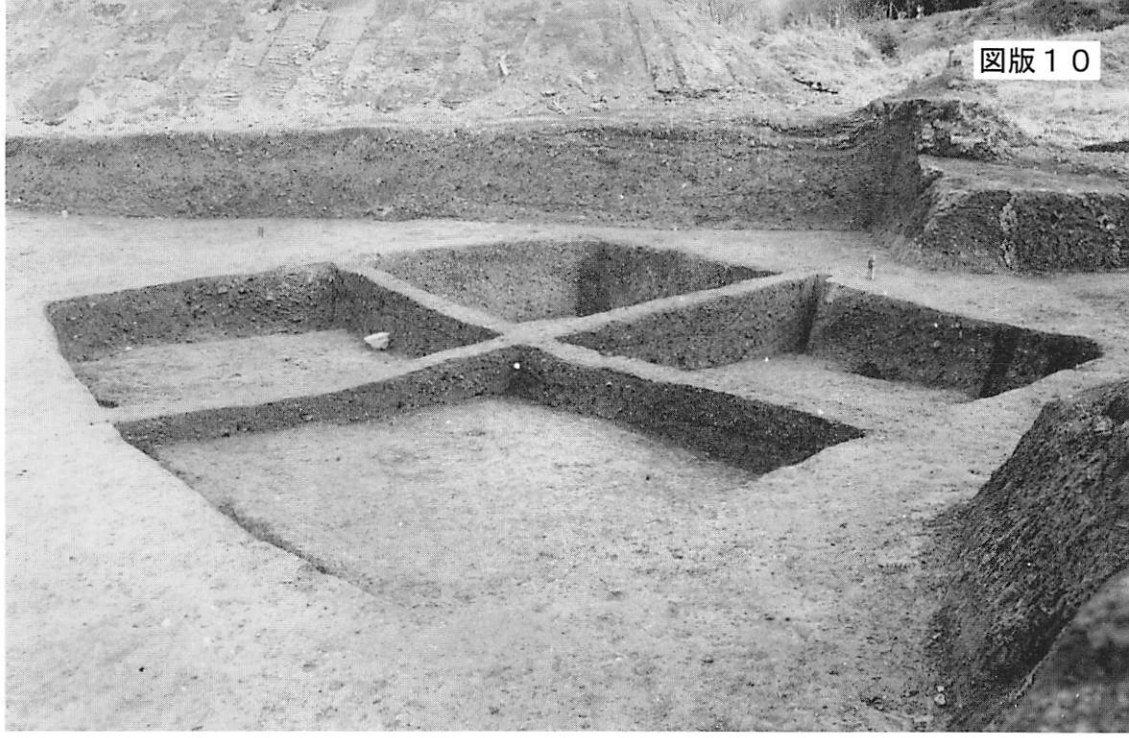
b　ＳＫ３土層断面
（西から）

c　ＳＫ３完掘（北西から）

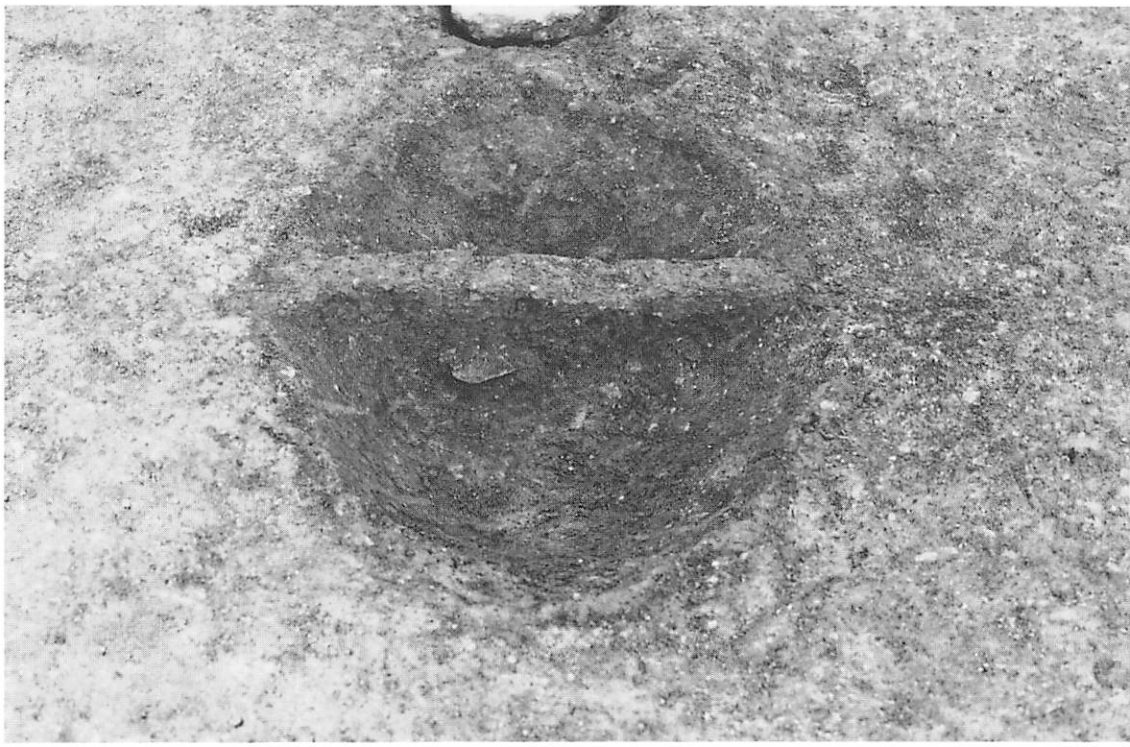
a　ＳＫ４土層断面
（北東から）

b　ＳＫ５遺物出土状況
（北から）

c　ＳＫ５完掘（南から）



a　ＳＢ４土層断面
（南西から）

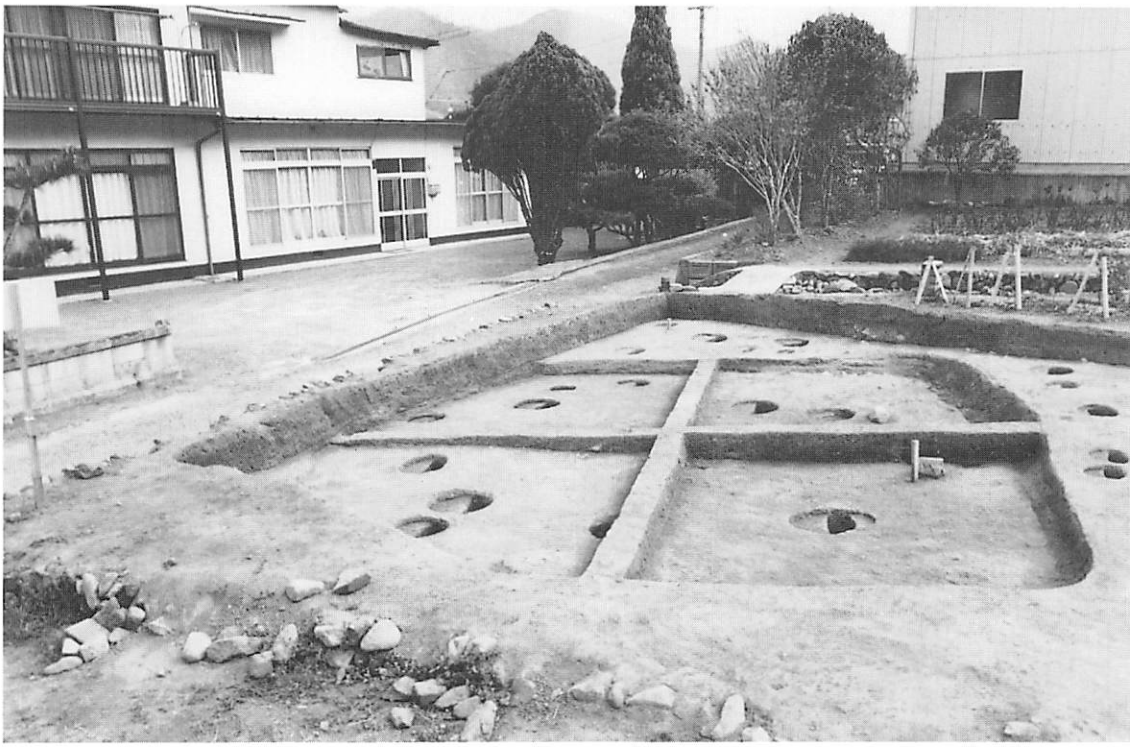


b　ＳＢ４中央ピット
（南から）

c　ＳＢ４住居内石
（西から）

図版１１

a　ＳＢ４完掘（南から）



b　ＳＢ５土層断面
（南西から）

c　ＳＢ５完掘（南東から）

a　ＳＢ６土層断面
（北から）

b　ＳＢ６完掘（東から）

c　ＳＢ７完掘（南西から）

a　ＳＤ１完掘（西から）

b　ＳＸ１須恵器出土状況
（東から）

c　ＳＸ１礫群検出状況
（東から）

a　ＳＸ１完掘（北東から）

b　ＳＢ８Ｐ３検出状況
（北西から）

c　ＳＢ８Ｐ４検出状況
（西から）

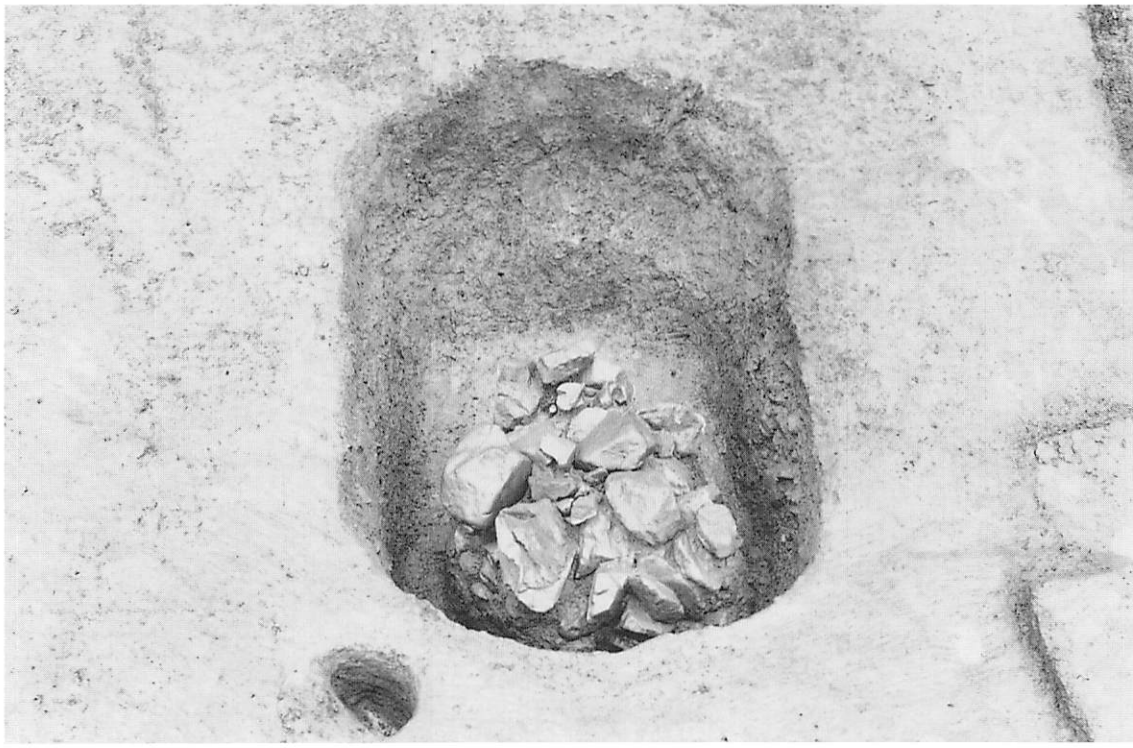
図版１５

a　ＳＫ７遺構検出状況
（北から）

b　ＳＢ９・１０遺構検出
状況（南西から）

c　ＳＫ１０遺構検出状況
（東から）

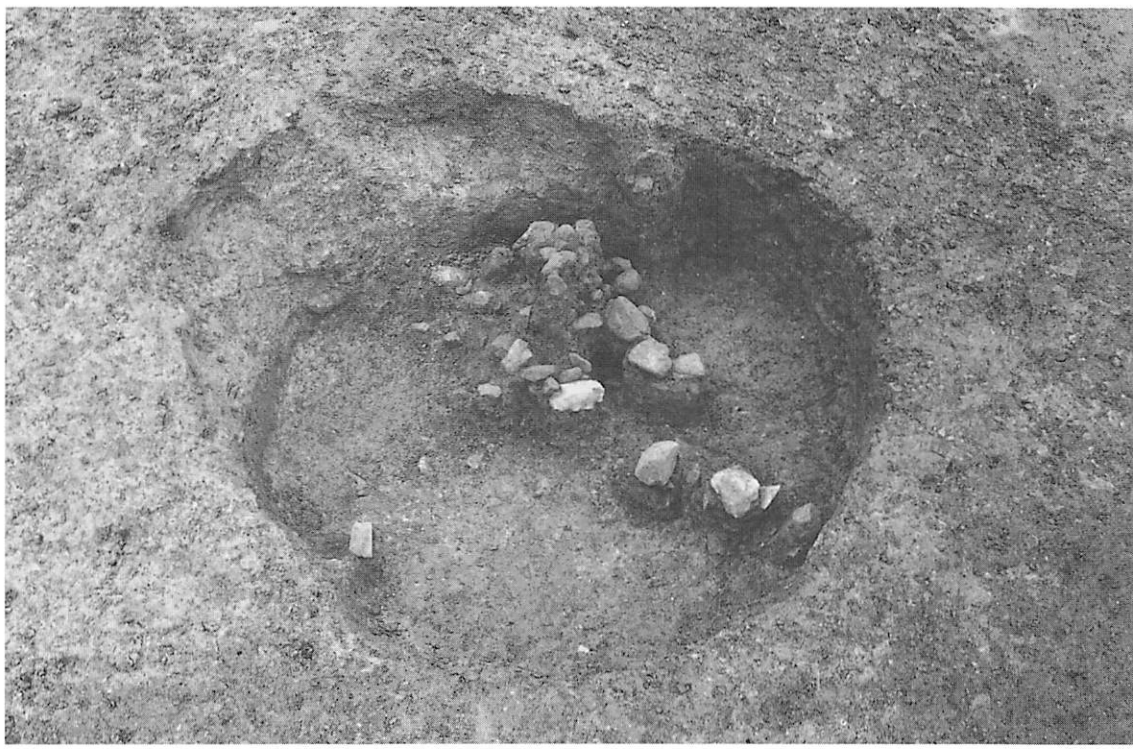
a　ＳＫ８土層断面
（南東から）



b　ＳＫ８遺構検出状況
（北西から）

c　ＳＫ８完掘（北西から）

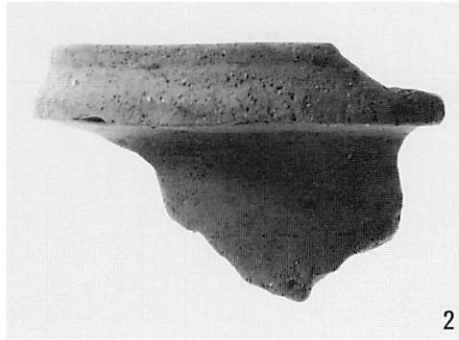
a　ＳＫ９土層断面
（南から）

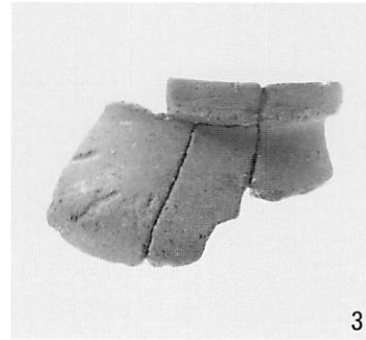


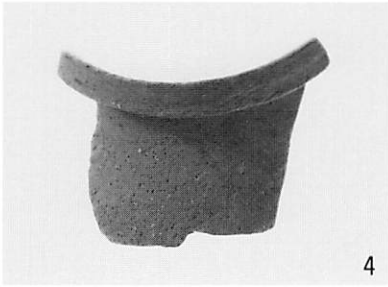
b　ＳＫ９遺構検出状況
（西から）

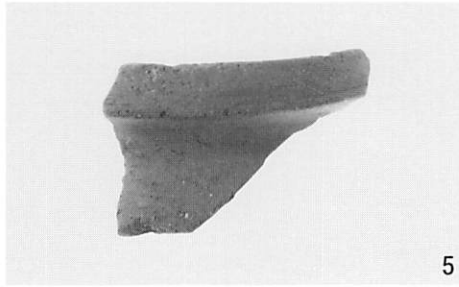
c　Ａ地区Ｔ５-Ｐ１１
土層断面（南西から）

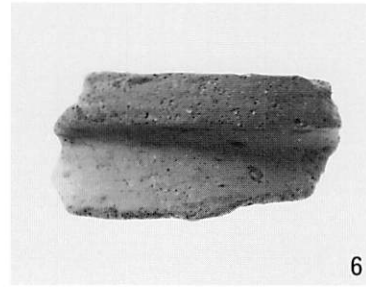
1

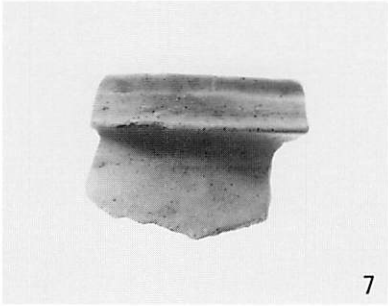

2

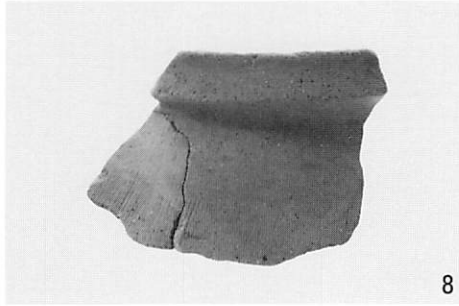

3

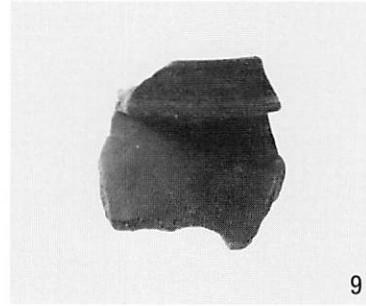

4

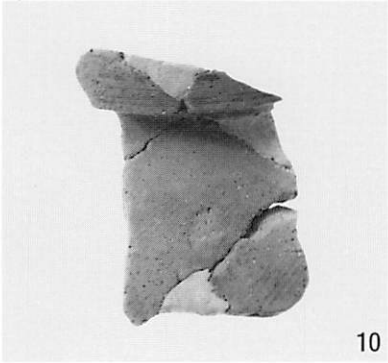

5

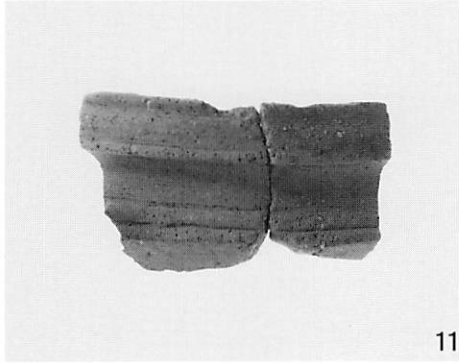

6

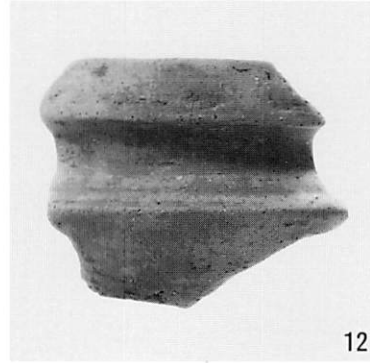

7

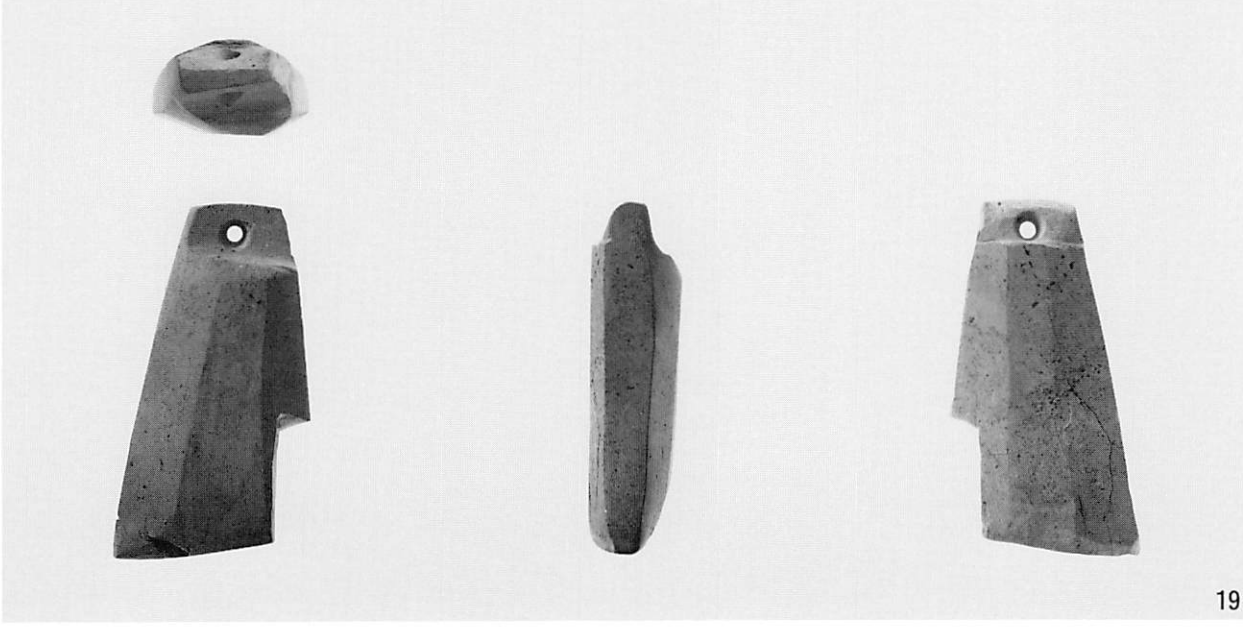

8


9


10


11


12


19

ＳＢ１出土遺物

20

21

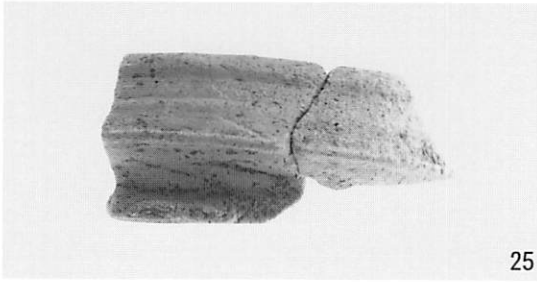
23

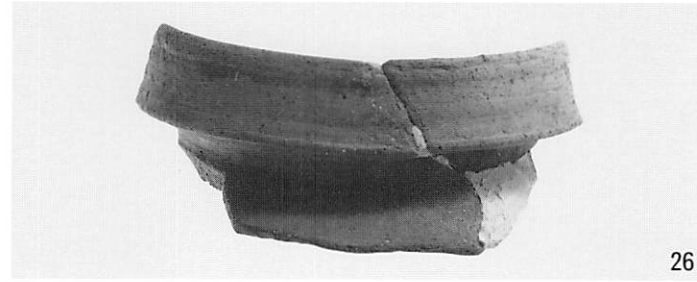
22

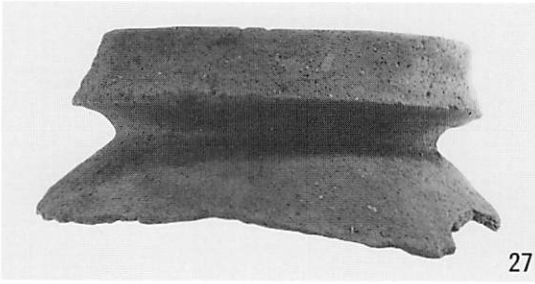
28

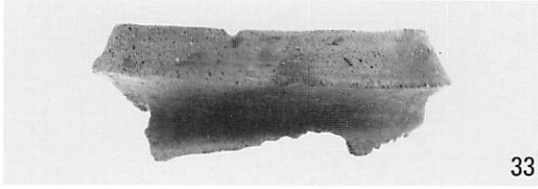
29

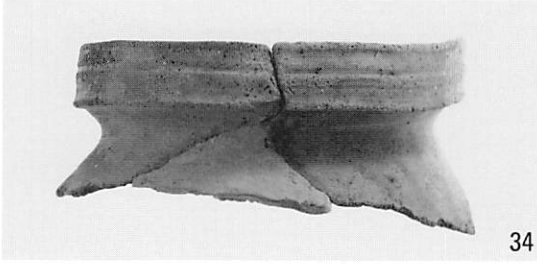
ＳＫ１出土遺物１

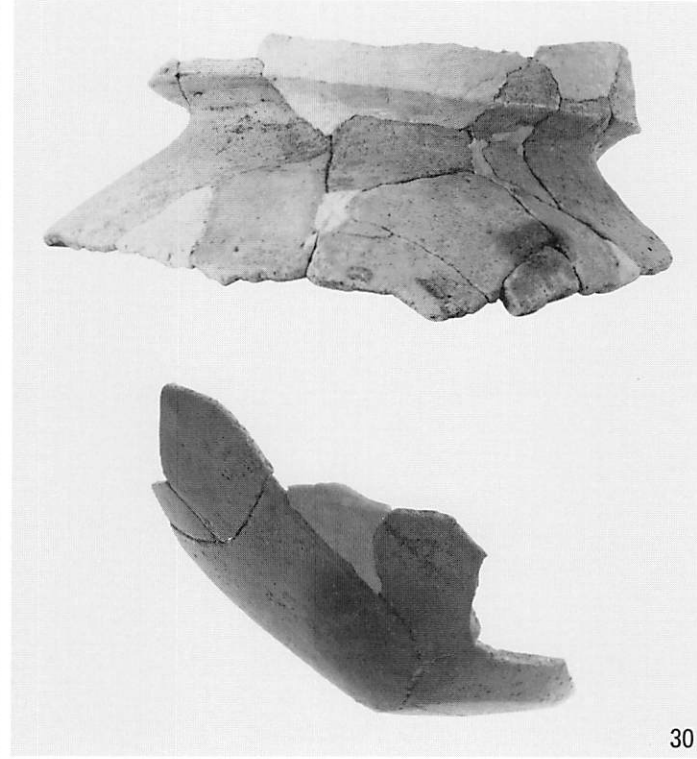


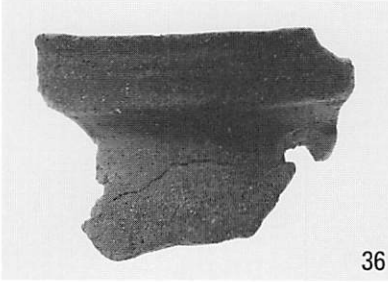


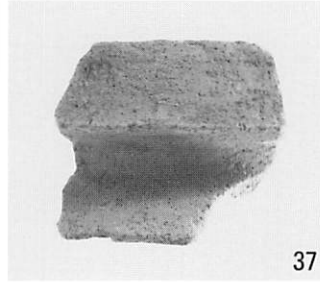


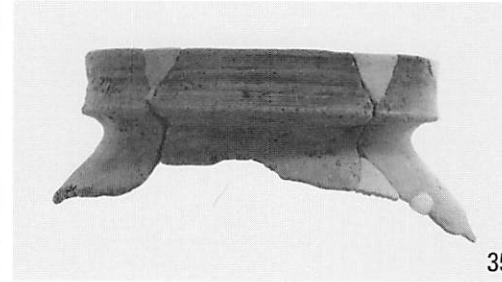


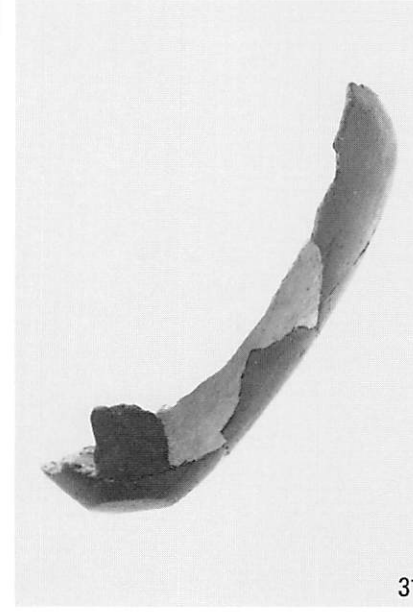




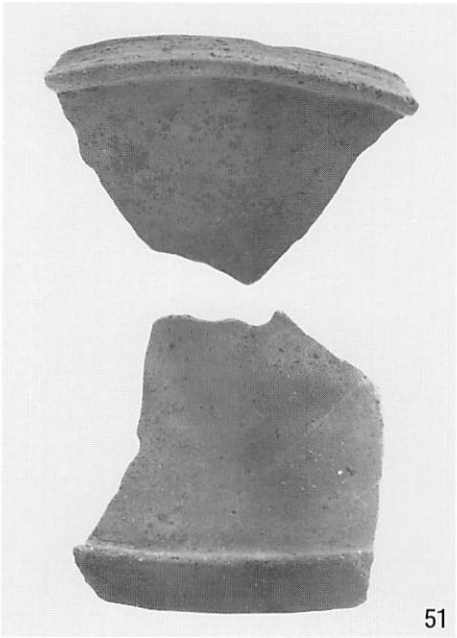


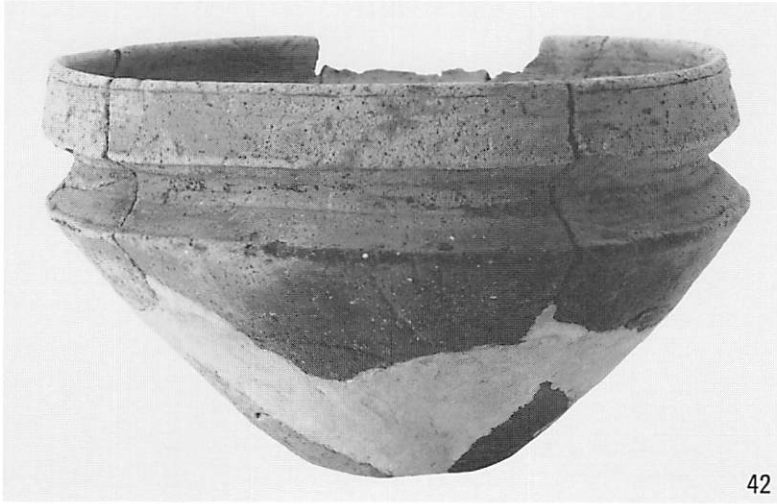


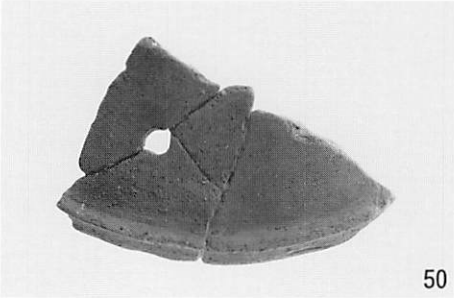


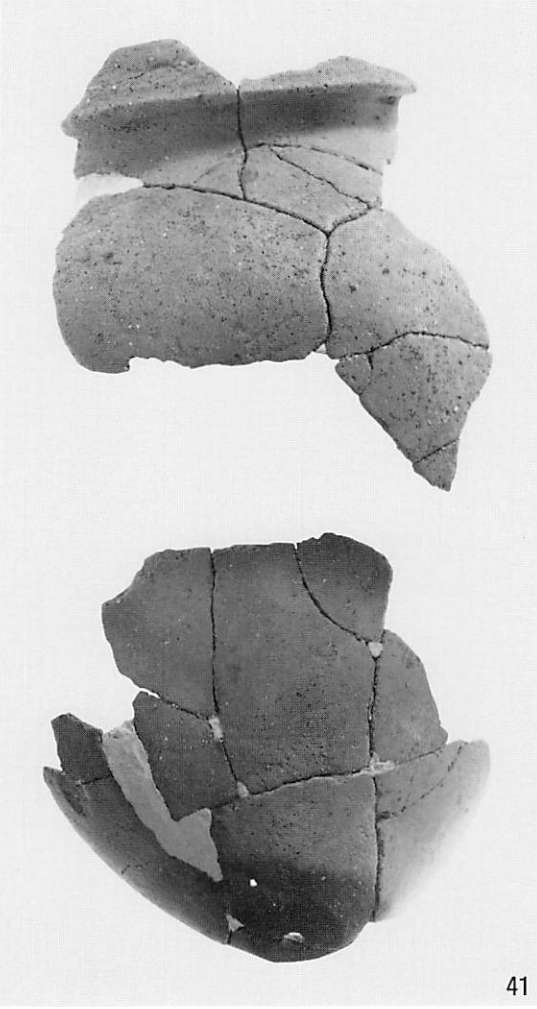


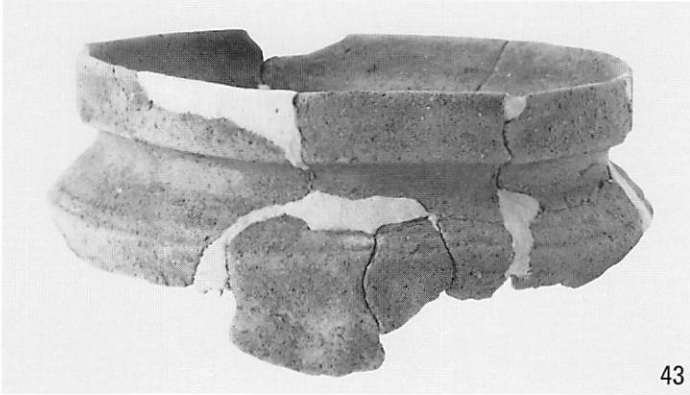
ＳＫ１出土遺物２

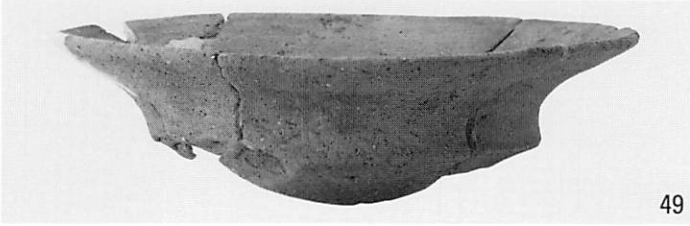


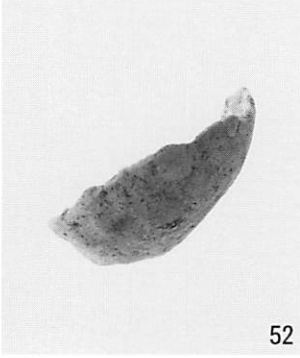






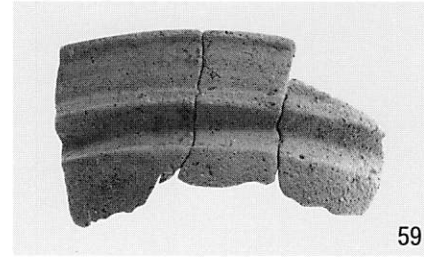


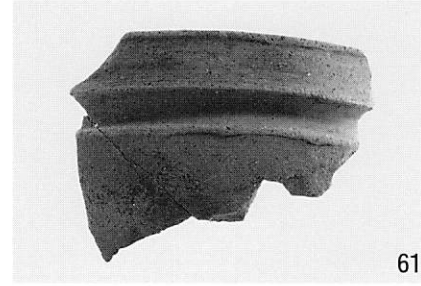


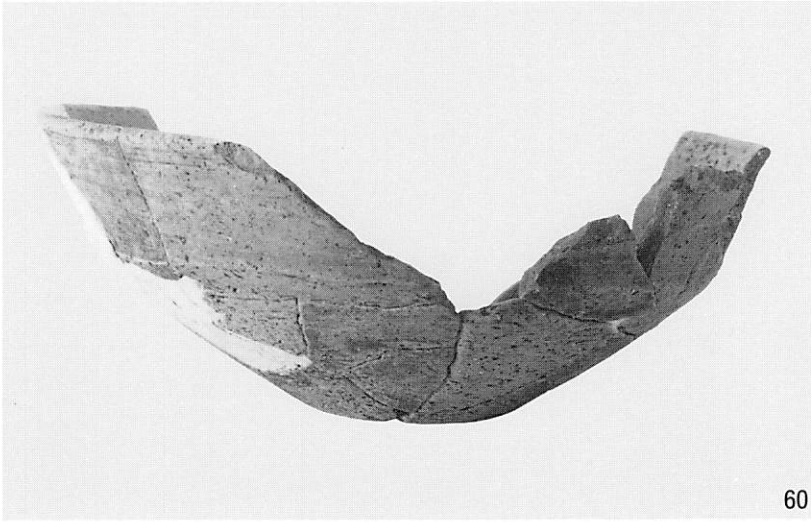


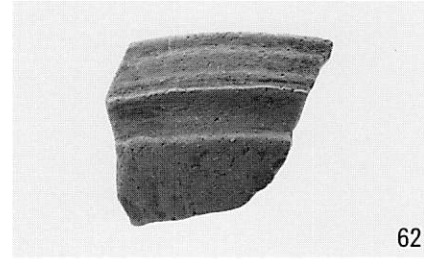
ＳＫ１出土遺物３

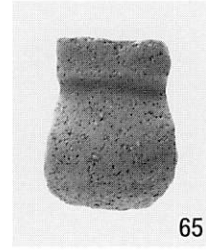
57

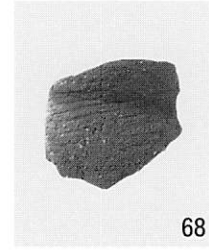

59

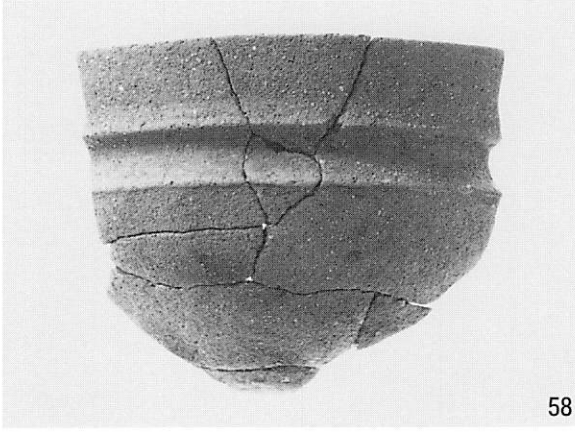

61


60

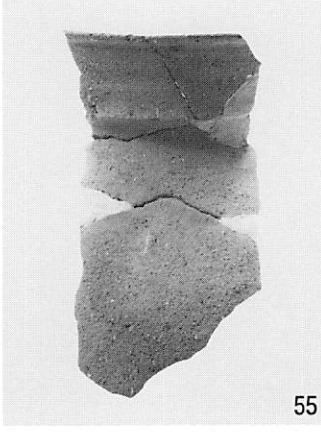

62

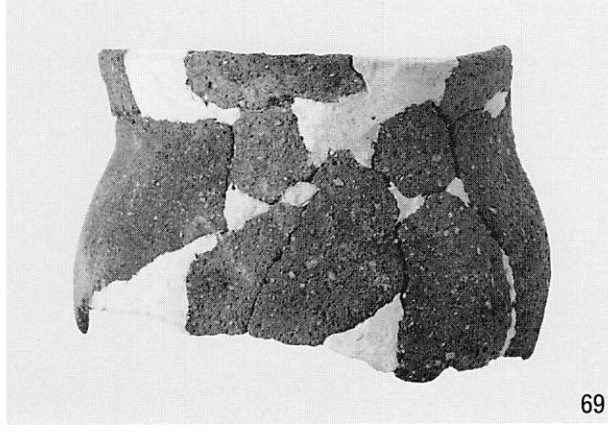

65

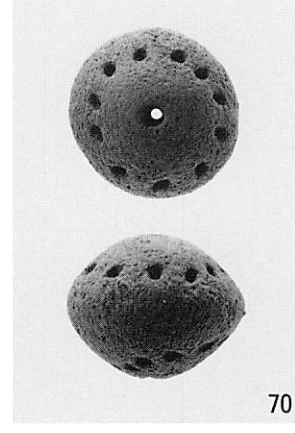

68


58

64


55

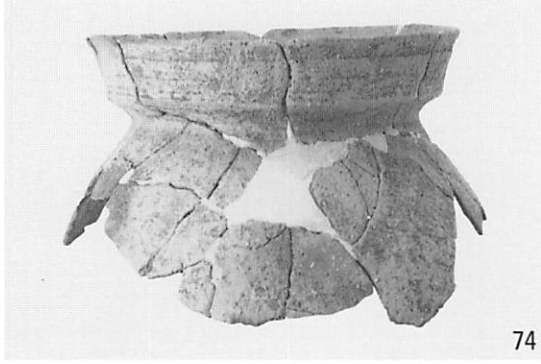

69

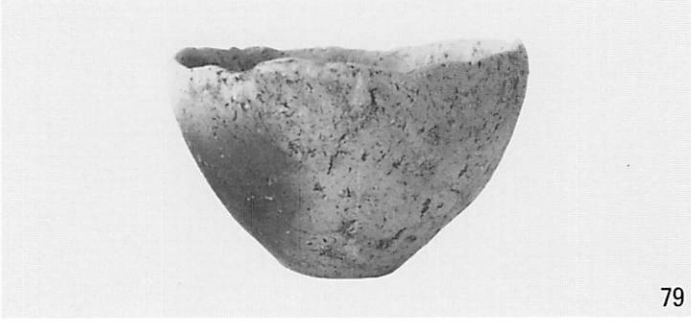

70

ＳＢ２出土遺物

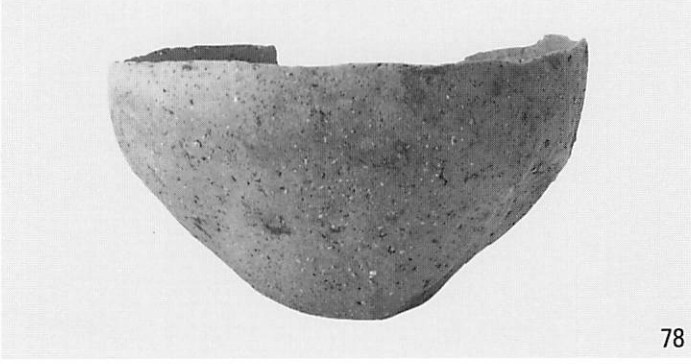
71

75

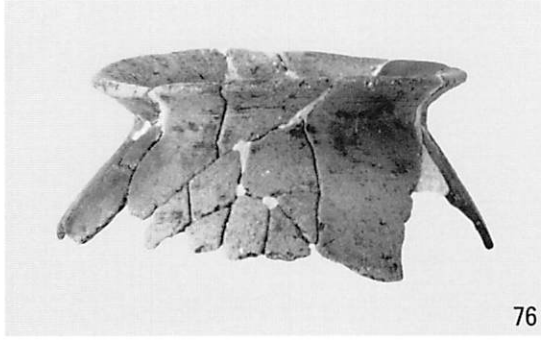

74


79

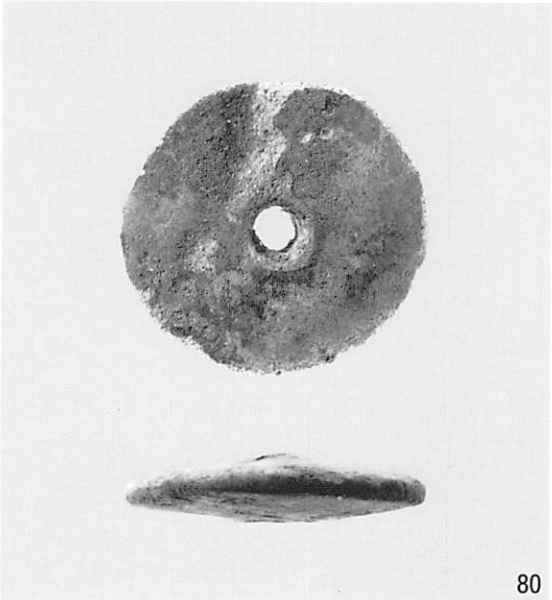
73

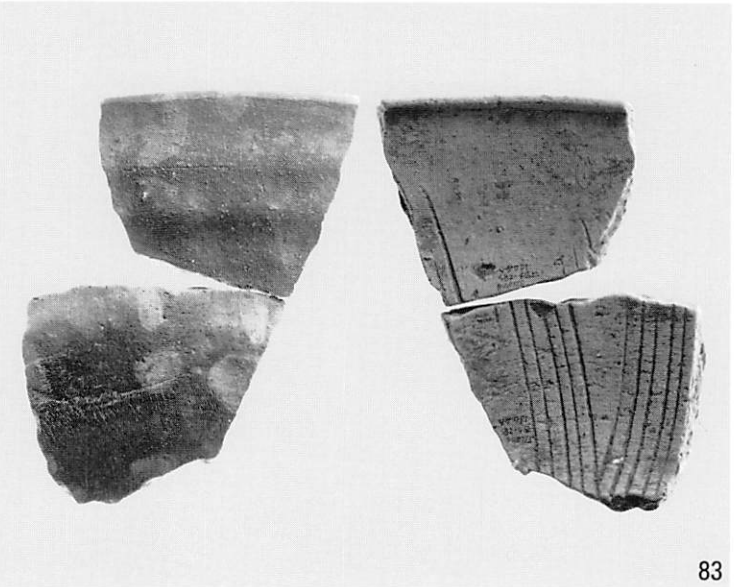

78

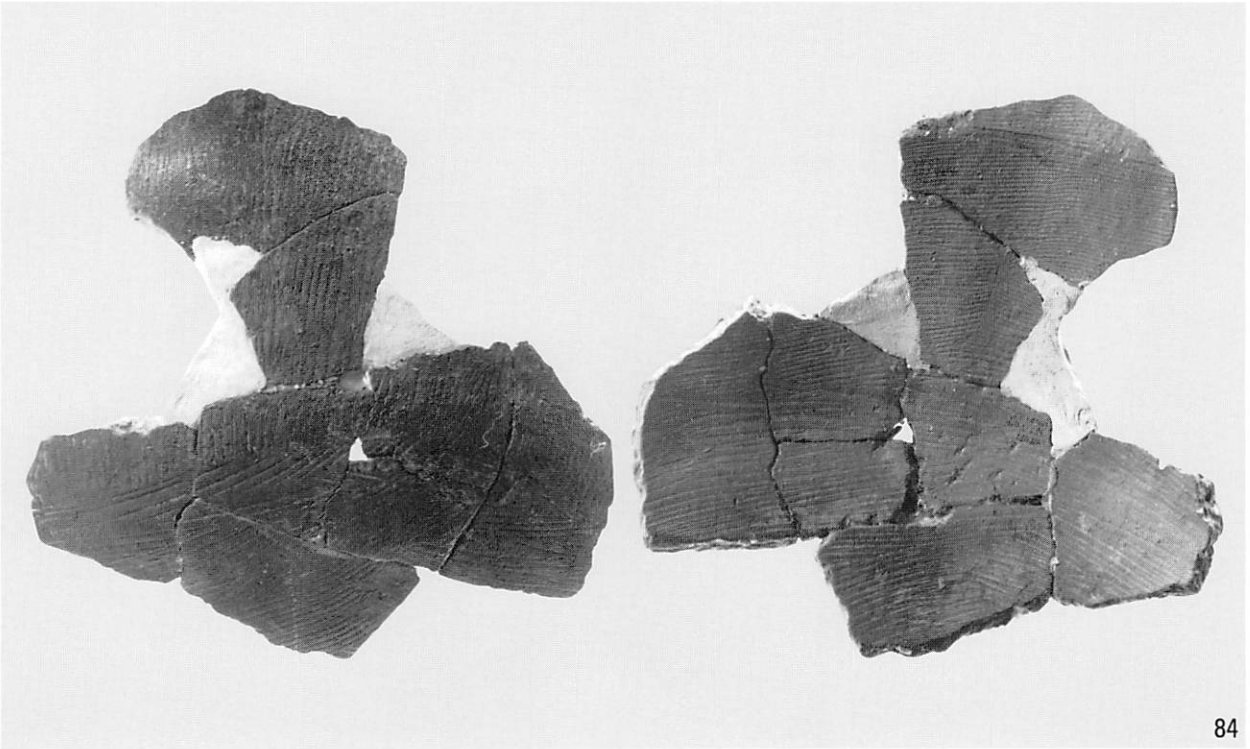
77


76

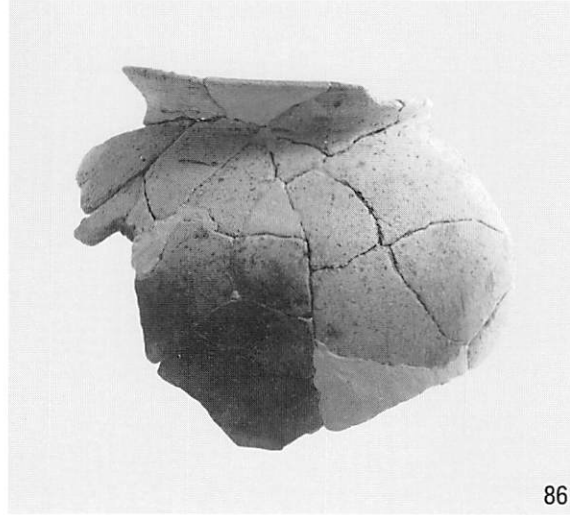
ＳＢ３出土遺物１

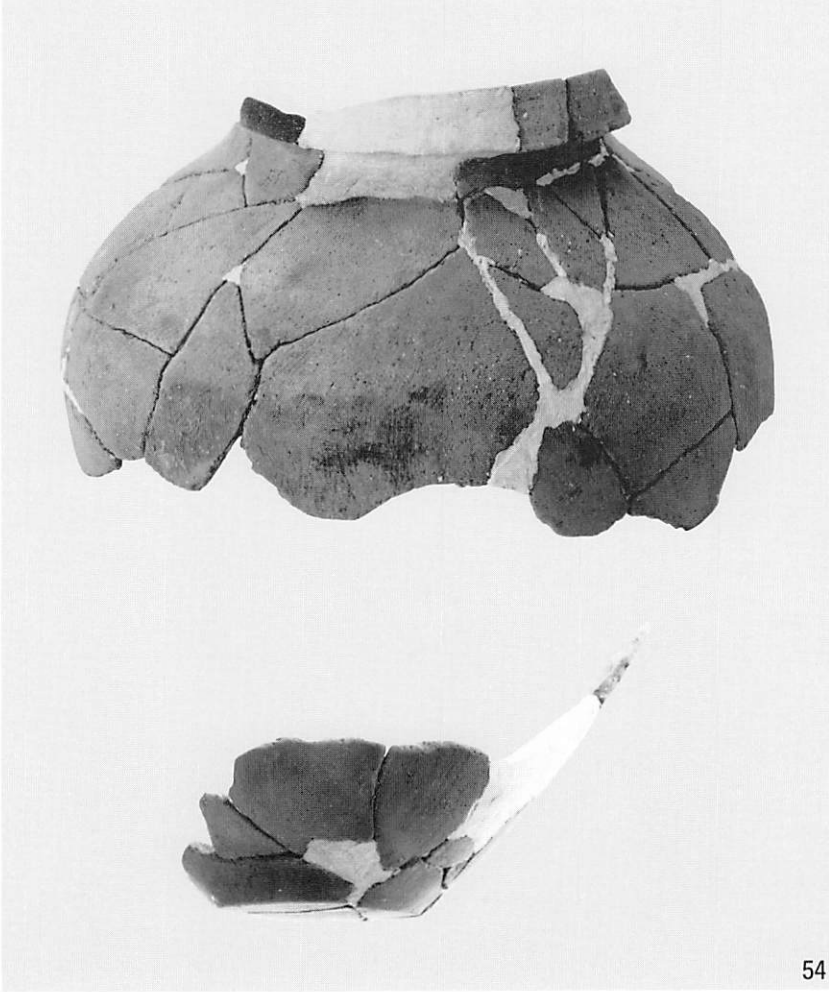


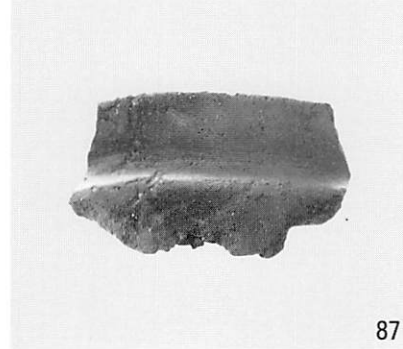


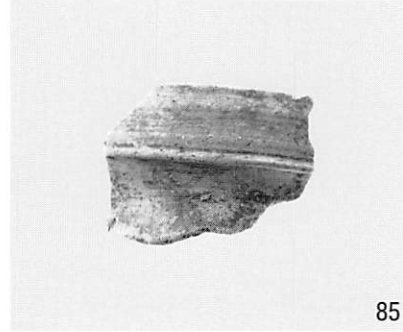


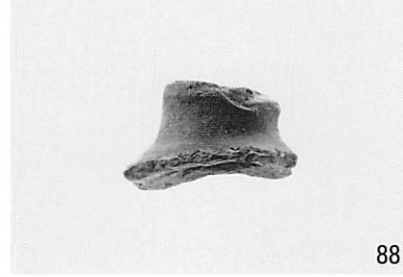
ＳＢ３出土遺物２



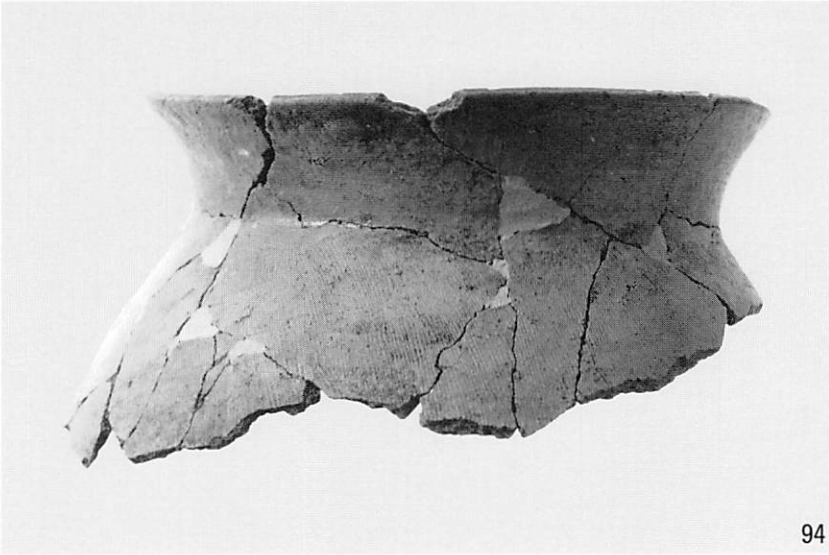


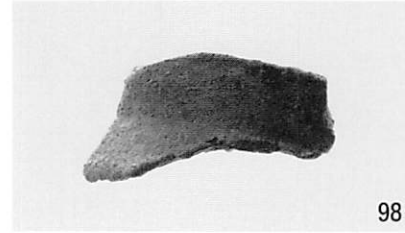


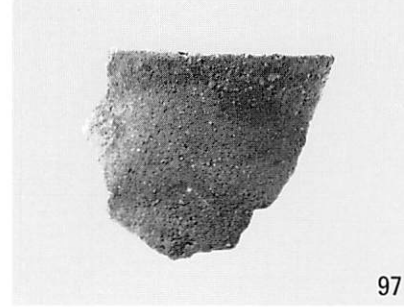


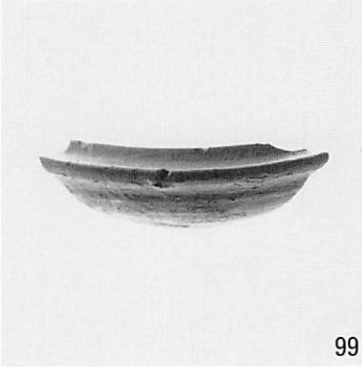


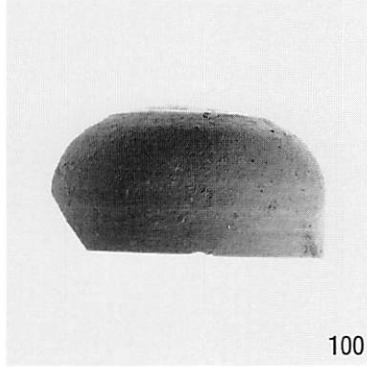
ＳＫ１・３・５出土遺物

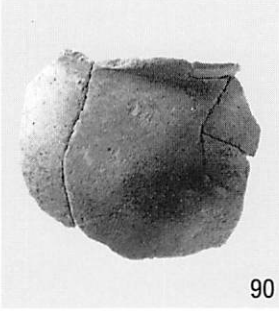


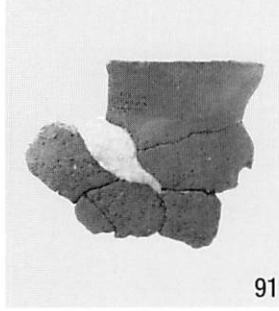


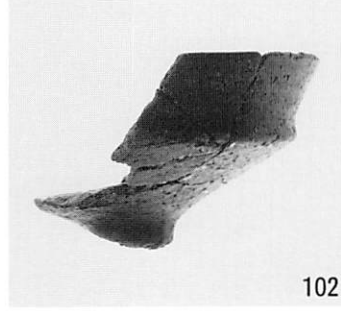


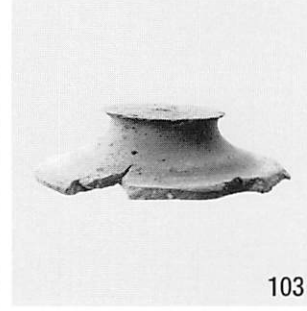


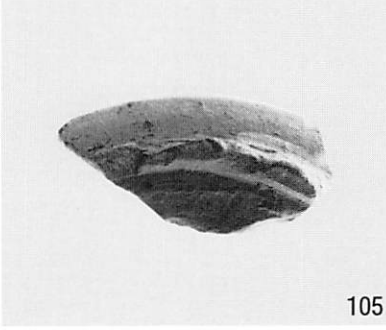


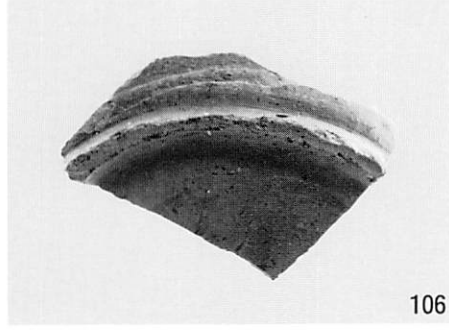


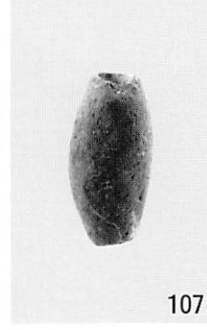


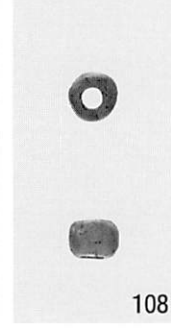


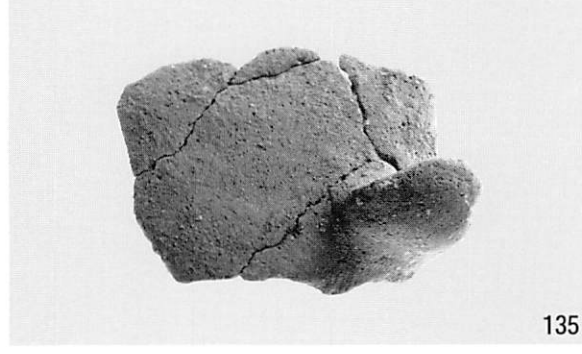






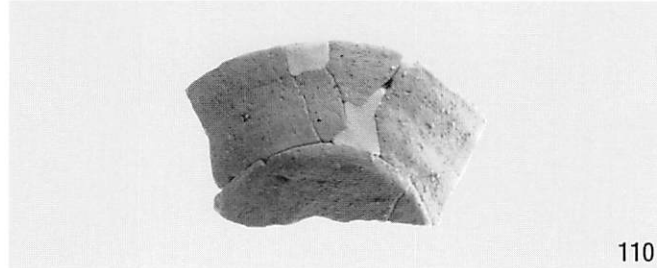


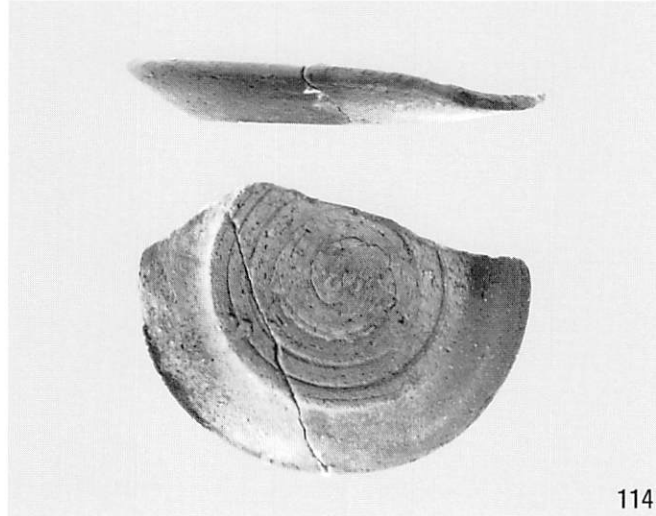


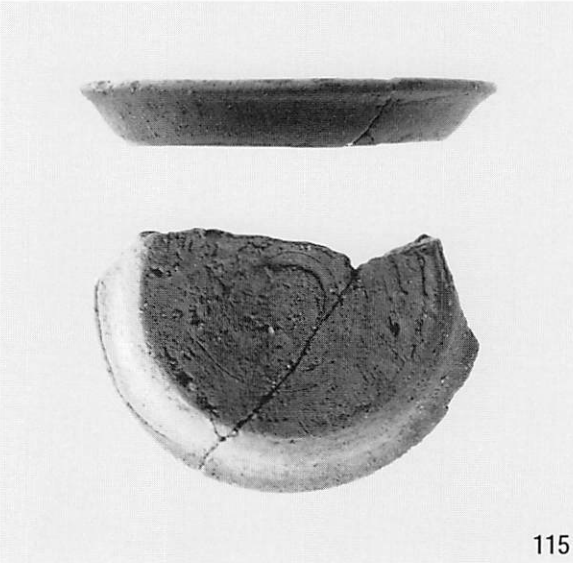


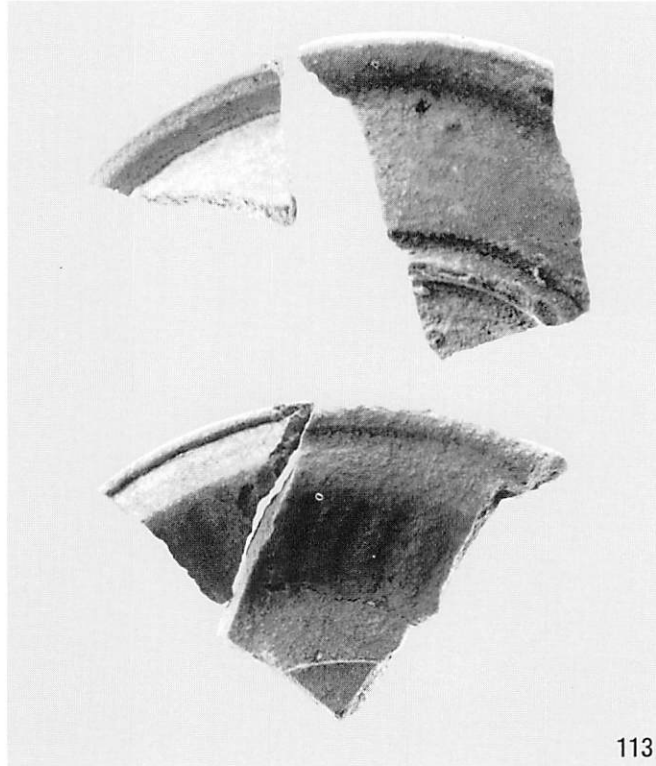
ＳＫ４・６，ＳＢ５，ＳＤ１，地区出土遺物

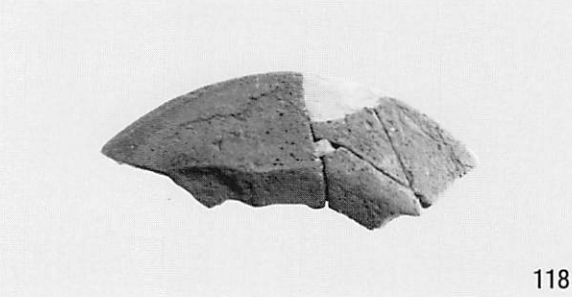
111

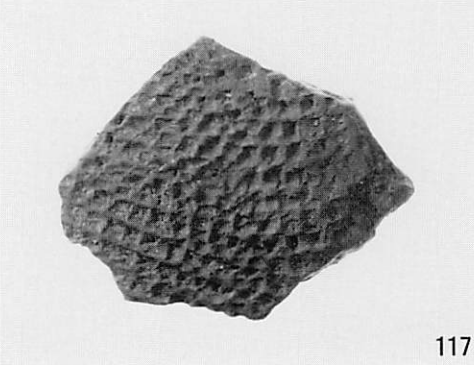

110

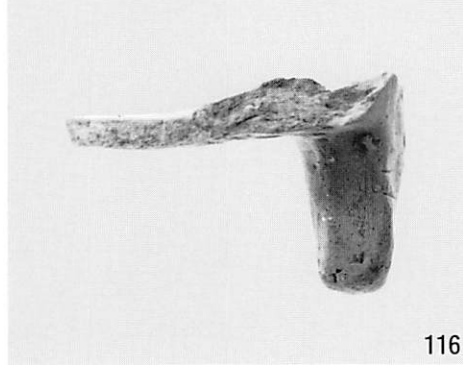

114

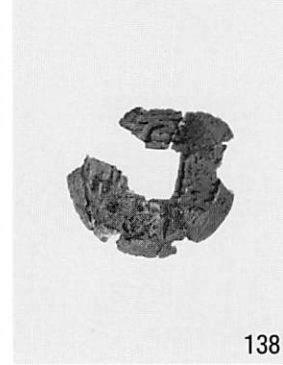

115


113


118

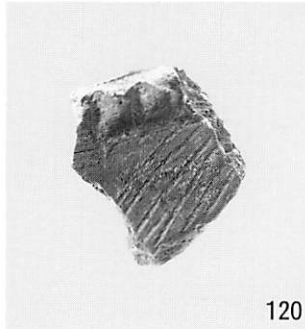

117

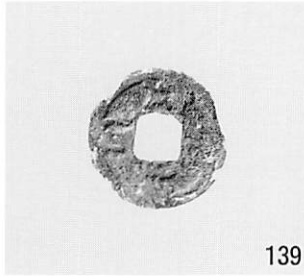

116


138

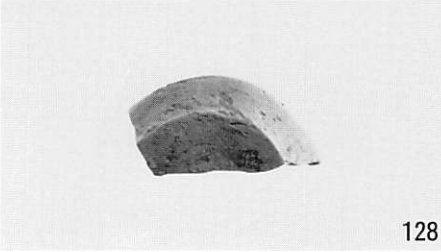
ＳＢ８・９，ＳＤ４，ＳＫ７出土遺物

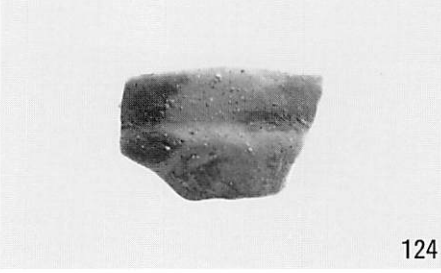
119


120

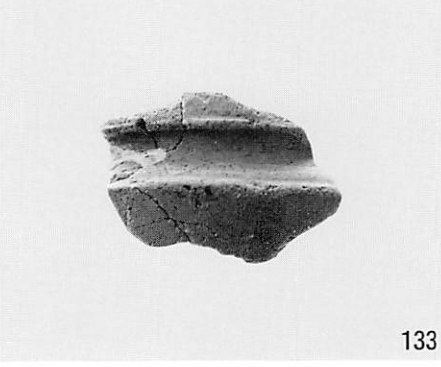

139

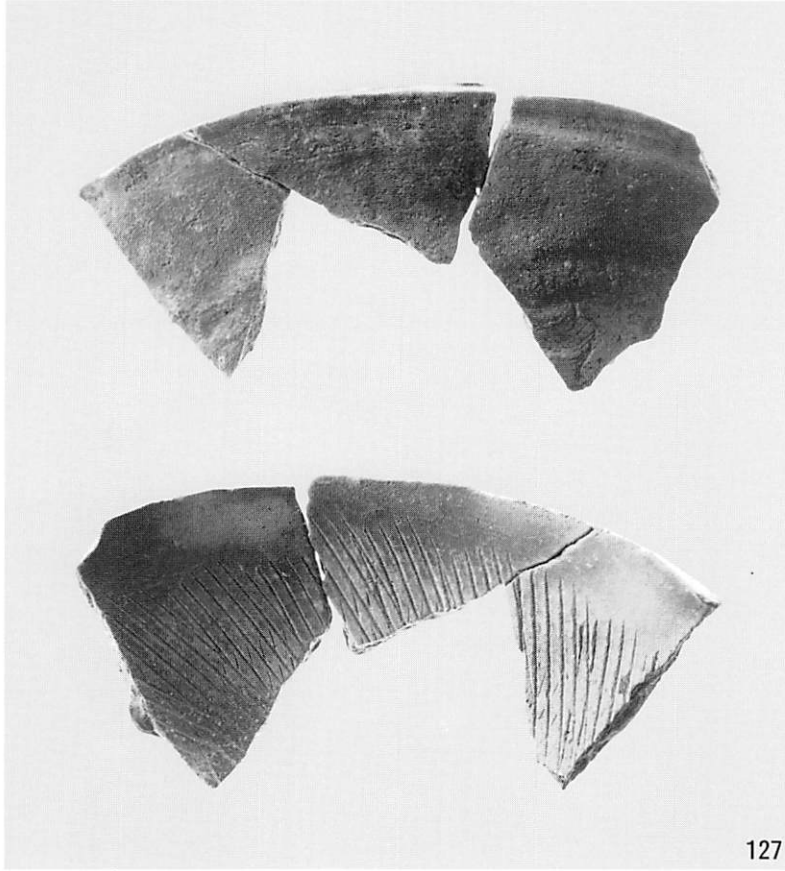
125

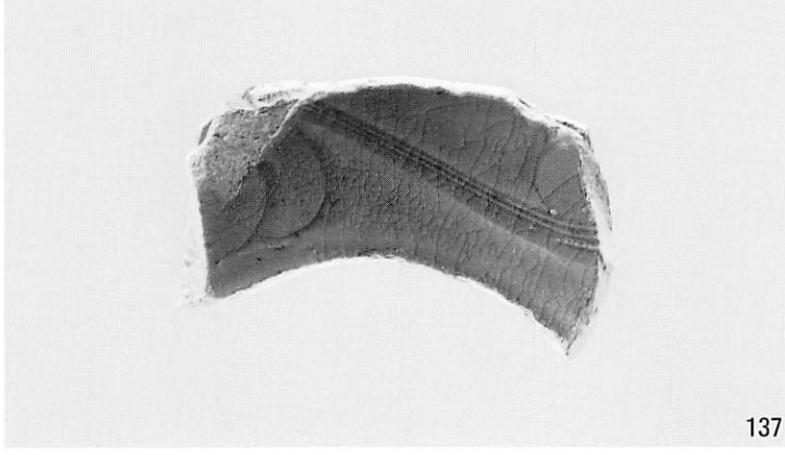

128


124

129


133


127


137

柱穴・地区出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく に
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）
副書名	曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）
巻次	２
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	青山　透，古瀬裕子，伊藤　実
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　ＴＥＬ082－295－5751
発行年月日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
そがわいちごういせき 曽川１号遺跡	ひろしまけん 広島県 おのみちしみつぎちょう 尾道市御調町 おおまち 大町	34441	150	34° 31′ 18″	133° 09′ 52″	20021021 ～20030117 20030407 ～20030523 20040106 ～20040205	1370 407 490	中国横断自動車道尾道松江線建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
曽川１号遺跡	集落跡	弥生 古墳 中世	住居跡 土坑 溝	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器	

要約	御調川南岸の南から延びる丘陵裾部に立地する。弥生時代から連続して営まれた集落である。調査の結果，竪穴住居跡７軒，掘立柱建物跡３棟，土坑11基，溝４条のほか多数の柱穴を確認した。竪穴住居跡の時期は弥生時代後期から古墳時代後期，掘立柱建物跡の時期は中世である。土坑の時期は弥生時代後期，古墳時代後期及び中世で，溝の時期は古代，中世である。なお，縄文時代晩期の土器片が出土した柱穴がある。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第18集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）

曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）

発行日　平成18(2006)年３月31日

編　集　財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町４丁目８番49号
電話 (082)295-5751　Fax (082)291-3951

発　行　財団法人広島県教育事業団
〒730-0011　広島市中区基町４番１号
電話 (082)228-8451　Fax (082)228-8441

印刷所　鯉城印刷株式会社